

















不道新相知

只言行路遠



不  
打  
家  
印



汀洲採白蘋

日落江南春

洞庭有歸客

遙相逢故人

故人何不返

春華復應晚





汀洲採白蘋

日落江南春

洞庭有歸客

瀟湘逢故人

故人何不返

春華復應晚

不道新相知

只言行路遠



正打不  
甲  
印



長風紫瀾を吹き捲く處、連弩巨蛟を射殺し、十丈  
の鐵網底ひしられぬ大わだつみに、紅玉の珊瑚  
をさぐり求めむと期せしものから、水馴棹、野川  
の流に舟いれて、かち渉する女の脛にもかゝる  
べきうき藻草かり載せしこそかひなけれやが  
てこれを書の名となしぬれば、世に出つべき折  
自然の季節にかなへらむがをかしきのみ。さは  
いへ、黄楊のさし櫛どり見む暇なき志賀の海女  
をまねびたらむには、此後かきあつめむ中に、せ  
めて五色にきらめく貝にても見出しつべくや。



藻かり舟目次

ま	ぼ	ろ	し(美文)	蝶	天	隨	一
ど	の	る	物	語(美文)	蝶	二	七
鄙	の	長	路(美文)	天	隨	二九	
軒	の	玉	水(韻文)	蝶	二	四一	
伊	豆	だ	よ	り(美文)	天	隨	五一
初	花	染(韻文)	蝶	二	六九		
蝦	夷	秋	花	譜(美文)	天	隨	八三
う	か	れ	あ	る	記(美文)	蝶	二
清	涼	境(美文)	天	隨	一〇三		
不	動	瀧(美文)	蝶	二	一一一		
雪	の	笠(美文)	天	隨	一三一		



藻かり舟



うき人の心に似たりとやいはむ曇りがちなる秋の空暮るゝわびしき  
 たそがれの程よりしてそぼふる小雨たい糸の如く荒れたる庭もせに  
 降りそいぎつ藤脂可憐の紅も明日こそはあせはてめはかなきは人の  
 上のみならトなど哀れさいよまさりぬ。  
 やがてどもし火を呼びつ形ばかりは坐禪の僧をまねびて何思ふとし  
 もなきさますれど星寒水の如くなれる冷たき荒壁の上にくすくすつ  
 れるわが影曇々として細く瘦せたるに秋水に照らしておのが身の薄  
 命をなげきわびつ卿須憐我我憐卿どうたひけむ名たゝるいにしへの

天 隨

波山躋攀錄(漢詩)	筑波の落葉(俳句)	木の間の寺(韻文)	澁團扇(和歌)	斷霞一片(俳句)	紅雨點々(美文)	千松島(美文)	疎鐘吟(韻文)	浦づたひ(美文)	歌の主(美文)
天	蝶	天	蝶	天	蝶	天	蝶	天	蝶
隨	二	隨	二	隨	二	隨	二	隨	二
二六九	二六一	二五三	二四九	二三九	二二九	二一七	一七七	一四九	一四五



風流女の恨もかくや打みだるいおもひは科戸の風にゆらめくはた雲も音ならずあつき心は野火に焼かる枯草にも似たり。

これかあらぬかその来るや珊々とし遅かりけりといひしかの香烟の中にほの見えし李夫人の俤はなほも心をくだくはしともなりにけむ。あゝ愚なりけりわれも今まぼろしの影にあくがれき。

ひととせ南極の雲に吟破せむとて破帽弊衫の身をそのまゝに颯然として都を出でつ。七旬の行程千里にあまりて飽くまで江山の眼福を全うし、いさゝか桑蓬の宿志に報ゆるを得たりしものからあはれなるわれは、そのかみ夢にだに經驗さりし一種のなやみを心の奥の奥に刻みてかへり來りぬ。こゝにはしめて知りしは涙の味と歌のちからと。

あまの戸渡る梶の葉に思ふことかきつけて雙星の歡合をいわひしは、わか望の絶頂に達せるときにこそありしか露は空明を洗ふて秋は

よく高き一夜み空のをちに飛ひし流星の一つを見てわれは覺えず地の上にたふれき。

ところの形勢をそのまゝの名にしたる磯の濱邊、月下の逍遙はいかにたのしき遊なりしよ。百合のかほりも高く朝のすゝ風吹きみちたるかの後園の邂逅はいかにわが胸をたのしくさわかせしか。さては別のうたけの筵にかきならず琴の音、高きは空を舞ひのぼる雛鶴の聲かど疑はれ低きは花かけしづかなるところに漏るゝ罪なき戀のさゝやきかど怪しまれしいみじく妙なる樂のしらべはいかにわか魂をしもさそひたるか。やがて八重の潮路の末遠くこき出だし舟の上に立ちて、ゲ

一デがいへりけむうら若きのぞみを封むたる心のやどを顧みつゝ、われはいかなる言葉もて彌勒の世までの幸を祈りしか。忘れむとして忘られす語れば長く筆にせばむづかし。

かの想像の力をかされる回憶は、すぎこし方のくさくさを眼前に再現せ



しめ、一の游娘としてあるときはかぎりなき慰藉なぐさめを與ふるものと聞けど、われは唯だ創痕の裂けしに似たる痛と苦とあるのみ。見よ、や一たひ溺没の餘の命を海にもうけたるものは、さゝやかなる流に浴するだに怯なるをわれは今むらくと湧き出てし感懐をうつしてせめてもの心やりどなし、後はふたゝ言はじ思はじ、又た筆にせじと決しぬ。むかし秋風高臺の酒に酔うて、人奴猶有封侯骨と浩吟しつゝ、劍に仗りて無邊の寥廓を睥睨に供したる豪興は、長しへに尋ぬべからず、鐵石の心腸今すでにとろけ去れるか、扱てもなまよみの甲斐なしや、幻の面影いかなれば、心の闇にわれをひき入れむとはすらむ、夢の名残いかなれば、胸のなやみにわれをくるしめむとはすらむ。筆のすさびのをはりに、はかくなむ。

ま山 おもひ寝のゆめ路はるかにかよひけりこゝろつくしのさくらし

世をすてつ世にすてられし我身には妻といふものゝなくてありなむ  
ひと葉ぶねかぢをし絶えて黒の瀬戸しほにまかるゝわかおもひかな

残月無光尙在櫂。 春燈黯澹薄寒添。  
可憐枕上夢方醒。 翠羽一聲花一簇。  
一枝玉笛有誰吹。 花霧霏霏深夜時。  
好向鷺鷥池畔立。 可憐新月畫蛾眉。

無題

青琴



と の る 物 語

(上)

蝶

一一



木がらしはたと吹きやみてさうぐじかりし庭の木立も静まりぬ夜  
 ははや四更になりぬらし  
 今宵のどののいのつになくうら寒うて炭は火桶に惜しけくもなうつ  
 げどもつめたき風の襟もとより襲ひくるかどばかりあやしうも身ぶ  
 るひせらるゝ夜半なるかな  
 疊の敷は十二枚ばかりも敷かれたる廣き座敷の片すみに松と呼ぶ齡  
 弱き女とたゞふたりねむたき眼をこすりつゝも世の人は今や夢の最  
 なかなるらむ休息の時を鼠を友として明かし暮らすわびしさこれも



つとめぞかし昔ながらの丸行燈の火影暗らく身も魂も細うちいまり  
ゆくやうに覺えて話もいつかどぎれ／＼に湯わかしの湯のたぎる音  
のみぞ勢ひよき

時雨か霰か瀧津瀬の巖に碎くるやうなる水の響き

『松どのあの物の音をきかずや夕暮の空のけしきにては今宵雨ふら  
むどは思はざりしに』

『なに雨とや』

と松はまばし耳そばだてしが

『わが耳の遠きゆゑかは知らねどたえてさる物の音はきこえず』とい  
ふ

さては妾が心のまどひなりけるかど靜に耳をすませばげに物の音は  
きこえぬやうなり

『いぶかしきこともあるものよわが耳にはたしかに水のひゞきの聞

こえたりしが』

首うちかたむくるを松はあざけるやうにほゝゑみて

『泉水の鯉の躍りたるにては』

といひもはてぬに

水の音はきこえぬ

『あれなりあれなりわがひが耳にてもあらざりけるよ』

われながらはしたなくも聲高うさけぶを松は

『まゝ姫君の御夢を驚かさむに』

と手をもて妾を制しさらに聲をひそめて

『たしかに聞きぬ魚の躍る音にても無きやうなりさりとてまた時雨  
にしてはあまりに激しからずや』

と妾が顔をうちまもりぬ



『さなり、妾もまか思ふが』

ものゝ音はやみぬ。……いな、やみしにはあらで途絶えしなり。二分、三分、四分……五分とは經たざる間に、再び、

音は前よりも激しうなりぬ。庭の雜木の梢にうなる北風の音かどきけ

ば、窓のもとなるむら竹聲なきに似たり。

『あやしき水の音かな、正一位さまの悪戯にては……』

『えッ』

とばかりけたい、まじき聲たて、松は顔の色蒼ざめぬ。

『何にか驚きし。その顔の色のおしきことは、死にたる人のやうに血のけもなくて』

とあやしめば、松は去ばし云ひ出でかねたるさまにてたゆたひしが、聲さへいたくうちわなゝきつゝ、

『例の話のにてはあるまじきや』

『をう』

例のときより、妾は頭に冷水をうち被せられたらむ心地して、身の毛

だつまでさむ氣を催し、われにもあらで松が軀に抱きつきぬ。

下手の障紙にはかに震動して、キ、と鳴く聲に再び驚かされ、願れば朦朧として人の影。

ものゝ祟りほど恐るべきはなし。御齡なほ弱くてみまかり給ひし先代の殿さま、青春の矢竹心のはりつよく、ひと度斯うと思したち給ひしこ

とは、よしや何人の諫め止むればとて、いかなる障害のおこればとて、成

遂げではやみたまはぬ御氣質のはやまりて思はぬ災厄を招きたまひ

しこと、少からざりし中に、これはまた御一家御一門の御なげきと、な

りし御あやまち——ある夜、御秘藏の名玉何者にか盗まれしこと、あ

りしが、御邸に仕へまつるほどの者共、残らず召し出して御吟味ありし



も、罪人たえてあちはれず室毎くを悉く検めさせたまひしかど在處  
 わからずはては中庭そと庭の草木をわけて探させたまひしにゆくり  
 なくも奥庭の片隅にいづきまつれる稻荷様の神殿の床下よりもどめ  
 いでしかばこれこそ定めて狐めが爲し業ならめ年頃深くも敬ひ祭  
 りたる人の恵みをうち忘れて予をたぶらかしつる心にくさよと烈火  
 の如く憤りたまひて人々の諫めをも聞き入れたまはず忽ち神殿の下  
 なる穴をあばいて狐を捕へさせ泉水の汀に高き松のしづ枝につりお  
 ろし御先祖傳來の村正のわざもの腕もみごと御手づから御成敗あ  
 そはしより殿さま遽に重き枕にうち臥したまひ更けては泉水のざ  
 わめく音しきりに夜毎くの御夢なりがたくいたくなやませ給ふこ  
 ど二十日ばかり薬も針もかひなくて遂にはかなくなり給ひしとぞ  
 —こは御隠居さま附きの梅橋どのが物語にて知りぬ  
 松が例のど云ひしは此事なり

この四五日御こちすぐれさせたまはぬ姫君のもしや執念深き正一  
 位様の御崇りかうぶり給へるにてはあらざるか。  
 御身の上のいと心もどなうてへだての襖にそつと寄りそひ紅圍のう  
 ちの御けはひを窺へばものになされ給へりとも見えで御夢まどか  
 なるさまなり。

胸なでおろしてもとの坐に着かむとする折しも、

かあんかあんかあんかあんかちいん  
 とさらに怪しげなる物の響の凍れる夜半の空気を透して耳を劈くや  
 うにきこえぬ火の見櫓の半鐘の音かそは常にきく馴れたるわが耳に  
 怪しどは思はぬどこはまた陰々として而かもかむ高く深林の奥より  
 ひいく木魂かど聞きなざるゝ物凄ささながらわが頭上に釘など打ち  
 こまるゝやうに覺えぬ。  
 松はかたへの毛布取るよりはやく頭に被りてうつ伏したるまゝ聲も



かすかに

『あゝ物の音は』

さきの水の響きと云ひ、今また怪しき此物の音、妾も何となう氣味わるう思はれて、どみにいらへも出でず、たゞ

『あの物の音は』

と鷓鴣返しに同じやうなることを繰りかへすのみ、總身氷のやうに冷えかたまりしかと思ひぬ。松は齒の根もあはずうちふるへり。

かあん、かあん、かあん、かあん、……

丁々の音は絶えず續けり。松はふたゝひせつなげなる聲をはなちて、

『お表の男だちを呼び起して來るべきか』といふ。

『さなり、かゝる時男だちの側に居たまひたらむには、何ぼうか心づよかるべきに』

妾は斯くは思へるものゝ、さすがに自ら起ちて行かむ勇氣もあらず、事

なき夜半にてさへ、薄氣味わるきほど物寂しき長廊下を、まして今宵の如き怪しきことの多かる夜に、お表へまで通はむことの恐しければ、

松はなほさらのことなり。

さきに静まりたりし木枯は、またさざましく吹き出でぬ。怪しき物の音は、細く長く、甲高うひいきて絶えざることをやゝ小半どきばかり、二人はさらに人ごゝちもあらず、耳ふたぎて聞かむとすれど、風のため、や、あやにくに側近うきこえて、氣も心も消え入らむばかりなりき。

しばし経て、やう／＼われに復りぬ。じつと耳そばだつれば、風の音は前にもまして激しうなりつれど、あやしき物の音はやみたるやうなり。松も妾もはじめてホツと太息つきたれど、胸の動悸はなほしづまりかねたり。薄茶などたてゝ心を沈めばやど、釜の前に坐らむとする時、またしても怪しきは、やはらかに疊を踏む人の足音、

みし、みし、みし、……



息をころしてうかいへばたしかに姫君の御寢室によりくるけしきなり。すは一大事。

かゝらむ時の宿直の役目と、妾は松に目くばせしつ、用意の懐劔に手をかけて、姫君の御側に駈けゆかむとしたりしが、心のみあせりて膚粟だち、腰うちすくみて立ちあがらむ力のなきぞ、われながらいふかひなき。さはれ、いつまでもためらはむには、姫君の御身の上の大事なり、恐しさは云ふべうもあらねど、わが身をかへり見る時にあらねば、松どかたみにはげましあひ震ふ足もとふみしめてこはくながら隔ての襖そど開きて内をのぞけば、たえて人のけはひもなし、静に進みよりて屏風のかげより御臥床をうかいへば、姫君は異りたるけしきもなくすや、くどやすませ給へり。

(中)

日頃は朝はやく起き出でたまふ姫君のけさは九時にもなりぬれど、未ださめ給はず。

松は箒をとり、妾は拭巾を持ちぬ、長く長き縁側を、片端より拭ひつゝ、ゆくに雨戸くりし時には、つゆ心づかでありしが、今見れば、怪しや、姫君の御寢室に近く、泥によごれし人の足跡のあり、くど残り。

『あッ』

と驚きて尻居に倒れし物音に、姫君は御夢や破れけむ、御寢室の内より妾を召し給ひぬ。

御額のきはより御首筋もどまで汗もしどいになりたまへる、姫君は、花のやうなる御顔に垂れかゝる洗ひ髪をうるさげに拂ひのけて、夜着の裏御寝衣の懐の中など、しきりに搔いさぐりたまひつゝ、



「寫眞を知らずや」

と唐突にたづねさせ給ふ、

「寫眞と仰せられたまふは」

「いたづらはせぬものぞ。何處へか隠しもてゆきしならば、疾くありか知らせてよ」

勿躰なくも拜まむばかりに仰せらるれど、妾はもとより知らざることなり。

「いかなる御方さまの」

と更に問ひ返しまるるを、姫君はせきたち給ひたる御けしきにて、

「知らざる筈はあるまじ、英さまの御寫眞を」

英夫さまとは御親戚の松平様の若さまなり。さてはと思ひ當りしとありて、うち點頭きたる妾が顔の色を、姫君は敏くも見てとり、たまひて、  
「それ見よ、隠したりとて色に顯はるゝものを」

「いかにか君様を欺き申すべき。松平様のことは、かねてより能くぞんじをり侍れど、御寫眞のことは絶えて」

「よべのどのゝは、そなたと松どにてありしと思ふが……寫眞のうせたるもよべのことなり、ふたりどもに知らずとはいはせじ」

とけしきだち給へど、松も妾も絶えて知らざることなり。——それと

もよべの足音とけさの足跡とは、まさしく曲ものゝ忍び入りたるにて、

姫君の御肌はなさせ給はぬ、松平様の御寫眞をぬすみゆきしか。寫眞の

盜賊は、未だ聞きたることもなきに——たいしは、また例の正一位様の

悪戯にや。

姫君はひたぶるに兩人を疑はしく思し召して、さまぐに言ひ解かむ

とすれど聞き入れたまはず、はては啼聲さへたてしむつがりたまひぬ。

折柄此處にいらせたまひし御腹なる御隠居さま、何事ぞと、このよしを聽かせたまひて、姫君にうちむかはれ、



「御身はなほ英さまのこゝを思ひあきらめたまはぬよな御いとけな  
 かりし頃より行すゑ定りし御身を棄てよその花を移し植ゑたまふ  
 が如き方さまをいつまでとてかさばかり慕はせ給ふことやはある何  
 事も妾にまかせ置きたまへすぐれて良き君を迎へさせむに」  
 と御背なでさすりて、いたはらせ給へど、姫君は只泣きふしたまひて、御  
 いらへもしたまはず。

御隠居さまも御涙ぐませ給ひて、なほ何事をか仰せられむとせし時、松  
 はあはたしげに妾がそばに來りて、

「梅橋どの、御身と妾とを召したまへり」といふ。

(下)

十日の月は西に沈みぬ、黯澹たる夜氣、一しほ物凄く、庭の片隅にぬつと

伸びたる一本杉の梢のあたり、妖しき寒星の光り空にきらめきて、かす  
 かに泉水の面にうつれり。  
 御神殿のともし火消えて、木がらしの音も更けゆく亭の内に、妾は梅橋  
 どのとたいふたりきびしき寒さをかこちつゝ、つくねむとして夜半  
 の鐘を待ちけるなり、そは昨夜の怪をきかむがためと思へば、魂も身に  
 そはぬまで恐しうて、胸の浪高く騒ぎぬ。

待つ身になるなどは、たい待ち遠き時のみの謂ひにはあらざるべし。か  
 らる時、かゝる處に、こはき物の正體見とけむとて、時刻の移るを待つ  
 心細さはいかに、一時間も僅に一秒一分の間に過ぎゆくやうに思はれ  
 て。

金龍山の鐘の音は二時を報じぬ、すは怪しき響のおこる頃よと、動悸は  
 いよ／＼躍るなりけり。  
 息をころして耳をそばだつれば、何處ともなく地を踏む足音のきこゆ



るやうなり。もしもわが心のまよひにもやと、梅橋どのにさゝやけば、  
『妾もきけり』といふ

果して怪しき水の音は始まりぬ。今までは妾が言葉を疑ひたりし梅橋  
どのも、まのあたり此音を耳にしては、などか驚かざらむ。ひたと妾が軀  
によりそひぬ。

恐しきものほど、なほ見まほしきものなりとよ。そつと障子に穴をあけ  
て、こはくながら外面を窺ふに、闇はあやなくて一寸さきも見わきが  
たし。音するかたをしるべに、目もはなたで見やりけるほどに、やうく  
闇の物を見るに馴れて、おぼろげながら木立のかけ、石燈籠の形など見  
とめつ。

星の光りをたよりに透し見ることなれば、まかどは見わくるよしもな  
けれど、白きものゝ泉水のほとりにうごめくやうなり。

『あれ』

とばかり、梅橋どのにまがみつけば、梅橋どのは身ぶるひしつゝ、妾が肩  
にまかど恚りかゝり、障子細目にひらきて外の方をうち眺め、

『何ものも見えず』といふ

『それは暗夜に馴れざるがためなり。まばし眼を注ぎたまへ。やがてあき  
らかに見ゆべければ』

妾がいふまゝに、まばし身じろきもせで窺ひ居たりしが、やうく怪物  
を見とめたりしと覺しくて、

『げに御身が言葉の如く、白きものゝ蠢くやうなり。あれ見たまへ、今は  
何れにか立ち去らむとするけしきの見ゆるに』

白きものゝ姿は静に動きはむぬ。さすがに、跳りいで、手ごめにせむ  
ほどの勇氣もあらねば、たゞそのうごめき去る跡を見失なはむとつと  
むるのみ。



怪しきもの影は、泉水の橋を越えて、彼方の隅なる神殿まぢかく立ち去るさまなれど、あはひ遙に隔りてのこり惜しくも其姿を見失なはむどしつ。

されど、そのまゝに打すて置かむも心ゆかぬわざなれば、なほ伸び上りて其行衛を見とめむとせし時、一陣の魔風襟もどをかすめて、妾は思はず身をちいめぬ。

かあん、かあん、かちいん………  
たちまち細くかむ高き聲は、陰々と後長うひいて鳴り出だせり。

『あれ聞きたまひしか』

どさゝやけば、梅橋どのはいらへもなく、點頭くのみ、齒の根も合はずがツツと淋しげなる音たてし。  
木枯は吹きしづまりぬ。丁々として凍りし空に響く物の音はいよゝしるく、耳を劈くかどはかり近う身にしみて聞こえぬ。梅橋どのは、もはや

窺ひ見む勢ひもなく、や妾が身にひたとよりそひ、袖に顔を掩ひてうち伏したり、妾も悚然と魂きえぬる心地、梅橋どのが膝の上うつぶしぬ。

怪しき響は、やうく止みぬると覺し、ふと面をもたげて、泉水の方を見やれば、白き影は、はや其處にあらはれたるなりき。

そつと梅橋どの、袖をひきて共にせむやうを見てありぬ。

あやしきかないぶかしきかな。白き影は、一步く、姫君の御寢室にちかう進みて、はや縁側の雨戸を開きて、忍び入らむとす。

すは姫君の御身の上よと、梅橋どのは恐しさをもうち忘れ、跳り出でさ

ま、  
『曲者』

と呼びかけて追駈けゆきぬ。白き影は、はや内に消え入りたり。梅橋どのも續いて内に入りぬ。



な 加 ば 物 好 きの 心 に 加 ら れ な 加 ば 物 凄 さ の 恐 れ に わ な き つ し 妾 は  
か の 怪 し き 物 の 音 の ひ し き し 處 を 見 と け ば や と 用 意 の 雪 洞 に 火 を  
う つ し て 袖 に 風 を ふ せ ぎ て 泉 水 の ほ ど り に 至 り ぬ そ の あ た り は 一 面  
に 水 の し ぶ き 散 り は ね て つ ち 濕 へ り

な ほ 神 殿 の 方 を さ ぐ ら ば や と 石 橋 の 上 に 加 へ り し 時 た が 人 魂 ぞ 流 星  
長 う 尾 を ひ い て わ が 頭 の 上 を 飛 び ぬ

見 上 ぐ れ ば 三 百 歳 の 老 木 雲 に い り て 一 團 の 黒 き 加 げ 空 を お ほ ぶ か と  
ば 加 り 陰 森 の 氣 肌 を 侵 し ぬ

神 殿 の 周 圍 く ま な く 探 し た れ ど 異 り た る さ ま も 見 え ず め ぐ り く て  
道 は 一 本 杉 の 前 に ゆ き と い ま り つ 何 氣 な う 燈 火 さ し 出 だ せ ば 妾 が せ

た け ば 加 り の 幹 の 半 に お し う も き ら く と 光 れ る も の あ り た ち よ り  
て 熟 く 見 れ ば さ て も 恐 し や た し 加 に 男 の 姿 と 見 ゆ る 一 枚 の 寫 眞 の 顔  
ど 覺 し き 處 へ あ て 二 本 の 大 釘 の 無 慙 に も 打 ち こ ま れ て あ り け る な

り  
あ ま り の こ と に 駭 か さ れ て た ぢ く ど 二 足 三 足 よ る め き 加 へ り し 後  
の 方 に 加 へ る と 笑 ふ も の あ り

雪 洞 の 火 は 風 な き に 消 え ぬ

怨 情

紅 雨 樓

す だ れ が け げ て た な や め は  
け ふ も ひ れ も す な が め た り  
た れ を し の ぶ み だ れ か も  
か ぎ り し ら れ す み ゆ る な り



頼光はかくこも知らで、つかれたまひし御風情、肘を枕の一睡を覗ひますして飛びかゝれば、茶道が持ちたる獅子丸の忽ち鞘を抜けばなれ、双向に飛でひら／＼／＼ひらりひらりさひらめけば、蜘蛛は恐れて飛びすさり、開けばかゝり向へばあさへかけもどり、ためらふすき間もあらずさまじ、まなこの光りかくやくき口より炎を吹きかけふきかけ、又かけよればきり／＼／＼、はためき渡つて土蜘蛛をはつたき切りつけ………

鄙の長路

天 隨

(一)

はじめの長旅をなして、奥州街道をたどりし折のことなり。あしたに飯坂の宿を出て、十三里の路を駆け通して、たそがれの頃には本宮につきつ、なほ程を貪りて、四里のさきなる郡山まで行かむとす。同行の友二人は、汽車發着表を檢し、八時何分といふに出でつべき汽車あれば乗らむといひ、われは待つ間の短からねば、歩まむといひ、互に屈せねば、遂に引き分れつ、彼等は停車場の方へもどり、われのみ急進して、九時頃につきぬ。約束せしことなれば、先づ停車場にいたり見るに、彼等の影だになし。されば宿取りたるにもやと、その近傍をはじめ、町中残る隈なく問ひ



尋ねしかども、遂にさがし中てず。玻瓈燈の光きらめきて、門前は水打ちきよめたるいかめしき家のありしに、これも宿屋にこそど立ち入りて問へば、むれ居たる粉白黛緑の女ども、あやしきわが服装に驚きしにや、口をあきたるまゝ、碌々のいらへだにせず、訝しさのあまり、目を四邊にくばりて見めぐらせば、これなむ妓樓なりける。近眼の悲しさには、かゝる過をもなしけるなりとて、頭かきく、笑の聲を跡に聞きて、ぞ立ち出てし。扱ていよく、友とめぐりあはねば、われひとり今宵の宿をからむとて、諸處まごつきしが、例の事とて泊めて呉るゝものなく、詮方つきて、すでに疲勞したるものから晝夜兼行も経験の一となるべければ、寧ろ今より白河迄こぎつけむかなど、少しは無法なる考をも起し、さらば草鞋を求めむものをと、あさりつゝ、ゆくに、夏の夜も十二時ごろとなれば、大方の店は戸を鎖して、えかはせず、いつしか町もゆきすぎて、半里あまりも來り、道傍の一家に立ち寄りけるに、こゝは宿屋なれば、泊り玉へとい

はれて、張りし心の弓もたちまちに弛み、渡りに舟とよるこびて、つひに草鞋を解きぬ。家は狭からぬものからむさくるしく、風も通らぬ室中の生暖かさ、極めて快からず、飯參らせむとて出て來し給仕の女は、ゆがみし形の薄黒き顔に、面をかぶりし如く、白粉をぬりかさねたるが、油煙を吹きて、黯澹たる手らんぶの光に映しては、さながら化物の如く、いづれ悪しき商買する女と見たる、よも僻目にはあらざるべし。されば、たゞ鬼窟に入りし如き心地して、悲しさ、苦しさいはむ方なし。かくて、又た變な奴ど、一つ蚊帳の中に入りしが、蚤に攻められて、眠り得ず、眼はいよ、く、牙えて、萬感潮の如く、心頭に湧き、みじか夜の明くを、遅しと待ちかねつ、つひに一夜を不眠にあかし、東の白むを待たずしては、ね起き、自ら雨戸くりひらき、さりげなく欄に凭りて眺む。路を埋めし曉の靄の中より、進み來りし二人、うれしやわか道づれの友なりける。やがて飯くらひて、發せむとせしが、宿の者は今起きしばかりにて、中々埒あかず、しばく、促



し、漸くに朝げすまして、立ち出てぬ。こゝにわが友の語るを聞けば、所謂八時何分は午前なりしを、午後と見違へしなれば、待つことときありしも、汽車の出てなむ筈もなく、やむなくわか跡を追うて郡山につき、われを尋ねしも見當るへきやうもなく、二人なるを力にさまゝの、手敷を費し、辛くも宿をとりつ。今朝は早く發し、道すから尋ねもし、待ち合せもせむと、おもひしなりとぞ。

(二)

第一回の登嶽をなし、折のかへるさ、名たゝる走り路の爛沙を蹴立て、北口なる三合目の小屋につき、宿志を遂げ得しよろこひの餘りには、田舎酒の酸味かゝりしをいとはで、傾けしは幾十杯なりけむ、すぐには酔はで、脚も氣もたしかなるまゝに、我來萬里、駕長風、絕壑層雲、許盪胸といへる朱文公の詩など、高聲に朗吟しつゝ、下りけるに、坂路はすでにつ

きて、かや野はひろく、夏の日の亭午すこし過ぎたるに、雲の峯の空中に高くゆるぎ出て、眺乏しく苦のみまされる三里の道を馳せ通せしに、快からぬ酔は一時に發し、やがて野末の孤屋にたどりつきし時には、殆んど人事を辨せぬ斗りなりしが、意地きたなくも、いろくのもの腹に押しこめければ、忽にして肚裡鳴動し、きたなきものあたりにまきひろげしまゝ眩倒し、生死の間のねむりに落ちぬ。かくて二三時間もすぎし後、呼びさますものあるに、驚き起てば一人の女、君は今日船津まで行かむといひ居給ひしよしなるが、笑止や、日もはや傾きたれば、かゝる惱みの折にはむつかしかるべし。吉田までにて二里餘りはあり、歩むと定めつらしとおぼすらむ、入らぬ世話の出過ぎたりと云るゝか知らぬぞ、こゝに馬を雇ひて來れり、草をつみたる上に跨ることなれば、やゝ危く覺さむが、歩むにはまさるべしなどいふ。見れば、富士詣の女なりけり、茶店の老婆は、にらむやうにわが顔を一瞥し、この御人は、つれを待ち合す



間のことゝはいひながら、二時間ばかり前より、こなたを介抱せられし  
 なり、といふに、われは身のたしなみを忘れて、知らぬ人にまで厄介をか  
 けゝることの、耻しく、盡しがたき感謝の意を、短きことばに述へ終りて  
 馬に上りぬ。かの女はひきどめて、君はかの五合目のむろにて赤飯を食  
 ひ給ひしなるへし、かの者はよく中るとこそ聞けば、この後はかまへて  
 なくひ給ひそなどいふに、われもあからさまに、酒に中てられしともい  
 ひ出しかねつ、只うなづくのみ。女は一包の袋を取り出し、これは麥粉な  
 り、味よしとにはあらねど、旅寝の宿のつれづれの折は、砂糖に和して味  
 ひ見給へとて、無理に受け納めしめぬ。どこまでも親切にして、慈悲は菩  
 薩の如き女かなど、今は別れのたい一目、その顔をぬすみ見けるに、店の  
 老婆のにくさげなるとは、全く變りて、さまでは賤しからず、やさしげな  
 る三十ばかりの女、かつてわれを弟の如くにいつくしみ呉れし親戚の  
 一女のさきにみまかりしものと、どこやら似通ひて見ゆるに、今も忘れ

す。

(二)

萬世の師表としも仰かるゝ、尼聖も陽虎に似たりしばかりにて、一たひ  
 は宋の地にくるしまれしと、かざるたうとき人のためしをひくに侍ら  
 ねど、われもかつていと似たる事のありけり。北陸に遊ひしとき、能州に  
 入りて石動山下をすぎけるに、捕吏の怪しむところとなり、あはや罪な  
 くして、縲紲に身をけがされむとしけるが、百方辨疏の末、おほひかゝり  
 し疑の霧はやうやくに晴れつことのもとは、問へば召捕るべきすぢ  
 の罪人の容貌より服装まで、全くわれと同じきよしにて、はては雙方一  
 場の哄笑に終りしぞうれしき。この時のわが服装、古かばんを肩にかけ、  
 古き草帽を戴きたるは、例の如く、塵と汗とに縞も分らずなりし筒袖の  
 單衣、わづかに肘に及ふほどの短きを、着たるなりけり。



ひと、せ木曾の山路に行かれて、須原といふ驛にて宿を求めしにある  
 は、秋蠶飼の取り込みといひ、或は御嶽参りのもの溢るゝばかりといひ、  
 或は病人ありといひ、宿かすもの絶てなし。これより二里さきに、立町と  
 いふ村ありと聞きしかは、勇を鼓して程を貪り、九時ころにつきて村中  
 の旅店を盡くめぐりしに、前と申し寸法にてはねつけられたり。われは  
 孤影蕭然として、服装もいづもながらのちど可笑ければ、田舎人の目に  
 はあやしの者どうつりけむ、無理ならぬこと、はいへ、十軒が十軒相談  
 せしやうにやられたるには、腹立てざるを得ず、憤々然として立ち去り、  
 駐在所にいたり、查公を率ゐて來らむとせしに、公用のため福島に赴き  
 しといひ、村長はと問へば、又二里のさきなる上松に住むといふに、詮方  
 つきて進退谷まり、足は疲れつ、腹は減りつ、魚服の白龍豫且のためにく

るしめられし恨もかくや、さては商君が昔をさへおもひ出で、また可  
 憐なる西の國の歌よみが、

Remote, unfriended, melancholy, slow

Or by the lazy Scheld or wandering Po,

Or onward, where the rude Carthian boor

Against the houseless stranger shuts the door, . . . . .

ど吟しけむ、哀れも今はわが身の上におりぞ、ぞ忍ばれし、それも春なら  
 ば、木の下かげを宿として、草を枕に、花を伽なる風流もあるべきを、悪蛇  
 毒虫の多き夏は詮なし、蜘蛛の巢に封せられたりとも、古社<sup>ふるやしろ</sup>さては乞食の  
 小屋にてもあらば、夜露だけは凌ぎ得へきに、又た見あたらず、眞夜中す  
 ぐるころまでも、まどひありきしに、世に情ある老嫗にいたはられて、疊  
 の上にやすらかにねむりしは、うれしかりき、谷川の水のいともすみて、  
 覺えず、深省を發しける折、さきには腹立のあまりに、噴<sup>ふ</sup>恚の焰<sup>えん</sup>天<sup>てん</sup>を衝き、



強秦の相位に上りし范雎も、そのむかしは客溺の餘より出てたりとこそ聞け龍となるか虎となるか行末は知られぬこの身に天もし生殺與奪の大權を以てたいの一日假すことあらむにはわれにつれなかりしこの一村の頑民どもに峻刑を加へてくれむずどかりそめにもおもひし心の狭く拙かりしを悟りて愧ぢぬ。

(五)

汽車を稻荷にて下り、なつかしき友を巨掠湖上に訪はむとて、深草の里をすぎけるに、雨蕭々として降り出しぬ。鎮西千里の長旅のかへるさ跡は五六日、雨の用意のごさも最早要なしとて、今朝宿を出てし時、置土産にせしこと、悔めども及ばず。いつしか路を誤りて、裏町にかゝりければ、車も見出し得ず。一里ばかりの間、しぼるばかりに濡れて、やがて淀川の觀月橋をわたり、隄にさしかゝりしに、一しきり降ります大雨は、おぼえ

す、とある家の檐下にかけて込て、志ばしいこひつ。そのむかひの家なる人、手まねきしてわれを呼ぶに、何事ぞと近よれば、あまりに御難澁と見まゐらするに、この傘進せむといふ紙一枚もたいにては呉れぬ今の世に、古りたりとも、させぬまでにはあらぬ一本の傘。惜げもなく見ず知らずのわれに、おくりし仁人のめぐみ、謝するに、ことばなきまでうれしかりき。嗟乎、われも丈夫なり、好し、期せむかな、怨は大なりとも、忘れて恩は小なりとも、忘れざらむを。

宮城野や色なき風に夏の露

曉 臺



虫 虫 市 罪 け き  
 買 賣 に な さ の  
 ふ る ひ な き は ふ  
 人 人 さ 虫 東 西  
 は は く を 郊 の 野  
 こ せ も と の 草  
 ち に な ら 露 を  
 の の は へ き ぶ  
 た た ひ ひ け  
 め め か て み け

虫 賣

春雨や菜飯にさます蝶の夢……燕村

軒の玉水

蝶

一一

驅馬歸來病未愈。故園西望路悠悠。  
 斜風十里雨聲晚。空翠一天山色秋。  
 瘦損丰神憐倦鶴。蕭閒心事羨眠鷗。  
 杜鵑叫斷暮雲外。依舊淒涼游子愁。

杜陵客中得病即事

青 琴



(一) 猿 曳

笑<sup>〇</sup>見<sup>〇</sup>  
 ひ<sup>〇</sup>ず<sup>〇</sup>  
 の<sup>〇</sup>や<sup>〇</sup>  
 う<sup>〇</sup>媚<sup>〇</sup>  
 ち<sup>〇</sup>賣<sup>〇</sup>  
 に<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>  
 な<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>  
 み<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>  
 だ<sup>〇</sup>ざ<sup>〇</sup>  
 あ<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>  
 り<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>

手<sup>〇</sup>母<sup>〇</sup> 襦<sup>カ</sup>格<sup>カ</sup>  
 織<sup>〇</sup>が<sup>〇</sup>襦<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>  
 の<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>  
 衣<sup>カ</sup>に<sup>〇</sup>け<sup>〇</sup>ゆ<sup>〇</sup>め<sup>〇</sup>  
 に<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>た<sup>〇</sup>  
 ま<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>ぬ<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>  
 さ<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>ひ<sup>〇</sup>檻<sup>カ</sup>  
 ら<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>ど<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>  
 め<sup>〇</sup>わ<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>う<sup>〇</sup>  
 や<sup>〇</sup>ざ<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>ち<sup>〇</sup>

人<sup>〇</sup>人<sup>〇</sup>  
 買<sup>〇</sup>賣<sup>〇</sup>  
 ふ<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>  
 ひ<sup>〇</sup>ひ<sup>〇</sup>  
 ど<sup>〇</sup>ど<sup>〇</sup>  
 は<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>  
 色<sup>〇</sup>錢<sup>〇</sup>  
 の<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>  
 た<sup>〇</sup>た<sup>〇</sup>  
 め<sup>〇</sup>め<sup>〇</sup>

遊<sup>カ</sup>け<sup>〇</sup>  
 廓<sup>カ</sup>に<sup>〇</sup>  
 賣<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>  
 も<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>  
 り<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>  
 ひ<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>

け<sup>〇</sup>が<sup>〇</sup>  
 れ<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>  
 知<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>  
 ぬ<sup>〇</sup>人<sup>〇</sup>  
 の<sup>〇</sup>子<sup>〇</sup>  
 を<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>

色<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>  
 き<sup>〇</sup>花<sup>〇</sup>  
 を<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>  
 つ<sup>〇</sup>め<sup>〇</sup>  
 き<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>

雪<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>  
 だ<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>  
 ろ<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>  
 こ<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>  
 の<sup>〇</sup>國<sup>〇</sup>

うかれ女

す<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>  
 い<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>  
 し<sup>〇</sup>ず<sup>〇</sup>  
 き<sup>〇</sup>や<sup>〇</sup>  
 中<sup>〇</sup>歌<sup>〇</sup>  
 に<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>  
 う<sup>〇</sup>ひ<sup>〇</sup>  
 ら<sup>〇</sup>ど<sup>〇</sup>  
 み<sup>〇</sup>ふ<sup>〇</sup>  
 あ<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>  
 り<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>

露<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>瓜<sup>〇</sup>軒<sup>〇</sup>  
 の<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>  
 味<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>一<sup>〇</sup>つ<sup>〇</sup>  
 に<sup>〇</sup>廣<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>  
 は<sup>〇</sup>野<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>せ<sup>〇</sup>  
 ま<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>う<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>  
 さ<sup>〇</sup>草<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>籠<sup>〇</sup>  
 ら<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>  
 め<sup>〇</sup>ど<sup>〇</sup>ど<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>  
 や<sup>〇</sup>こ<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>



け親古小  
ふ爺きぎ  
のはむる  
所<sup>ま</sup>頸<sup>う</sup>し<sup>さ</sup>  
得<sup>け</sup>のろが  
を<sup>ふ</sup>を<sup>ひ</sup>  
う<sup>く</sup>ろ<sup>く</sup>  
しろぐ一  
けよれ枚  
りりばの

(三)

別ひた共  
れどどに  
くつり親  
長つ爺  
に屋きを  
入のたい  
り隣るた  
にり浅は  
け同草り  
り士のて

小こ  
猿れ  
がも  
ど浮  
も世  
のの  
角な  
兵り  
衛は  
獅ひ  
子や

家親  
路爺  
ど待  
もた  
にふ  
どぞ  
慕猿  
ひま  
くは  
るし

(二)

猿猿熟<sup>ま</sup>誰  
によ柿<sup>し</sup>が  
ひりに饗<sup>ま</sup>  
か赤似<sup>ま</sup>應<sup>ま</sup>  
れう<sup>た</sup>の  
て酔<sup>る</sup>屠<sup>る</sup>  
もひか蘇<sup>ま</sup>  
りしほの  
けれの香  
りて色や

ふひやあ  
くどどし  
ろ日立た  
もちち小  
重<sup>ま</sup>出<sup>ま</sup>猿  
きのでを  
夕塵し背  
まを猿に  
ぐあ廻負  
れびしひ



妻<sup>め</sup> 希<sup>の</sup>望<sup>み</sup>の光を前途に仰ぐも  
 人<sup>み</sup>みなつれなき暗<sup>や</sup>黄<sup>み</sup>の世界に  
 可<sup>い</sup>憐<sup>な</sup>や面<sup>を</sup>をそむけて泣きぬ  
 妹<sup>は</sup>は底<sup>か</sup>く音をぬすみて  
 米<sup>は</sup>櫃<sup>今</sup>はや空しくなれるを  
 眼<sup>め</sup>脂<sup>は</sup>吸<sup>ふ</sup>と唇あてぬ  
 妹<sup>は</sup>は柔<sup>な</sup>膝<sup>に</sup>枕<sup>に</sup>かして  
 わ<sup>れ</sup>れ眼<sup>を</sup>やみて病<sup>に</sup>床<sup>に</sup>なやめば

妻

小<sup>親</sup> 親<sup>餓</sup> 錢<sup>米</sup> 米<sup>三</sup>  
 猿<sup>爺</sup> \* 渴<sup>を</sup> 爺<sup>十</sup> 十<sup>合</sup> 三<sup>合</sup>  
 は<sup>厨</sup> \* を<sup>凌</sup> ど<sup>小</sup> 錢<sup>に</sup> 合<sup>に</sup>  
 爐<sup>に</sup> \* 凌<sup>ぐ</sup> 小<sup>猿</sup> に<sup>た</sup> に<sup>み</sup>  
 の<sup>米</sup> \* に<sup>が</sup> 猿<sup>ら</sup> た<sup>た</sup>  
 火<sup>を</sup> \* 餘<sup>り</sup> が<sup>一</sup> ら<sup>ね</sup> た<sup>ね</sup>  
 を<sup>ど</sup> \* り<sup>あ</sup> 日<sup>ど</sup> ど<sup>ど</sup>  
 吹<sup>げ</sup> \* あ<sup>り</sup> の<sup>も</sup> も<sup>も</sup>  
 き<sup>ば</sup> \* り<sup>の</sup> も<sup>も</sup>  
 ぬ<sup>ば</sup> \* り<sup>の</sup> も<sup>も</sup>

茶<sup>親</sup> 親<sup>緡</sup> 緡<sup>に</sup> 小<sup>猿</sup>  
 碗<sup>爺</sup> 爺<sup>に</sup> 猿<sup>は</sup>  
 に<sup>は</sup> 通<sup>し</sup> 錢<sup>を</sup>  
 盛<sup>米</sup> 米<sup>を</sup> し<sup>を</sup>  
 り<sup>て</sup> か<sup>て</sup> 選<sup>り</sup>  
 三<sup>つ</sup> き<sup>あ</sup> 九<sup>百</sup>  
 あ<sup>あ</sup> 百<sup>だ</sup>  
 ま<sup>つ</sup> 文<sup>し</sup>  
 り<sup>め</sup> 文<sup>し</sup>



若 春 け 藻 の 五 天 春 ひ ち  
 き の む 汐 の 百 の を と も  
 を ま り た の 重 の こ 夜 へ  
 の う は く の の 出 ば  
 こ け ほ 火 の 浪 づ こ  
 の の そ の り を る は よ  
 身 あ き た あ 照 は ひ  
 ひ る 蛭 え ふ ら つ 年  
 と も が 家 ぐ す と 日 越  
 つ の 家 くら と き 加 し  
 を を も に む き げ の

舵 な あ 世 寄 一  
 樓 み や た 邊 を 葉  
 に に つ い な 住  
 よ ま る び ぎ み 舟  
 り か 襦 出 さ よ  
 て す の づ に し  
 な る 手 る た の  
 が 一 も 茅 い 浦  
 む 葉 た 淳 ぬ よ に  
 れ ぶ ゆ の ひ さ  
 ば ね く 海 て へ



を越せば下田街道に出でたり。  
 むど衣手さむく天の河原の星くず一つ宛消え失するを仰きつゝ山一つ  
 わが衣手さむく天の河原の星くず一つ宛消え失するを仰きつゝ山一つ  
 星かすけくも残れるが認められつ朝あらし潤道の餘寒を吹き上げて  
 するけしきをかしく蠟涙積んで堆をやしつらむ指月殿裡の燈火一  
 り深くたちこめて墨繪の山の影ほのくらく満峽の樹影樓影高低疊錯  
 びか夢をし破られつゝ明くればつとめてたち出づ虎溪橋下の水けぶ  
 に似通ひてさびしく覺えたる夜もすがら耳なれぬ谷川の音にいくた  
 どりねてさしも宏敞なる屋裡の人氣まれなるはひたすら山寺に在る  
 修善寺のいでゆにてはことばに名たゝる宿どかや淺羽の三層樓上にひ

伊豆だより

天 隨

見つゝや妻のなげくらむ  
 たゞよふ沖のいさり火を  
 たつ浪あらし風の夜は  
 磯邊にたちて夜もすがら

漁 火 紅 雨 樓

浪塵のちまたに置きかねて  
 をまくらのたびごろも  
 ころもはうすく風さむし  
 夜半の寝ざめわが友はし  
 淡路の千どり紀伊のつき  
 淡路の千どり紀伊のつき



行くこと幾許ならずして、右方の山崖より落ち来る細流の迅駛するに、おほつかなき板橋を打渡したるかあり。左方は狩野川の本流にして、なほむかひの溪間より流れ出つる大見川といふを併せ、三派の水、こゝに合注せり。立野をすぎて、太平にいたれば、右方の斷峯の頂よりかけおろしたる一條の素練を、木の間がくれに見る。旭瀑とかや、高さ三十丈の呼聲のみは凄しけれども、瀑下に就て仰げば、巖壁傾斜して、稜角かどくしからず、水流まばらに粘付するのみ。加ふるに、瀑壺といふものなくて、絶えて、爽快の活趣をそなへざるは、口惜し。これより、行く手の道は、次第に爪先上りとなり、狩野川左に狭くなり、ゆきつ。清瑩玉を欺く流の、廻曲盤旋し、列を亂せる奇巖の怒起するにせかれ、烟を揚げてたぎり落つるさま、形容するに辭なし。時に曉靄わづかに披いて、旭日東の山の端に射かり、毫光萬道、天半に亂靡するよど見えしが、のぼり放れし金環は、盤よりも大なりきやを、手を笠に加へて見上ぐる前面には、彩色まばゆ

き横雲の上に、いかめしく、抜き出でたる天城の連山、紫蓋翠柱、森然として、排列し、秀色眉端に逼り來るとぞ覺えし。

松か瀬にいたれば、路や下り、溪流に架せる小橋を渡りて、また登陟す。ほどなく、青羽根の里なり。天城の山、いとも近くぞなりまされる。されど、麓までなほ二里はありと聞きて、夕くれまでに、下田に漕きつけむことのむづかしきを覺えて、ひたすらに案しわづらふ。扱て出口より、月が瀬にいたる道すがら、水を隔て、雲か根の里を見る。すべて地名の雅なるは、心にしみ、みて覺ゆるものなるに、豁、戸春すでに到り、早梅一枝、嫣然として人をむかへ、烟霞の導をなせるもうれしく、水のたゞまひ、山の色の、自らすぐれたる幽僻の風光、人をして、長安名利の境を離れたるを、さどらしめ、心も空にながめほれつゝ、むかし駿河の俳人乙二といへるが、こゝに來りて吟し出せし、謠調の一首、

あれおもしろの里々や、こゝに松か瀬、かしこに月か瀬、むかひはと木



こりに問へば、雲か根と、指す方やほとしぎす。といへるも、むべなるかなとぞうなづきたる。

門野原といふを過ぎ、又た溪邊に下り、大きな獨木橋を渡れば、田澤の里にいたる。登々たる逕路の傍、木立ふかきところ、一字の破廟あり、大禹をまつる。このあたり、洪水しばしに到り、山際の田圃潰崩し、橋梁墜落すること常なれば、相模酒匂の文命堤などとおなじく、かくはしつらへしなるべし。

市川を経て、湯か島にいたる。地勢南に天城の山を負ひ、その餘脈北走して、こゝに大溪澗をなし、狩野川の急湍、濘々として貫流す。溪に倚りて、人家數十戸、温泉處々にあり、幽邃の境たるに庶幾し。初めは一浴を試みむこゝろなきにあらざりしが、道をし急ぐの折柄、むげに打すぎてける。

これより、嶺路一條、崎嶇として天城の山に涉り初む。この山、むかしは樹木叢茂して、頗る幽深の趣に富みきといふなれど、今は大方樹木を切り

倒したるか上に、新道を山崖に通せむとて、工事を起し居れば、いかて童山と變せざるへき。二里許にして、一の廣野めきところに出てつ。淨蓮寺瀑はこのあたりと聞き、路を問ひ、灌莽を排して右に行くこと二三丁、一斷崖の頂に立ちて俯瞰す。峽勢壓迫して、石壁高さ數十丈、水流其頂より飄下し、一大水簾を懸く。その一瀉して下るさま、殊に壯快なり。之を旭瀑の曲折するにくらぶれば、神將と天女の差ありといはまほし。唯た惜しむへきは、路の瀑下に至るへきなきことなり。留賞多時にして去る。絶頂こゝより一里半許と聞きしあたりより、路は覺束なきまで細くなり、林を穿ちつゝ、いたる間に亂石怒起して、鞋底を刺し、險機半は斷えて、脚もふるふばかり、嵐氣袖に入りて重く、時に怪禽の叫號するを聞く。旅思自ら愴然たり。むかしは更におそろしくて、猛獸の人を害することも珍しからざりきと。か。

からくも頂を窮めて、南に下ること數町、一茅店を得ていこふ。眺觀いと



も汎く波濤を疊むととき、豆南の小丘、海に盡きて、外洋一白練を曳くと  
 ころ、河津の浦より下田の港までを、一目に見渡し、なほ大島神津島を烟  
 靄縹緲の中に望む。下り道は前より長かりしか、いつも自ら足は運び得  
 るものなり。一溪つねに右方にあり、一里半ばかり來しと思ふ處に瀉然  
 斷崖の上よりたぎり落ち、高さ四五丈もあらむかと思ゆるが、しかも三  
 條ならびかゝれり。そのさまのうつくしき言も及ばぬばかりなるを、ま  
 ことの名問はねば知らず、私に洒落れたるかよかるべしとて、三絃瀑と  
 そ名けしる。

湯か島より凡そ七里にして、梨本にいたり、道また坦夷となる。少しくゆ  
 けば湯ヶ野とて、又た温泉場あり。こゝにて路をあやまりければ、小鍋峠  
 にかゝらず迂回して名もしらぬ山一つ起し、須原といふに出で、始め  
 て本道と合しぬ。

箕作落合をすく、相玉といへるには源三位頼政の妻なる菖蒲の墓ある

よし、かねて聞きければ、わき道をいとは尋ね入る、稻生澤川の上流を  
 渡り、小村といふを過ぎ、十丁ばかりにして法華寺あり。寺僧に道を問ひ、  
 寺前の左の方より落ち來る小流に沿ひ、少しくのほれば一小庵あり。相  
 玉山長福寺といひ、菖蒲がつねに念したりきと傳ふる正觀音の御像を  
 置けるとか名のみはかくいかめしき此庵の、いく年の昔に建てられけ  
 む、風打雨淋の痕さびたるは哀れなり。破れ戸をたゝいて呼び音なへは  
 あやしく、瘦せ細ほりたる老僧の出で來ぬるに、菖蒲の墓いつこそど問  
 ふ答ふる言は口の中に籠りて、更に聞きとれず、病みほうけたる者と見  
 て取りければ、深くはせめず、徐に立ち出で、猶ほ左の山路をのほりゆく  
 に、薪負ひたる賤の女に逢ひ、いよくこの山の上と聞き、ていそぐ。左右  
 には名もなき里人の墓と見ゆるが、こゝらたてり、なほその上に木立し  
 げりたる中を行きぬくれは、いさゝか平かなる處に、これも頼政には縁  
 の深き椎の木の本立ち、あたりには深山樹いやか上に生ひ茂れる



間に、一基の石碑のいたく苦むしたるか、碑面の文字にそれと知られつ、なほ他の三面には、秋山章とやいふ人のかきし墓誌を刻めり。この古墳の世にあやしく取るに足らぬ者なることは明かなれども、われはたい哀れなる境地とのみ折しもふもとの寺に暮鐘ひいき、脚底の村落、暝色四に下り、夕ぐれの風身にしみて寒く、墓の後に枯れ残りたる尾花の人を招く風情あるたいさひしけなり。

こゝを出て、左なる山の岨路を上りつゝ、藤原峠にかゝる。夜色黒きか上に、岨路のけはしき、行けども、思ふ方へ出でず、九丁と聞きたる道の、二里もある心地して、辛くも蓮臺寺につく。地は下田の北、半里計にあり。屋舎十數、半は温泉宿なり。泊りたる家はことに手ひろく、湯壺は立派なる花崗石にて疊み上げ、清瑩玉の如くなる温湯の漫々として満ちたゝへたる。驪山宮もかくやと覺えて心地よきこと、えもいはず。かくて一瓶の酒に陶然の酔を買ひ、眠につかむとせし折しも、隣室には下田ありのしれものとおぼしきがいかに、はしきうかれ女を伴ひ來りて、彈けや踊れやの大うかれ、耳にひびきて、夜半すぐる頃まで、いもねられず、あたらわか興を醒し、そ恨なる。

次の日早發、下田にむかふ、山丘後に靡け、稻生澤川の兩岸、みな平原にして、田圃沃術なり。下田に近く右方に一堆の小丘、他と異にして樹木の頂まで叢茂せるを、聊か形の肖たればとて、下田富士とぞ名つけたる。絶頂には、例の淺間明神を祀れりとかや。

下田の港は、むかし蠻船のしばし碇泊せしところはなけれども、港は淺くして大船を入るゝに足らず。西には城山あり、むかし北條氏康の臣、清水上野介正清のこもりし城蹟とや、冬枯の草に霜の寒き空、濠の跡、臙けなから残り、この山頗る佳景に富み、あたり近くには、和歌浦、兒加淵、御茶屋崎など字したる處あり。和歌の浦と大浦との間には、赤根島あり、それに隣りて、鴈がね島あり。向ひには雀島見ゆ。なほ港の東には武山と



いふ丘あり山腰一帶の沙汀を武濱といひ浪打ちよする磯ついき向ひの山ぎはに大ふね小ふねあまたかゝりたるを柿崎の浦と呼びそれにいつきて洲崎の山々見え渡れり沖の鵜島岸の鵜島など傍に近く鷺島鷺島などいふもありさてこゝを立ち去りて御茶屋崎にいたれば眺観前とは異にしていともひろく大島三宅島など霞のひまより見え透きて近きあたりには奇石海中に散點し頂に小松の生茂れるもあり岩の自ら虚となりて火燈口の如くなるもあり其間を釣する小舟の漕きゆきて見えかくれするなど書にも筆にも及はれず波にむら立つ濱千鳥の風情あるさへをかしきに綱引する蟹の呼聲白帆張る舟人か棹の歌すべて塵腸を洗ふに堪へたる天空海濶のけしきに見ほれつゝしばらくは小松の下の枯芝の上に烟草ふかしつゝ踞みてぞありし下田を去り西へ山路のけはしきを攀ち一里にして宇佐美といふに出つ頼政のあやしき古跡一つこゝにありと聞けど行きても見ず道すが

ら神子元島の燈臺海の中に見ゆ又二里にして手石にいたりかの阿彌陀の窟見むものをとて舟人を語らへは今は満潮にしてかつ午後なれば眺もなく舟をも入るべからすといふさらばいかにせむと押かへして問へば明日の朝まだきかの一つ松の下なる小屋をたゝき起しかしこより舟出し玉へと教ゆさて又た泊りはいつくかよけむといへばこゝはむげにさびしき濱邊にしてさるべき家もなければ北へ半里ばかり手石川の上流に加茂といへる温泉あればといふにそなたへといそぐかへり見すればわかいまゝてありしあたり景色殊にうつしく冬川の流れ淺きがいとも清らかに入日の錦を浮へ煙かすかに立ちのぼる蟹のしほ屋の二つ三つ松林の間に點在したる常に異りたるにはあらねど遠近の配合よき故にや畫の如くにも覺えき加茂の温泉旅店はたゞ一戸餘り立派ならず湯壺も穢げなり湯は川の中いづくにても掘り次第に涌く鹽味を帯びてや濁りたるが温度は體



に適せり。一浴して欄に倚る折りしもあれ、夕暮の空かきくもりて、山の  
 色合暗くなりけるに、颯然たる一陣の風につれて、雨脚斜に飛ぶか如し。  
 夜に入りてもやまねば、明朝のこと思煩はれて、夢も圓ならず。  
 あくれば雨はやみしも、風いと強し。亭主これは西風なまにあらねば、舟を出  
 すこと難からざるへしといふに、急き出て、手石につき、かの家にいた  
 る。

年老ひたる篙師の御身たち、佛の縁は薄かりけり。この濤のあらきに、風  
 の方角はどにか、いかて舟出し得へきといふに、あまた、ひ頭下けむ  
 ばかりに頼めども、うけひかばこそ、張りし弓の弦の断えたらむやうに、  
 しほくとしてぞ立ち去りぬる。あはれ東坡の所謂九死南荒、吾不厭茲  
 游奇絶冠平生といへる豪興はなくして、李白のうたひけむ郎今欲渡無  
 舟楫、如此風波不可行の不幸に陥り、終にこの奇勝を探り得ざりし遺憾  
 今に忘れず、されど東游記に記せる百井塘雨は半月滞留して後、初めて

これを見たりといひ、又た温泉宿の主人が語りきかせしに、舟出すへき  
 日は一月の中、六七日に過ぎす、必ず見むとて一月以上も滞留する人も  
 ありといへば、見ずして恨をのこせるは、獨りわれのみにてもあらざる  
 べきか。

山路を越えて海汀に降り、又た山に登り、百流大瀬をすきて、長津呂の村  
 に入りぬ。道すから山のた、すまひ海のけしき常に似す、すぐれたるに、  
 折しもの大風に逆まく、怒濤の銀山を顔したらむか如く、岸に打ちよせ、  
 人をひき攫はむとするおそろしさ、えもいはす。海路はるかに見渡せば、  
 霧立ちこめて、日の色の薄くなりたるに、例の神子元島の燈臺かすかに  
 ほの見える。伊豆は暖き處どかや、潮氣腥き海汀の沙石の間に、水仙のめ  
 げもせず、色にほやかに咲き出てたる、哀は又どなくふかし。

大瀬の沖には、簑掛岩あり、高は十仞より七八仞にいたる、數は五六ども  
 に雲表に入りて聳立す。皴文頗る奇、その下には、偃仰するもの、蟠蜿する



もの、その、いくは、くなる、かを、知らず、これを、譬へば、五大明王、須彌の、山頂、に、亭立し、夜叉羅刹を、脚下に、ふまへて、降伏せしむるに、似たり。たゞ、惜しむへきは、名の、當を得て、この、もとを、しらぬなりけり。

長津呂の村を、過ぎ、左折して、山に登ること、半里、燈臺あり、望樓あり、なほ、すゝめは、名たゝる、權現の、祠あり。こゝ、石廊の、岬は、豆州の、最南端にして、石聚りて、山を、なし、突兀として、海表を、抜くこと、數百仞、その、下は、峭削、堅つる、か如し。山路の、斷え、極まる、ところ、梯あり、梯を、踏みて、降り、盡せは、祠あり。岩石の、穹窿、自然の、洞穴を、なせると、ころに、巧に、木を、架して、構へたる、もの、規模は、小なれども、かの、耶馬溪の、羅漢寺に、比して、遜れりとは、せず。祭られしは、海神にして、靈驗す、くれて、あらたかなれば、にや、末世の、今にも、香火なほ、盛なり。文武の、御時、例の、役小角、この、國に、流されて、創建せし、よしいひ、傳ふれど、神名帳などにも、見えねは、たしかなる、すぢは、知らず、今は、唯石廊の、權現との、み呼ひならへり。

祠前に、梯を、設け、また、壁に、傍うて、上る、その、窮まる、ところに、いたれば、直に、海に、臨むべし。その、間頗る、狭くして、歩々、足を、受くる、所、僅かに、數尺、鰐の、脊の上を、わたり、行く、か如し。や、かて、岩嘴に、いたれば、嵐の、あとの、大わだつみの、鳴り、轟く、音いとも、すさまじく、脚も、ふる、ふばかり、岩頭に、立てる、小祠は、皆、風の、爲めに、剝かれて、僅に、形を、残すのみ、匍匐、上下して、みな、拜謁し、つや、かて、戰兢の、念を、抑へ、長立して、潭底を、見る。濤聲、斷崖に、鎚して、鼙鼓の、噪く、かど、あやしまれ、怒潮の、岩根を、呑むもの、その、勢、奔馬の、如く、席を、巻く、か如く、その、一撃して、退き、頽れて、回るとき、雪の、亂るゝ如く、玉の、碎くる、如く、四面の、崖より、却きし、潮頭は、こどくく、潭間に、集り、雄浪、雌浪の、相鬪、ふどき、白沫を、飛ばし、雲烟を、吐く、潭中、一面、沸々として、石灰に、水を、注ぎし、如く、又、た乳を、煮たる、が如し。その、殊に、奇絶なるは、潮陣、洋面より、すゝみ、來るとき、横風、一颯、その、頭を、拂ひ、一斤の、水氣を、空中に、抛散し、輝然たる、日光に、照映して、無數の、小虹を、海面に、浮へしむるに、あ



り。更に皆を決して水天の際を望めは、三十六里の相模洋を左にし、七十二里の遠州洋を右にして、駿河の御前崎は近きものから、烟靄あつきたちこめたれば、それかあらぬか知るへからず。南の方は大瀛淼漫、天と疆なく、大島新島高津三宅の諸島、翠然たる青螺を波濤の間に羅列し、最も近きところは、一里を隔て、神子元島の燈臺、突兀として聳ゆるを見る、望眼窮らず、恍然として身中天にあり、呼吸帝座に通するを怪しみ、飄然として未だ玉液を服せず、羽化せしを疑ふ、塵界の仙土、他にその匹儔を見ず、足危険を履むと雖も、かの凌雲の額を書きし人の頭乍ち白くなりしに到らず、奇すでにつきぬ、乃ちひそかに心におもへらくも、し今日の日をして風日晴美ならしめば、手石の洞かならず見るを得しならむ。然れどもこの岬頭に遭見せる風水撞合の壯觀は、つひに欠けぬべし。あゝ熊魚ふたつなから得かたし、しかもわれは寧ろ手石の洞を棄てしを惜まずと、その靈境久しく駐るへからず、古人危に臨むの戒を思ひ出

(をはり)

つるに及ひては、つきせぬ名残惜しみつゝ、遂に立ち去りぬ。

書生骨相本來奇。踏破江山第一枝。

悲喜平生除是酒。風流朝暮便吟詩。

仙雲縹緲珠洲出。喬木高寒劍嶽支。

豫約自今客中感。飛筒千里寄君知。

次韻留別

青 琴



What hidest thou in thy treasure-caves and cells,

Thou hollow-sounding and mysterious main ?

Pale, glistening pearls, and rainbow-coloured shells,—

Bright things which gleam unrecked of and in rain !

Keep, keep thy riches, melancholy sea !

We ask not such from thee.

Mrs Heman

初花染

THE fountains mingle with the river,

And the rivers with the ocean,

The winds of heaven mix for ever

With a sweet emotion;

Nothing in the world is single;

All things ~~by~~ a law divine

In one another's being mingle—

Why not I with thine?

..... Shelley.

戀路

戀ははかなき水鳥の



な　　ひ  
 が　　こ  
 め　　と  
 は　　見  
 そ　　ひ　　わ　　飽  
 こ　　ろ　　だ　　か  
 ふ　　し　　つ　　ぬ  
 か　　み  
 し　　の

拾　人　纈　漁  
 ふ　な　月　歌  
 も　き　低　高  
 う　濱　う  
 れ　に　き　い  
 し　二　春　て  
 妹　人　夕  
 　　の　　風  
 脊　し　の  
 貝　て　海　の

女  
 春の海

そ　そ　汝　か  
 こ　こ　が　す  
 に　に　迷　み  
 へ　に　ひ　の  
 た　坂　入　ひ  
 て　あ　る　ま  
 の　り　山　の  
 關　峠　路　櫻  
 も　あ　に　ば  
 あ　り　は　な

花　摘　ふ　こ  
 を　む　も　ひ  
 ま　に　の　す  
 も　は　野　る  
 れ　や　邊　な  
 る　す　の　か  
 　　き　つ　れ  
 蜥　草　ほ　わ  
 蜴　な　す　が  
 あ　れ　み　友  
 り　ど　れ　よ

消　夜　沙  
 え　あ　に  
 て　け　と  
 の　の　い  
 後　沙　む  
 を　の　る  
 思　浪　足  
 へ　さ　の  
 か　き　あ  
 し　に　と



く だ く る か げ は も ひ  
 い は ほ の う 坐 へ に め て  
 彼 の う な ば わ た せ ば  
 は る を の せ 見 ば 見 たら ば  
 み な か み かく も れ た り

女

ふ ひ ころ き は き ころ が て  
 か き は や が て ひ  
 な み 間 に う ぼ ろ づ き  
 夜 ごと 見 あ だ つ み の  
 お ぼ ろ は こ き み が に て

男



う	み		う	み	う				
み	そ		み	そ	み				
に	ら	男	も	ら	も				
も	に		か	か	み				
ひ	か	あ	に	ぐ	く	ぐ	澄	ど	晴
か	い	さ	こ	ろ	も	ろ	み	り	る
り	や	日	り	く	る	く	わ	に	ゝ
	け		け	夜			た	日	は
	ば		り	は			り	は	

み		み	ほ	彼	す				
そ		な	し	の	な				
ら	女	か	を	お	に				
み		み	瀬	ほ	こ				
ど		つ	う	あ	に	な	ぞ	よ	の
り		い	み	ま	す	が	ら	こ	身
に		き	に	の	る	む	を	た	を
		た	か			れ		へ	
		り	は			ば		て	



き	わ	き	う	み
み	れ	み	み	そ
あ	う	は	は	ら
ま	な	み	み	は
身	あ	あ	な	そ
を	ら	ら	つ	ら
な	ね	ね	か	を
さ	ど	ど	し	し
ば	も	も	む	み

男

ま	あ	う	み
じ	し	み	そ
ら	た	に	ら
ひ	ゆ	も	に
う	ふ	き	か
み	か	ら	き
と	き	め	ら
そ	け	き	め
ら	に	ぬ	け

女

か

と

や

き

ぬ



ま  
ぶ  
た  
は  
か  
た  
く  
重  
ぬ  
れ  
ど  
わ  
君  
戀  
れ  
を  
見  
た  
は  
あ  
は  
れ  
を  
知  
り  
に  
け  
り  
君  
を  
見  
た  
の  
し  
ど  
い  
ふ  
な  
か  
れ  
を  
め  
し  
い  
ふ  
な  
か  
れ  
を  
し  
其  
夜  
よ  
り  
の  
し  
ど  
い  
ふ  
な  
か  
れ

苦

人  
目  
を  
志  
の  
ぶ  
君  
が  
影  
ど  
も  
し  
火  
ど  
り  
て  
出  
て  
見  
れ  
ば  
犬  
の  
さ  
け  
び  
の  
は  
げ  
し  
に  
誰  
れ  
を  
吠  
ゆ  
る  
か  
門  
ま  
も  
る  
犬  
の  
さ  
け  
び  
の  
は  
げ  
し  
に

犬の聲

は  
な  
つ  
も  
姉  
が  
戀  
ゆ  
え  
に  
が  
寝  
息  
う  
か  
い  
ひ  
て  
籠  
に  
と  
焦  
が  
れ  
て  
も  
ゆ  
る  
身  
か  
た  
れ  
に  
ど  
ら  
れ  
し  
ほ  
た  
る  
火  
の  
螢

螢

梢  
に  
琴  
の  
志  
ら  
べ  
あ  
り  
そ  
な  
れ  
松  
風  
志  
ら  
べ  
あ  
り  
底  
に  
つ  
い  
み  
の  
ひ  
い  
き  
あ  
り  
沖  
の  
汐  
さ  
み  
る  
志  
づ  
か  
あ  
り  
わ  
れ  
に  
ひ  
身  
を  
な  
さ  
む



青衿雍雍上驕驕。  
願視玉籠謝鸚鵡。

童僕行色思悠悠。  
含情不語淚如雨。

そ 君 胸  
 こ く に  
 に ち ひ  
 た ち ひ  
 へ び る  
 な る を  
 し ひ  
 ら ち  
 べ く  
 あり 時

そ 君  
 こ ま  
 に な  
 め ざ  
 ぐ し  
 み を  
 の あ  
 光 ぐ  
 り る  
 あ 時

樂

ひ 希 君 戀  
 ど 望 を を  
 み を 見 つ  
 に 得 そ ら  
 う た め し  
 つ る し ど  
 ろ わ そ い  
 あ が の ふ  
 ま 身 日 な  
 つ な よ か  
 神 り り れ

君 君 君 君 君 君  
 わ 君 君 君 君 君  
 が 君 君 君 君 君  
 胸 君 君 君 君 君  
 に 君 君 君 君 君  
 や 君 君 君 君 君  
 どり 君 君 君 君 君  
 し 君 君 君 君 君  
 か 君 君 君 君 君

つ 君 君 君 君 君  
 と 君 君 君 君 君  
 め 君 君 君 君 君  
 て 君 君 君 君 君  
 心 君 君 君 君 君  
 ま 君 君 君 君 君  
 ぎ 君 君 君 君 君  
 ら 君 君 君 君 君  
 せ 君 君 君 君 君  
 ど 君 君 君 君 君

君 君 君 君 君 君  
 は 君 君 君 君 君  
 わ 君 君 君 君 君  
 が 君 君 君 君 君  
 目 君 君 君 君 君  
 に 君 君 君 君 君  
 や 君 君 君 君 君  
 どり 君 君 君 君 君  
 し 君 君 君 君 君  
 か 君 君 君 君 君

あ 君 君 君 君 君 君  
 り 君 君 君 君 君  
 く 君 君 君 君 君  
 見 君 君 君 君 君  
 ゆ 君 君 君 君 君  
 る 君 君 君 君 君  
 そ 君 君 君 君 君  
 の 君 君 君 君 君  
 姿 君 君 君 君 君



暮春

つがひはなれぬ蝶々の

はれをかほしてひらくこ

飛びかふ見るこそかなしけれ

花の色香のうつろひて

鶯歌やみぬる芙蓉苑

御幸の車あま絶えて

春いたづらに暮れむとす

紅雨樓

蝦夷秋花の譜

天

隨

秋風一路馬上に吟骨の健なるを誇り草まくら侘しき夢の幾夜を重ねて  
 札幌より室蘭に起きしはなほ鐵路の開通せさりしときのことにして  
 數ふれば早や七年の昔とはなりぬ語り出すそのかみの土地のあり  
 さま知らぬ人は何といふらむ岩見澤より以南は蒿萊未だ刈り盡され  
 す人の住むべき家としては工事中なりし停車場附屬の役宅と工夫の出  
 張せる假小屋とありしのみさるを今は遠からぬ地に清真布と名づく  
 る停車場さへに新設せられつさしもの廣莫の野いつしかに拓かれて  
 一望際なき黍畑となり清淺むすぶに堪へたる小川のほとりに午炊の  
 烟のゆるく立ちのほる草小屋の十四五軒づい散點したるめでたき大  
 御代の道ひらけぬ隈もなきためしどて流石に嬉しけれど自然の畫筆



に○ふ○る○は○れ○た○る○い○み○じ○き○色○彩○の○は○や○も○尋○ね○が○た○く○な○り○し○は○口○惜○し○か○  
ら○ぬ○に○も○あ○ら○じ○。

追分の驛より南は、人力の及はぬところとて、今になほ昔ながらの風物  
を残したり。鐵車の穿ち入るところは、原人時代そのまゝの跡をどゞめ  
たる處女バイシント林フォレストにして、みづなら、やちたもなどの叢生密合したるが中に、  
幹皮の純白なるが逸早く目にぞつくなる、白かんばの擁腫拳曲せる姿、  
自らいかめしく、われこそは寒帯林中の玉よといひたげなる氣色して、  
亭立したる、嬉しさいふばかりなし。その木下かげの暗きところには、奇  
花異草のおびたゞしかるべけれど、専門家ならぬ人たちの目には入り  
がたかるべし。車窓より首さしのばし、目もはるに眺むれば、打ちつゝき  
たる幽林の末はうすくかすみ、天色の澄碧と混するほどり、地平線  
上に、す髪をもたげたる遠山の影、純紫色を染めて、さながら油畫の中に見  
るか如く、白雲一片ふわくと消えなむばかりになりながら、なほ半空

に○た○な○び○き○渡○り○曉○の○い○ど○も○静○け○き○太○氣○の○外○に○莊○嚴○し○き○朝○日○の○高○く○さ○  
し○し○上○り○た○る○う○つ○し○出○て○む○こ○と○ば○さ○へ○知○ら○す○。

一たびこの大深林を脱したる後、地は一帶の泥帶層とかや、平蕪遠く開  
けて、絶えて樹木を見ず。たゞ遠近に隆起せる丘阜の頂に、たまゞ緑林  
を冠したるを望むのみ。車は正に自然の手に成れる一大花園の裡をす  
ぐるなりけり。

頃は八月の中ばのことにしあれば、都べは荒金の土さへひゞ裂けて、薨  
にきらめく日影まばゆく、寒暖計は九十何度に上りきなどいふべき折  
なるに、こゝ蝦夷の地は既に立田姫の遊びめぐり玉へるにや、桔梗、芍薬、  
女郎花、尾花、山萩、玉簪などの競ひにほへるが中に、北海の特産とか聞く  
白花の吾亦紅は、首をうなだれて、近き來らむ推敗零落のわびしきを嘆  
くにこそ似たりしか。

秋草の數いと多かる中に、殊にすぐれて蝦夷の秋を代表するものは女



郎花凡そ泥炭層上の雜草は高さ六尺を常とすと聞くなるに、なほもその上に扱きて、露を浴び日を受くるなれば、七八尺はたしかにありつべく、莖の太さ、中指ほどなれど、流石に節くれ立ちては見えず。花は無数の黄金錢をつけて、その美しさ、えもいはず、まことに、わが住む宿にうゑても見まほしげなり。この花よ、罪もなきあいの子に、一もどを折られ、罪なき戀のしるしは、むかしありきと聞く錦木のごとく、びりかめ、この籬のもとに立てらるゝことはありつべけれど、彼の涕は手もてかみ、風流氣とては微塵もなきしやもの野良男が馬飼の料にとて刈り取る如き殘害は、天地ひらけてより、かつてこの土に及びしことなれば、めづる人のありやなしやは知らず、今は見ごとく黄金の原をなして、咲きみちぬ。世には菜の花の色香濃かなるを賞すれども、その姿の賤きは、もとより比ぶべくもあらず。ましてや、糞氣を交へて生ぬるき夕東風の咲き過ぐる畑の畔と、秋風の拂ふに任せたるこの野邊とは、之をいづれと問

はむまでもなかるべし。又これと美を争はむどには非ざるべけれど、手をひろげたる如き反魂草、その名すでに無人の郷に似合しからず。内地に少からぬやなぎたんぼ、かんしやう紫莞など、丈の高きと低きとはあれど、あれもこれも黄金色して、さながら女郎花に助勢せる如きは、頼母し。

岡の傾斜なだらかにして、地の水氣少きところ、くには、からまつ草の五六尺に及びたるに、萩いぶきのてらのを、くさぶちなど、いづれも紫のゆかりの色を染めなして、二尋にも餘りたらむえ、そにうの白く美しき花の下に立ちならびたる、たどふれば、花見のかへるさ、雨にぬれて、鬢影雲の如き乙女の三四人、一張の傘に扶けられたるか如し。岡の下に白茅死水をつゝめるところ、扱ては、工事に切り下りたる跡の濠のやうになれるところには、やなぎらんの澹紫と、さわぎきやうの濃紫と、いづれもく、花の女性たることは争はれず、薄紅の鎗穂を突きたるほさきのし



もつけ愛らしさ限なく水中より頭のみを擡けて久方の空のけしきいかにど仰向きたるかわほねはおどけたる者とやいはまし外には忘られがたき香にほひつゝと歌にはいふものからまこと奇臭は好む人なく異香は枯れての後にはじめて知らるゝ藤袴美しけれど遠目にながむべき雁金草人のよく知れるすゝきのやさしげなる撫子の愛くるしきあるはかわほりさうむかしよもきの紫なる黄なる紅なる白きと相交れる幽花珍薬一々しるしとめむはうるさかるべくそのむかし信濃なるなにがしの嶽の裾野の七草に見ほれ石見のや三瓶山嶺の秋に驚きしわれは自らその拙かりしを耻づるばかり二里といひ又三里ともいひ行けどもくはてしなき扱ても廣き花野の眺めかなかくて早來の停車場にいたれば構外に立てる楡の木高さ十俣にあまられるが有りていわがらみの縈はりつけるはさながら蒼龍のごとくさびたに似たる白き花を簇がりつけたるも珍らかなり

ほどなくこゝを立ち去り懸輪電を掣して一塊の幽林を貫きたる後萬頃の碧瑠璃の上に名たゝる蝦夷富士の影を倒したる植内湖畔にいたれば見るもの前と同じからず鐵路に沿へる小濠の中にはひつじぐさあぶらがや姫がまなどおびたしくあたり近き澤地にはぎんこうらいきをん鼠尾草などしめやかに匂へるさま哀れなり泥炭層の土質乍ち變して沙地となる遠目には白浪の打寄すかと怪しまれしものから潮の音の聞えざるをいぶかしみ近づく儘によくたづね見ればこれなむ玫瑰の花の今をさかりと開き満ちたるにぞありけるかくて苦小牧に近けば又もや先に見つる大花園の面影をうつしその上はるかに立ち勝れるが有りけりそもこのあたりは又もや泥炭層の地に係り前は大わだつみに臨みしが上に位置をいへば北緯四十三度に近ければにや海岸植物といひ湿地植物といひ富士帯植物といひ此地に發見されざるはなく世のつねの植物學者が俗物を脅どす



折々に必ず引きもて来るなる食蟲草の一種も、うせんごけの如きも雑草などのやうに簇り生えて地面に鋪き、鐵軌の沙利の上には名もやさしきふうらんの花、うつくしく咲きみだれ、かの富士の八合目あたりに見たると相似たるえぞいたどりなど、殊に多き様なり。その他の花や、草や、數ふれば幾千種ぞなべての秋を一つにあつめて見るは、こゝに過ぐる地あるべからず。さはれ見えざる神の宿となりて、どりくりに妙なる色香はありながら、名なしぐさの誰かために咲くとしもなく、浮世の人のつれなしと怨みあびけむ。夕ならぬに露けくてかこち顔なるは、我身の上にていたく似通ひてはかなしや。

野分の夕杜子美が禪はづれたり

几 董

うかれある記

蝶

一一

吉野(大和のみよし野にあらす、村は高知城の西南三里弱の處に在りて、櫻の名所なり)の櫻今が見頃なりと人の黒りさわぐに、かねて約し、時は今なり、見おくれて散らさむは惜しき限りぞ、花見の催し明日やよからむ、障りはあるまじきや、など友なる戀花が許へ宛て、文した、めしが、不圖縁端に出で、空のけしきをうち眺むるに、雲のたゞずまひいとあやしく、あすの日和の覺束なげなれば、これには經驗ある隣の親爺にたづぬるに、けふ黄昏ごろまでは、たしかに持ちこたへんが、あすは必ず雨なりとの答に、あたらし盛の花を、今年も見ぬ間に散らしては遺憾なり。さらば、あすとも云はず、今より直に出かけばや、最早午には間もなけれど、たかゝ三里に足らぬ路程何ほどのことやあるべきと、復たかき改



めて持たせやりぬ。

花のふみ空見直して封じけり

戀花がもとより返事疾くありたり。開き見れば何もなくて、たゞ次の一、句

いそがずは花も散るべく候かしく

さては我れと同じこゝろか。今は何猶豫かせむと、早けれど晝餉すまして戀花がり音づれぬ。

戀花とくに用意整うてあり。予には嬉しき瓢さへ腰にして出で迎へ、先づ兎も角も坐敷へとすゝむるを強て辭し。共に杖を南にむけて徒歩をひろひぬ。

市中は車の音物賣る聲など囂しければ、互ひに言葉も交へず、急ぎに急ぎて鏡川の岸に出づ。危みし大空のけしき見ればなごりなう晴れて、一點の織翳だも止めず。日は麗かに、遠こちの山々、霞の薄化粧して人の心をうかれさせむとす。めり隣の親爺が明日の日和の豫言さへも、今は信じがたくなりて、戀花まきりに傘の用意のいたづらとなりしことを嘆ちぬ。

天神橋の半ばに、笥をとめて下を望めば、水清澄にして底の砂をも數へつべく、倒さまに映れるわが影の頭の髪の毛をも讀まれぬべし。拭へるが如き一面の碧瑠璃、實に其名にそむかざりけり。岸の青柳糸をよりて水に垂れ、鼻々たる姿烟に似たり。

牛飼の背にしだるゝ柳かな

蝶 二

橋を渡りて右に折れ、西へ西へとたどりぬ。見れば、はやわれ等よりもさきに、貴きも賤きも、色くくの袖たもとふりはへて、さまざまの心くくに打ちむれて行く人いと多かり。

春風や横に見て行く天主閣

戀 花

天満祠前の梅林、霜葩已に枝を辭して、芳姿認むるによしなし。真如寺の



境内二株の牡丹櫻花さき亂れて盛は昨日にやなりぬらし落英繽紛地にみちたりしばらく杖をとめて一献酌まむも妙なれど目ざす處は猶ほ遠くして日はすでに午にせまりたれば愛を割きていそがむとするに咄この無風流親爺めど聲高うのゝしる戀花が聲に驚かされ振りかへりて見れば帚持ちたる男一人こなたにむきて呆然たり。

こゝろなや花の庭掃く寺男

蝶

これよりさきは屈り曲りし田圃道左は一帶の青螺足もどより起りて東西に連り高き梢低き枝青くど若葉まげりて翠またいらむばかり。右は麥隴菜圃目もはるに相交り緑波黄浪風に随つて起る。

麥綠菜黄の中を流るゝ小川かな

戀

蝶舞ふや何處までつく菜の圃

蝶

いさゝ小川の水の流蹈み濁してゆくいたづら小僧もなかりしにや清らかにして塵も浮ばず。

さいなみや蛙の泳ぐ春の水

戀

道は次第に廣くなりて萌出づる若草の間を縫へり。

若草や下駄提げて行く娘の子

蝶

われ等よりは半町ばかりも前に進める紅裙の二五には一人の不足なれど正に姦と云ふ字の三乗なればにや稻村雀の囀りよりもかしまし。アレ蛇がど一人の叫びしに魂消てこけつまるびつ遁げまどふさま何たる殺風景ぞみにくしともみにくし。

春風や妹が蹴出しの眞赤なる

蝶

蛇と聞きてはわれもさすがに快からずさりどて恐ろしきものほどなほ見まほしくて腫をこらして其あたり探りつゝ行けど見えぬ。突然戀花の後よりわれ見出しぬとて投げつくるに胸まづ躍りて身を翻せば、戀花笑ましげに獨り輿に入り。

若草や蛇かどまがふ枯木の根

戀



胸の動悸はやうやく静まりぬ戀花後にわれに語つて云ふこの時の君  
が姿は繪にも畫けぬやうなりしとさりとて意地はるき男かな  
春風に力くらぶるは雲雀か耳を掠めて遠く飛び去りしは燕か

雲雀の聲ひまなくして春長閑なり

蝶

眞直に乙鳥一羽かすみけり

同

日はますく麗かに照り渡りて風軟かなり前面より來る一群の小荷  
駈馬子に乗せたるもあり柴をつけたるもあり

春風や馬上にねむる男の子

蝶

春風や馬の背に負ふ花一枝

蝶

行きく道は片山蔭となりぬ若葉をわたる風清くして鳥聲幽なり  
バサくと音するは椿の花の落つるにや

落椿坊主あたまをたきけり

落椿拾うて蜂にさされけり

蝶

路傍に一軒のくさの屋あり門の構への田舎には過ぎたるさへあるに  
柱に何やらむ貼紙したるやうなり戀花が強いて袂ひき留むるに杖を  
止めて讀み下せば

わがやどの花今正に満開にて侍りけふしも止みがたき要用あり  
て市に出づ接待の出來ざるは惜しき限りにこそ鹿茶なれど湯も  
たぎれり御休息旁御賞美あれや

水莖のあと醜からずかの許縦覽——何々園など書かれたるいか  
めしききはにはあらでさても心にくき主人がしわざかないざ去らば  
一休みせむと門をくわりて家にそひ行けば山もどの天然の風致をそ  
のまゝに賤しからぬ前栽ありて十二三株の櫻咲き亂れたり程よき處  
に床几など据て氈を被ひ硯に短冊さへ添へたるがありけりわれ等の  
一行の入り來ると見るより十歳ばかりなる女の童母屋の方より走せ  
來りてわれ等が前に懇慫に禮を施しつ清らかなる茶室に入ると見え



しがやがて薄茶たていもて來りぬ。

振袖に花ひらくと舞ひこみし

蝶

げに主人が心も推しはかられぬ。まのあたり言葉かはさぬこそ。くれぐれも心残りなれ。短冊汗さむことも惜しけれど、主人が厚意にもそむきがたくて筆とりつ。

さりどてはゆかしき花のあるじかな

蝶

大白を浮べて一夜を花に明さばや

戀

花も見茶も味ひつ飽まで足の勞れを休めて、やがて立ち出づ猶行くこと五六町にして、目ざす吉野の花園に着きぬ。

見渡せば、これはくどばかり驚きけむ。一目千株の趣きはなけれど、此處に五六株、かしこに十株、一重も八重もこきませて、時を得貌に咲きみだれ、さながら雲のわだかまりの如く霞のたなびきたるにも似たり。日本外史さへろくく讀めぬ戀花の聞きたまへ、われのは漢字ばかり

にて出來たり、

花爛漫霞耶雲耶將雪耶

戀

どしたりかぼにうなり出づるを、傍への花の木蔭に遊び居たる五六人の童等のこなたを顧みて、『も鳥さへも、うたふなり』と一齊に歌ひ出だしけるには、さすがの戀花、避易して言句もなかりき。

われはこれにて枯木の仇を報いぬといへば、江戸の敵を長崎とは此事かと戀花は苦わらひしけり。

突貫の聲とこゝろく花の山

戀

仰ぎ望めば、巉巖刀に削り俯して眺むれば、清泉玉をまるばす。

午過やわりごを洗ふ春の水

蝶

割箸の笈を流す日永かな

戀

菘篋張の旗亭三四、花間を點綴して、俗客を喚び、葛屋萱の第榭一つ、清流に臨みて、雅客を待つ。凡そこゝらのさま、一つく書きたてむもくだく



だしく、また寫さむにも、われ等が拙き筆の及ぶ所にあらず。言はぬが花よどはこのことぞかし。

花に酒下戸も上戸もなかりけり

村里や花に幕ひく衣もなし

うらゝかや扇をつかふ女客

管笠の順禮二人花見哉

蝶 戀 蝶 戀

俗塵を避けて、谷陰の自からなる茵の上に坐を占めつ、花に對して盃をあげ、献しつさゝれつ瓢の底を叩きし頃は、夕陽既に西にかたぶきて、聒に歸りし百鳥の聲喧し。何處の寺よりか、撞き出す入相の鐘の聲に驚かされて、あかなくに惜しきわかれを花に告げぬ。

花も人も散りはじめたり鐘の聲

鐘撞いたあとは乞食の花見かな

蝶 戀

ひた急ぎにいそぎて歸途に就きたれど、行くこと僅に一里ばかりにし

て梓弓春の日影は全く沈み暮色蒼然として、山も眠り、野も眠れり。今しがた、われ等が觀樂をつくし、處は何れの邊ぞ進むに從うて暗はますますひろがりぬ。今宵は月のあるべき夜なるに、空をを揚げば、老爺が豫言終に偽りならずして、たい一點の星の影だにもなし。腹は次第に空しきを感じて、足は漸く疲れを覺えぬ。戀花逢ふ人毎に、袂をどらへて、知れる路程をことさらに尋ぬるもあはれなり。

三里とはまことか花のもどり道

戀

かたみに聲かけてはげましあひ杖を力に道をたどりて、漸く鏡川の涯に出でし時は、糸の如き小雨まばらに降り出で、微酔の顔を撲つ心地得もいはれず。水に沼ひたる川下の方、柳の間を洩る、漁家のどもし火朦朧として、水にうつれるけしき畫にもして見まほしや。

どもし火幽なり柳の蔭の一軒家

春雨やかさ持ちながら濡れてゆく

蝶 同



この夜雨はげしく降りて盆を覆へし翌日に至りても猶ほやまずあはれ吉野は落花狼藉とぞきこえし。

長閑さは花見る人のこゝろかな

蝶

無題

紅雨樓

月ならですむかげもなき荒寺も

花ゆゑ人にこはれけり

夜半のあらしに色も香も

うつらふあさや秋の夕暮

清涼境

天隨

(一)

夏の旅にうれしきものは清水金石とろけなむ眞晝のほてりに流るゝ汗を拭ひもあへず着たる單衫もなれて身にまきつき心地まぬべくくゝるしく覺えたる折柄松風の音する山かげの崖めきたるところより湧き出でたる腰にぶら下げし水呑の椀にて飲むこと幾十杯はてはまだるしどて湧く處に口つけて飲みける世のつねの氷水よりもつめたく甘露よりも甘しどこそ覺ゆれまことに腹の中の道も知られて漸く蘇りし心地ぞすなる誰かすておきし芋の葉のありしを取り上げ水をうぐれば清瑩玉の如くにして一すぢのぢみの絶えてまじらぬ世にこれ



程、心地よきはなし。筑豊の地を旅せしときのことなり。ある山道を駈りける折、竹に覺束なきつけ木の札をはさみてこれより一町奥に冷たき清水ありとしるせり。一寸した事なれども夏の日の旅人をたすくるこよなき功德なりける。

津輕富士とぞいふなる陸奥岩木山の頂近く、溪谷の窮まるどころに錫杖清水といふがあり。巖竇の底より湧きて混々たる勢よし。その水のつめたさ加減手をさし入るれば半分時間ならぬに麻痺せむばかり。羊膈のさかしき路をたどり辛くもこゝまで来ていざ一休みとて掬ひ飲みしどきのうまさ。富士の金明水など、迎も足元に追付かずこの味息のある中は忘れも得ざるべし。

到る處に清水湧き出で夏の旅の屈強なるは木曾なり。

(二)

驟雨一過して蔚藍の天色洗はれしが如くそこに虹の出たる心地よきものなり。

われ仙臺にありしと五年松島に遊びしはかれこれ數十回月に一度は必ず行きたり。その初めて遊びしはそれのとし九月のはじめ、まだ残暑の蒸すやうなる折なり。朝の八時多賀城址を過くる頃より雨ふりしが、舟を千賀の浦に憊ひし時には歎みたり。辨天島のあたりより舟路折れて東に向ふと見れば、彩虹一條江天にかかり遠き島どもは透して見らる。涼風衣を吹けども海の面は瑠璃のやうなるに、島や虹や水底の影みだれず。上下水天一色にして、さなから玉壺に似たる魂あくがるゝばかりなり。

扶桑第一絶景の地、雨の日月の夜雪の朝あるとある折々のかはりたるさま、見ぬはなきが、この虹のけしき、今に忘れず。



(三)

高山にのぼりて氷を嚼み雪に臥したる夏の日には尤も妙なり。  
 わが月山に登りしとき夜あけぬ中に山麓手向村を發したりしが補陀  
 落山などいひて世のつねの人の詣でぬところへ横道に入りて巡賽  
 したりければ絶頂にて日くれかゝり湯殿山の方へ一里降りてうする  
 の小屋にとまりぬそのまわり數十町歩は氷田とやいふならむ萬古の  
 雪の消えぬどころなり盛夏の一夜をこゝ高山の雪に臥したるときよ  
 あはれ下界の人今宵や夢結びかねてむすやうなるあつさをかこちつ  
 いあらむとぞ覺えし。

(四)

夏の夜海を航する酒落れたるものなり月はありてもよくなくてもよ  
 少き小舟に限るなり。  
 い。これも尋常乗組の多き汽船などならば似て非なることなるべく人  
 ひとせ西遊のかへるさ岡山につきて後樂園を見物したるが午後の

三時といふなるに直に去て急行することなほ七里片上の驛につまし  
 は九時ごろなり宿屋のあるじ舟にて赤穂に航することの快且つ便な  
 るを説くや心そいろに動きてうむとばかりに承諾しわれ一人にて舟  
 を僦ひたり舟は他に乗合あるときは數錢にて濟むべきをこの夜は已  
 に遅く乗合もなきことなれば廉からぬはいふまでもなしされどこれ  
 は百も承知のことにして酔ひしまぎれにうかど計略に乗りたるには  
 非ず散財の序には酒と肴とを命じて船に載せつづねは車力馬方と同  
 宿して老婆の水浹やまじりけむぐちやりくらの麥飯をもまづしとは  
 せざるわれこれたまぐの奮發なりけり。  
 三更潮正に満ちたり一灣の夜色蒼茫として遠處海影煙に似たる間漁



火のちらり／＼するを認むるのみやがて櫓聲伊軋鏡中の水を攪しつ  
 い舟揺々として東に向ひぬ。  
 露氣蕭條の下舟に逢なればごさを被りて横臥し仰では銀河の底を  
 睨みつゝ心朦然たる折ふし流星一點天球を横断し長芒を曳き海を磨  
 して去りしがあり蹶然起坐し酒を傾け放歌高吟せしこと多時又た眠  
 らむとして横になりしが輾轉反側して波の上の夢は圓かならず夜も  
 曙なむとする頃残月鉤の如く影は水心にあり大魚の人立するも瞥見  
 されたり舟を挾て走る島嶼髻鬢模糊曉氣冷かにくもり颯々たる涼風  
 衣に入りて絶えず清爽一氣吟腔に盜るゝを覺えぬ。

(五)

夏の夜道おもしろけれども夜の登山はまた一しほなり但しこれは月  
 夜に限ることなり。

わが第一回の登嶽は何の日なりしか午後五時東口須山を出て九時と  
 いふに三合目の小屋につきて泊り真夜中の一時半頃に起きて程をつ  
 いけ朝の八時に絶巔を窮めたれば殆んど夜の登山なり恰も好し十四  
 日の月は路を照らしわれを誤らしめざりき。  
 彦山に登りしときのことなりたそがれのほど小石原なにつきこれよ  
 り彦山まで四里ばかりなりと聞きたるから是非にゆかむとて急行し  
 二三の嶺を越えしに日は全く落ちて暮煙林を籠め樵歌の聲も聞えず  
 歸鳥霞を背にして飛べるのみやう／＼暗くなりけるに路行く人もな  
 く淋しさ堪えず細徑交叉の處いくらもありたれども幸に路を誤らず  
 やがて山麓につきぬこゝは人家少く彦山の村といふは山腹にありて  
 なほ一里もありと聞きしとき殆んど落膽したりしが詮方なければ勇  
 を鼓してまた進みぬたま／＼月は林間より洩りて清光道を照しわれ  
 を導くに似たるぞうれしかりし山には竹樹多くして鬱蒼々珠の如き



露は滴れて緑篠盡く濕ひぬる、顔なる月の影も青からむとすめり時  
 に老鳥の悲叫するを聞く、天地寂寞萬籟屏促、今はなかくに凄まじく  
 ぞ覺えし。

海波未曙暗濃嵐。 蘆荻秋風涼不堪。

飛迷一片腥烟濕。 隔浦蛩家曉煮鹽。

赤穂所見

青琴

不動瀧

蝶

二

(上)

夏のころ、わづらひたりし腦の痛みの、一時はをこたりしに、このごろま  
 た、をこりて堪へがたうなりしかば、くすしのすゝむるがまに、  
 のわざをもうち棄てつ、都の塵をさくるといふも、名のみなる瀧の川  
 里、金剛寺の一間をまばしのやど、定めしは、こゝ名物の紅葉もや、い  
 ばみて、木枯の音すまじう散りそめたる霜月の末つかたなりき。  
 あるじの僧が讀經の聲を耳にしながら、机によりてうとくどまどろ  
 みしは、いましがたのことなりと思ひきや、覺束なき睡眠をひらきて、あ  
 たりを見まはせば、どもし火の油や、つきてはなつ光りの力なげなり。



僧だちは今や夢のもなかなるらむ。さしも廣き寺のなかも、たゞ志むどして人のけはひなく、壁にうつれるわが影のさむげなるに、佛壇の供物をねらひよる鼠のたれは、いからず、われはがほに横行して、キ、と鳴く。ねのをり、聞こゆるだに、寂しさのたねなり。

夜やふけぬらし。はや臥床に入らばや、と押入より夜のものなどひき出だしてのべけるをりから、女の泣くらむかなしげなる聲のいづこよりどもなく聞えぬ。耳をそばだて、しばし身じろきもせでありけるに、その後にはなにのひききもなし。うたて、わがこゝろのまどひなりしか。障子あしあけ、雨戸一枚くりて見れば、庭前の楓のかれ葉風にむかひて、さやく如き音す。さては木がらしのわが耳をたばかりてけるよ。夜の風ぞつと身にしみて肌寒うをのゝけば、いそぎ戸をさして臥床に入らむとしけるほどに、あやしや、  
『あれ人殺し、ひとごころし救けてよ』とさけぶ聲の、こたびは耳をつむぎ

くやうに近くきこえぬ。いよ、女の聲なり。わがひが耳にてもあらざりけるよ。救けてよと聞くからに、そのまゝにうち棄て、置くべきにもあらずと、われはつと押入の隅をさぐりて、一とふりのし首を手にとりつ。庭に下りて重きおほ戸をひらくまももどかしうふためきて外にをどりいでぬ。

『ゆるさせたまへ。喃かなしや』

またもやきこゆる叫びをたよりに、楓の木の間を縫うてかなたに進みよれば、本堂の左のかた、辨天祠のほら穴の上のほとり、月下にそれとしるき二たつのひと影。  
をどここがふりかざし、氷の如き白刃の下に、女が身は今かふたつにやなるらむ危うき刹那の光景をのみ胸に、えがきて、驀然に駆けつけたる。われは思はずも、たじろきぬ。人殺しとは何のいひぞや、ふたりはまさしく男女なれど、男はえもの持ちたるにもあらず。また髻つかみたるにも



あらず。たゞ髪はおどろのやうに亂れたるわかき女を小脇に抱えて、何れへかゆかむとするを、女の行かむといなむなりけり。犬も喰はぬ夫婦喧嘩とやらむ。そは世の常のことなり。うかど飛び出だしてあらぬ耻かゝむもさすがなれば、われはまばし小蔭にひそみて、せむやうを見てありぬ。

『のう家の人はおはさぬか。わるものゝわれを苦しめむとするに』  
 ひどを呼ばむとする女が口を男は手もてうちおほひ、

『静にせずや。人のねぶりをやぶらむに』と叱るが如く、またなだむるが如く、いひはなちて、ゐてゆかむとするを、女は地にひたとすわりて動かばこそ、

『殺せ。ころせ。殺さむと思は。い。ころしたまへ。御身は何のうらみありてか。かくまで我身をくるしむるぞ。そこ放してよ。あなはづかしや』とばかりかむばしりたる聲をまぼりて、ひどまきり泣きくづほれたるさま

なりしがまばしへて、白き齒をあらはしてからゝと笑ひつ。

『そも御身はわが身を何者と思したまふぞ。われは権現さまの御使にて、王子の森に年を経し天狗の化身と知らざるか。よらばよれ神のどがめのたちどころに報うべきぞ』と、きつと見はりたる眼の光きららかにして、瞳の位置あやしうさだまらず。男の顔を見あげたるおもてに、  
 甘日ばかりの月青白うかゝやきて、朱唇丹花のさくるが如く裂け、今にもほのほを吐き出ださむ。さうがう物凄しいはむもおろかなり。

男はいたう困むたらむさまにて、

『またしても、やうなきことをな云ひたまひそ。いつまでわれを苦しめむとはする。さいそがずや。たちたまひね』と手をどらむとするを、女はつよくもふりはらひながら、さも物におどろきたらむけしきにて、顔に袖をあてゝ地にひれふし、

『あれゝゝわるものゝ來りしぞ。ゆるしてよ。わが身をけがさむこ



とばかりは赦してよ、たからもきぬも残らず、まるらせむほどに』といひも終らで、よとばかりに泣きまづみぬ。

飛ぶが如く空を走る一團の黒雲は、片破月の光をつゝみぬ。風さつと梢をわたりて、揺落の音蕭瑟たり。男はちもはず身をちゝめて、

『あな寒し。今宵の風の身にまむことよ。やよ夜のふけわたらむに、疾く疾くせずや。なに殺せよと加さるやうなきとは最早いひたまふない。

ざたちたまへ。たゝずや。え。今はこれまでなり』と襟髪つかみてひつたて行かむとす。女は首を左右にうちふりて、たゝじ行かむとつとむれども、勢ひこみたる男の力には、かなふべくもあらず。ひきずられつゝ、金剛寺の境内を出でたり。

見わたすかぎり霜置きて地は凍てたり。なさけ知らぬ男もあるものかな。風はこほりて骨にしみいるこの夜ふけを、さるいたいけの女を、みていづ地に行かむとす。らむ門によりて、二つの影の動くかたを見やれり。

『たすけてよ。たすけてよ。あれ人ごろしよ。』  
かなしげなる聲を絞りて泣くがごとく訴ふるが如き女のさげびは、一足ゝに遠ざかりゆきぬ。

野狐に巢をやねらはれけむ。時ならぬ鶏のなく音もいと哀れなり。

(中)

下弦の月は空に冴えたれど、木立深うして光りいたらず。さながら巨人の眷属を見おろすらむやうに、ひと本高う群をぬきいでたる大杉のほとり、寝鳥ひきさく鳥のあしもとより、一條の銀蛇やみを縫うて空にかゝり、たきつぼに落ちこむ水の音すみて、飛沫縹緲霧となりまた雲となり、一陣の魔風にのりて、鬼氣人を襲はむとす。



あはれなる女のこと、心にかゝりて、そのまゝ歸るにしのびざりし、われは不動の瀧のほとりにて、ふたゝびふたりが姿を見いでぬ。

『ゆるしてよ、ゆるしてよ』と泣いてわぶる聲を耳にもかけず、あららかにひきずりもて來し男は、しひて垢離小屋の上のうちふさしめて、今や女の帯を解かむとすなり。

われは思ひぬ、たい世のつねの夫婦のあらそひとのみ思ひたりしは、あやまりにて、さてはこの男、くゝの寝しづまりたる夜なかを、はかりて女をはなれたるこの森陰にかどわかし、日ごろのおもひを遂げむとす。めり、あたらし處女のきよらなるからだを、かゝる理ふむなる男の手に、けがさしめて、みすゝ黙して居らるべきかは、とて心げきたる、あまゝり、前後の思慮もなく、もの蔭より躍り出で、つとそばによりて、男のかひなを、とらへぬ。

ふたりがほかに人ありとは思ひもかけぬ、森かげに、ゆくりなく、わが姿

を見たる男の驚きは、いふばかりなく、しばしわが顔をみつめたるまゝ、云ひ出でむ言葉もしらぬさまなりしが、やう／＼にして口をひらき、『おむ身は何ものぞ、わが腕をとらへて如何にせむとはする』と問ひかけたる言葉の勢ひ、やゝ怒りを帯びたり。われもやゝせきたちて、

『いかにせむとは知れたることなり。御身がなめげなるしわざを、にくみて、このわかき女を救はむと思ひてこそ』とこは高うのゝしれば、男はいと淋しげなる笑みをふくみて、

『なにこの女をすくはむとや。そはやうなきことなり。御身のかいづらうべきことにあらねば』といひ放ちたるまゝ、ふたゝびわれをかへり見むともせず、女が帯を解きをはりて、今は肌につけたる衣をさへはがむとすなり。女はあるにもあらぬさまにて、くるしき聲をしぼりて、たゝひたぶるに

『ゆるしてよ、ゆるしてよ』と啼きわめきぬ。その聲は陰森たる闇をやぶ



りてつむざくやうに響きわたるにわれは腸をかきむしらるゝ心地して居たゝまらずふたゝび男の腕をつかみぬ男はその手をふりほどきて

『うるさき人かな。またげしたまふな』とばかり強くひぢもてわれを突き飛ばしつみづからも衣をぬぎてしたおひのまゝ肌の色は雪をも欺かむばかりなる女がからだをかき抱きてたちまち瀧壺のなかに躍り入りぬ。

たいさへ寒きこの夜半をかよわき女を冷々たる瀧津瀬の水にひたさむどはいかならむ怨みのあればかしらねどさても恐ろしき男のこゝろよ。鬼かけた蛇か女の身のうへいと危うし救はではどたち上りたるわが面に飛び散るしぶきのばつどかいりてつめたきこといふばかりなくさながらけしやうのものゝ手もて撫でられたらむやうに悚然として肌粟だちぬ。

この時月はやうく西にうつりてすこしくまばらなる枝の間よりさしくる光りのあたかも女が鏡にうつれり深々として落ちくる水の頭にくだけては氷の花がさかうぶれりども見つべしや齒をくひしばりて亂れかゝりし五筋六すぢの髪の毛をかみたる口もどの恐ろしさあながちに閉ぢむどもせで何ものをか睨らみつめたる眼の玉の白く蒼白うこほりたる顔の色の限りなき怨みを帯びてものすできこといはむかたなし。

あまりにむざむなる男のふるまひをそばに見るめのわが腹だゝしさはいかばかりぞ。あはれ女が玉の緒ははや絶えなむとするによしやわが身にはゆかりなき人なりとて見ごろしにせらるべきかは。今はためらふべき時にもあらずといそぎ衣をぬぎすてつじ首の鞘をはらひて男がかたに飛びかゝらむとする後ろのかたより突然わが腕をかたくどらへしものあり。こゝにもかたきのかたわれの潜みてありけるかど



驚きながらふりかへれば、金剛寺としるされたる提灯を前にかざして  
わがやどりの主の僧のたちたるなりけり。

老僧はわが手に七首など抜きてもちたるを見て怪しみつゝ、

『まらうどのものにや狂はせたまひし。このさむき夜なかに、かゝるど  
ころになにして居たまふぞ。さる恐ろしきものをさへ手にして……  
われは御身が、さきに戸を開きて出でたまひし物音をきゝたるまゝ、  
にて、歸りたまひしけはひも見えねば、御身のふしどをうかへば、果  
して姿の見えざるに驚き、もしものことありはせずやと案じわづ  
らひつゝ、此處まではたづね参りぬ。いざ歸りたまへ。かせなどひきた  
まは、何としましたまふ』と衣とりてうちかぶせむとするに、

『こはあるじの御坊にて候か。御こゝろを煩はしつる罪はゆるしたま  
へ。これはものにくるひしにもあらず。うかど此どころへ迷ひきたり  
しにもあらず。されど、あゝされど、われはこの女の身の上のこゝろも

となうて』

かくと聞きたる老僧は、ホ、と笑みて、

『捨て置きたまへ。そは御身のかゝはるべきことにもあらねば』と敢て  
こゝろにもとめざるけしきなり。

『捨て置けどや。人をたすくべき御坊のさりどては心つめたき御言葉  
かな。見たまへ、かの女のいたましげなるさまを。今は玉の緒も絶えな  
むばかりなるに』とや、激したるわが言葉に、老僧はうちうなづき、

『さては御身は、未だこのよしをつばらにしたまはぬよな。まづ兎も  
角もかへりたまへ。道すがらそのわけをものがたり侍らむほどに』  
あどに心はのれども、よしありげなる老僧が言葉に、どいまらむやう  
もなく、落葉を踏むで森をわけ出でぬ。女が身はいかにどふりかへれば、  
あやにくや、月の光の梢にさへぎられて姿も見えずたゞ、涼々たる水の  
音の闇をやぶりにてきこゆるのみ。



(下)

こぞの師走のことなりとよある夜王子の町のきぬもの商ふ家に、白刃  
 など携へたる恐ろしき物どりのおし入りて、たうとき品のかずく、掠  
 め去りたるさへあるに、その折、年はやうく十七になりける美しきむ  
 すめを、思ふまゝになぐさみて、純潔なるおとめのからだに、生涯きえが  
 たき汚れを、残しとめてけりとの噂ばつとたちて、みやこの新聞にま  
 でかゝれたることありき。  
 あはれなるは此おとめが身の上なりけり。おとめには、はやくより親と  
 親どのかたらひにて、定まりたる夫のありしを、かゝる汚れたる身とな  
 りしからには、おとこは、よも娶らむとはいふまじ。否、めどらむとのたま  
 ふども、いかにしてかおめく、と嫁るべき。おもへば、かくあさましき  
 となりはてしも、さきの世に恐ろしき罪を犯し、報なるらめ。この上は

頭をそりこぼちて、尼法師ともなりて、佛の道に入らばや。と世を思ひ捨  
 てたるうはさの、さきの男の耳に入りにしより、男はこよなう乙女をあ  
 はれなるものに思ひて、よしや御身がからだは汚されぬるとも、そはゆ  
 くりなき禍のためにて、自から犯したる罪にもあらぬを、これが爲に盛  
 りの花を、われから散らし、ゆくすゑながき春秋を、浮世の外にをくらむ  
 は口惜しき限りぞかし。われは疾くより御身が夫とさだまりたる身な  
 れば、などさばかりのことに、見すつべきや。御身は一生わが妻なり。さる  
 なげきはせぬものぞと、ふみしてこまぐ、と言ひやりつ。汚れし身をも  
 厭ふけしきなく、さきのいなむを、われから進むで、妻にめどりしは、こと  
 し。春の桃の花さかりなりしころなりけり。  
 おとめは、うれしき男のなさけに、身もうくばかり喜びなきつ。わが百と  
 せの命ものかはと、あらむ限りのまことをつくしてつかふれば、夫は  
 また、妻が小さき胸のうちに消えがたき怨みの残りて、たえず思ひに沈



めるさまをあはれみ。うれしき言葉の數をつくしていたはりぬ。

かくて女はかなしきなかにも樂しき月日を送れり。

さるにてもうるさきは世の人の口ぞかし。男の友はうちよるごとに、この女が上をさゝやきあひ、かの男は卑しからぬ身を持ちながら、なごて、さる汚れたる女をば娶りたりけむ。かの女のすがた、かたちのうるはしきに心まどひて、われらが目には、いともきらふべく見ゆる汚れにこそ、ろづかざりけるか。世には、かばかりの女のなきにも限らざるものを、といひ罵しり、はては、うちつけに男にむかひて諫むるものさへあるを、男はさして心にも留めず、家にかへりては、さあらぬ躰にもてなせど、妻ははやくも夫がすぐれざる此をろのけしきを見てとり、いかで其ゆゑをきかしてよとせちに尋ぬるものから、夫はたゞ心になかけそとこたふるのみ。妻のこゝろを苦しませむことを恐れて何事も語らねば、妻はもしやと思ひあたりしことありて、ひそかに世のうはさに耳かたぶく

るに、はたしてわが身の上のことなりけり。

あはれ、わがために斯ほどまで、世の人の口のはにかゝりたまふ夫が胸の苦しみはいかばかりぞ。わがこゝろなやまさむとの、うれしき御はからひなるべけれど、さる噂のひと言をだも洩らしたまはぬ御こゝろの怨めじさよ。思へば、夫がうれしき御ことば、たまはりし時、いかやうにもいなみ申すべかりしを、わが身の汚れをうちわすれて、夫がなさけをあだになしけるこそ、かなしけれ。今かく夫にふかき苦しみをかけまつるも、またく、わが身の心のあさはかにして、すゑのこゝろを思ひはからざりし罪なり。いかにしてか、夫のほまれをきよむべきと、まみくど夫にむかひてわび入りつ。わが身をいかやうにもして、腹いせとしたまへかしどねがひけるに、男はあくまでやさしき言葉をつくしていたはりなぐ

さむること、前にもましていとねもごろなり。妻は夫がなさけのますくあつうなりゆくこと、のなかに心苦し



く。たいひたぶるにすまぬ。く。と思ひわづらひしなやみの積もり。く。てつひに心のみだれ狂ふに至りしこそあはれなれ。

男がなげきはことばにもつくされずありとあるくすしにみせてみどり  
りをこたひなければとつゆあるしとてあらざりけるをこの不動の瀧に  
水垢離とりて五十日の苦行をつまむものはいかなる重きなやみなり  
ともいえずといふことなしと或人のすゝめけるよりさらばと男はあ  
どの月のなかばよりわが寺のほとりに住居をさだめこの風寒き夜ど  
ど夜ごとを不動の瀧にかよひゆくなり。……折からあかつき告ぐる鶏の聲く遠こちの村より聞こえぬ。  
あるじの僧はふりかへりて窓の障子のほのくどあかるみたるに驚  
き。  
『哀れなる人のうはさに思はずも時うつれり見たまへ窓の障子のほ  
やほのじらみたるに』と云ひつゝ身をふるはせて

今更に寒さを覺えたるものい如く楯あまた折りくべながら

『あけがたの風はひとしほ身にしむものを風邪などひきたまはしや  
まうの御身にさはりやせむよくあたゝまりてのちまばしまどろみ  
たまへ』とすいむる時爐の火はパツと燃えたちぬ。  
寺男は鐘を撞きいだせり。

更衣

紅雨樓

戀しき君がかたみさて  
そめし櫻の色をさへ  
けふぬぎかふる花ごろも  
袖のうつり香いかにせむ



鞋の紐かたく結び、日影はやくも亭午近くなれる頃、打連れだちて、庵  
 いる物かは着たるまゝ、こそ男はよけれと促し立てつ。裾かいつまみ、草  
 兎に角、即坐に諾なひ、呉れし嬉さよわづかに、兩三日のこと、仕度も何も  
 ればにや、將た倚りそふ柱だになき冬籠のつれく、なるに堪難くてや、  
 の閑居はなど、仔細らしく吹かくれば、逍遙に出た、ずや、今夫れ小人  
 とすなるに、所は何れにても善ければ、逍遙に出た、ずや、今夫れ小人  
 て來りし彼を見るや、今日は空も晴れたり、風さへ吹かず、冬休も去らむ  
 めぬさまなり、兩三度呼び起して、寢とぼけながらに、目を擦すりつゝ、出  
 ふしあり、友なる繞石の清志庵を音なふに、例のいぎたなくて、まだ目醒  
 ぞれの歳、松の内の元日二日三日と過ぎて、四日の朝、屹とおもひ定むる



天 隨

Wo bist du hin  
 Mein Hoffnungsstern?  
 Ach mir so fern,  
 Bist mit süßem Prangen  
 Andern aufgegangen!  
 Erhebt euch, rauschende Abendwinde,  
 Schlagt an die Brust,  
 Weckt alle tötende Lust,  
 Allen Todesschmerz,  
 Dass das Herz,  
 Getränkt von blut'gen Thränen,  
 Brech' in trostlosem Sehnen.  
 Was lispelt ihr so linde,  
 So traulich, ihr dunkeln Büume?  
 Was blickt ihr goldnen Himmelssäume  
 So freundlich hinab?  
 Zeigt mir mein Grab!  
 Das ist mein Hoffnungshafen,  
 Werd' unten ruhig schlafen.



をぞ出てぬる。

合英携へたるは又の名、古風人といへる天隨にして、七部集懐にせるは、庵の名をそのまゝつけし清志翁の繞石なり。此度は至る處に駄句や悪詩を吐き散らさむとの意氣込すさまじく、足を東にむけて南町にかゝる。松島はあまりに近からずや、作並は奥深し、青根や如何、一の關やよからむなど、話しながらに身は自づと停車場に入りたるぞ面白き。翁足弱ければとて、汽車道に最近き處を撰みて小原と定む。待つ間程なく、汽車北より至れり、二人はいざやと車箱に上るに、やがて車走りそめぬ。廣瀬川の鐵橋も瞬くひまに越え、長町も過ぎて、眼に見ゆるものは藪陰に終日凍る枯田に非れば、冬ざれし瀛車道の下に、

五六尺氷りつきけり畦のへり

清

なるのみ。たま／＼水をたいへし冬田に映る雲の瀛車と共に南に走るが面白しと、心とられて見つむる間に、五六本杉木立の冬枯れし中に、幾

年月の雨風に文字もすり壞れし石塔の三つ四つ、仆れ合へるが、ふいと眼にうつるも可笑しく、西北の方にならび連る遠き雪の山々、日の光にきらめくが、近き竹藪の横より、或は松林の梢を通して、見ゆるなども興あり。東は大かたは刈田ついき、其中に青き畑の見ゆるは、芽麥の延びしにやあらん、今すぞ越せし汽車道の傍には松杉神さびたる小高き岡に、危うき石段ありて、職竿の高きは鎮守の社にやあらんづらむ。これは是れ未だ

石段を上れば梅の鳥居かな

とは行かざるべくも、今は正に

坂の上に氏神の鳥居冬ざれし

なるべしなど、清志翁いへば、古風人も、なごて後れをとらむやとて

冬枯の岡に丸木の鳥居かな

陌上紅塵三日飛、野人也着舊春衣、佳期行樂良朋在、



第一東風賦浴沂  
短路飛輪掣電馳  
景遷過眼送迎時  
年前杖屐個中景  
囊裡吟盈幾首詩

どかきつく八つすぎて大河原に車を乗り捨て扱てとぼくと歩む並  
木松原の路平なるはよけれど北風吹きすさび一重襦袢の堪へ難くて  
二人の襟に松の落葉頻りなり坂一つ二つ越して左に水涸れて積寒き  
冬川をながめながら宮の町に入る

北風落帽颯然吹  
墟落凄煙殘日時  
瘦盡溪山乾盡水

荒寒略似個儂詩  
古

數家村落古江濱  
桑柘蕭條冬景分  
林下炊煙搖曳去

岫邊團作一層雲

冬枯や河原につよく桑畑

日は西に冬川白き木立哉

清

酒庫に似たる小學校の横手に草家五六軒申柿を乾し連ねたるあるは  
硝子戸嚴めしき藪醫者が庭に寒椿の小さく咲けるなど町には見ぬ景  
色かなと語らふうち町はすぎて松原元の如し

歸鴉三兩遠林邊  
獨立蒼茫破驛前  
萬疊峰巒雪華白

夕陽杲杲凍雲天  
古

風次第にはけしくなりて山々には雪雲おひかゝる翁は龜の子の如く  
首打すくめふるへつゝ行くに兎角して申も過ぎたらむと思ふ頃白石  
橋を渡る

吟腔古意獨徘徊  
白石城荒委草萊  
日暮風寒松聳立

亂山滿目夕陽頽  
古

冬ざれの松まばらなり城の跡

右に折れ白石川を横にして道は次第に上り坂なり  
冬の日や次第に低き山畑  
清



行き行けば、何日降り積りたる雪やらむ、藪かけ軒下など、そこゝに残りたるが、夕暮のうす暗きに、獨り白く見ゆるもあはれなり。

冬木立櫻あるべき茶堂かな

清

一里許り進みて石門越ゆる頃、日は全く沈めり。右の方俯して看やれば、藪蔭に冬川の瀬音のみ木枯に鈴の音寒き小荷駄の影も見えず、往き來ふ人も絶え果て雪さへちらりく降り初めて寒さ彌増す。

山道や小石に凍る馬の鞋

清

征鞋踏遍路崎嶇、脚下奔雷一水趨、峡口黄昏北風烈、

吟、簷亂撲、霰如珠、

古

棧道險危人不行、陰雲黯慘壑邊生、亂峰搖影入昏黑、

全

野火風燃一路明、

二たび、三たび、路に迷ふて六つ下りに漸く新湯といふに辿りつく。

行き暮れて路遠近の吹雪哉

清

先づ雪打拂ひ、衣物ぬぎすて、急いで湯場に至り、見事ぢやぼんと身を躍らす。湯壺は天然の岩角をけづりなせるにて、底の孔より湧き出づる湯は、温度身に適し、足の指の見えすく清らかさに、心地云ふべくもあらず。

雪窖氷山道路難、征行半日也辛酸、温湯一浴神心活、

古

好慰疲瘡又杭寒、

導かれて坐敷に至れば、室は小さけれども、萬づ清らに、壁間には磐溪先生の一軸ありて

床の間に鉢の水仙咲きにけり

清

など仲々に嬉し、酒も出たれば、飲み飲む、夜更けて雪やみ、星のみ風にきらめくに、二人は厚き蒲團につままれて、暖かに夢に入る。

枕邊溪響攪孤吟、夢破客樓更正深、被底寒生山氣逼、

古

殘燈吹鬼夜森森、

寒燈影裡獨沈吟、溪水潺湲幽境深、客思淒涼無限苦、



猿聲斷續夜蕭森

清

明くれば五日ふと眼覺れば廻廊の雨戸は已に明け放されたるが、窓間の朝日遅きにや、ぼんやりと薄明りの寒げなるに、湯に物せむと、障子推し開けば、こはそも如何に、いつの間に降りたりけむ、家も岩も雪にて、藪も林も綿つけしが如く、好景筆には盡し難し。翁は何やら呟きつゝ、時には句にならずなど呟くに、古風人は、

幽夢屢驚灘響新、北風吹折幾隣响、曉看雪壓溪邊屋、

悄地哦詩倚檻人、

曲曲欄干小小軒、瑤花瓊樹滿崖繁、寒雲暝盡漫漫色、

風雪溪山十里昏、

峽口同雲疊々饒、懸崖竹樹雪花飄、思詩獨倚谿樓曉、

欲借殘醪破寂寥、

と續けどまに吐いて、傲り顔なるに、さらば清志翁も一首なりとも次韻

せでやはとて

滿目溪山積玉饒、雪飛未霽北風飄、低吟淺酌爐邊坐、

嘯破詩成慰寂寥、

と叫ぶ。朝餉も終り、障子あけ放し、二人たゞ黙然とたゞれる。番茶すゝりて眺むるに、溪は唯一筋の水のみ青きに、風さへ添ふて、幾千萬億の玉屑紛紛と、天空を駈まわる絶景、暫しは山も川もなし。翁は尻に根が生へたらむ如く、どみに立つ景色も見えぬと、一日此宿に暮すは妙ならず、吹雪に浮かれて、鎌先に遊ばむやとて、晝過ぎて立ち出づ。清志翁、雨具持たねば、荒ごもを借り着て、手拭を被る。是れ蕪村畫中の人に非ずとも、鳥羽繪には真違あるべからずなどいひのゝしる。

關心野外數株梅、暝色荒寒風雪來、滿目溪山吟興動、

也披簑笠踏崔嵬、

雪霏々たり手拭かぶる温泉の匂ひ

清 古



小笹の坂を上れば街道に出づ。とある藁屋に濁酒乞ひ受けて、各續け様に四五椀傾く。

前山後壑白皚々、定有梅花雪裏開、又是一橋驢背興、

出門連引酌村醅

清

踏み行く處總て昨日に異らねど、道は馬の足跡許りの雪深く、山川皆其觀を同うせざるぞ面白き。一里も還りて、村ある處より左に折れて、板橋を渡る。

一路尋橋度石坡、江天急雪暗寒波、相逢訝見未相問、

釣叟踞巖披玉篔

古

雪解の坂、六まわり七まがりして、鎌先道に出づるに、雪や、小歌になりて、冬の日薄暗く、雪雲の中にほの見ゆるも、亦た一段の趣あり。

峭風捲散雪華飛、亂點忽斑客子衣、同雲暗憺四廻合、

蝕盡殘陽一片微

古

道はたの小溝、いづれも皆氷りけるに、小笹の末に結ぶ氷は、左ながら水晶の如く、何をあさらむとにや、名の知れぬ美しき鳥の雪野に飛びちがひたるなど、見るものとして面白からぬはなし。鎌先に到る頃には、日鮮かにさして、山は一面の白銀とか、やく光眩し。

終風且暴晚凄凄、枯樹凍雲飢鳥迷、望裏寒光四邊白、

重重雪壓萬山低

古

冬ざれの古道森にめぐり入る

二羽三羽鳥とぶなり雪の森

清

暮るゝ頃宿につく、入れられし部屋も調度も、昨日のに劣りて、ませ張り、の小屏風の影に行燈の火あやうく、凡て木質にもあるまじく、覺えて、宿取り損こねしを、今更悔むも、甲斐なし、湯も效驗は著しと聞けど、胸わるき程、泥色のきたなげなり。

温泉の中や小謠うたふ花の春

清



山<sup>○</sup>里<sup>○</sup>の<sup>○</sup>酒<sup>○</sup>薄<sup>○</sup>く<sup>○</sup>して<sup>○</sup>酌<sup>○</sup>か<sup>○</sup>は<sup>○</sup>し<sup>○</sup>く<sup>○</sup>醉<sup>○</sup>も<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>ず<sup>○</sup>夜<sup>○</sup>も<sup>○</sup>更<sup>○</sup>け<sup>○</sup>た<sup>○</sup>る<sup>○</sup>に<sup>○</sup>松<sup>○</sup>風<sup>○</sup>音<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>び<sup>○</sup>  
しく<sup>○</sup>破<sup>○</sup>障<sup>○</sup>子<sup>○</sup>に<sup>○</sup>月<sup>○</sup>影<sup>○</sup>う<sup>○</sup>つ<sup>○</sup>る。

雪やむで山を甘日の月出でし

清

夜の雪三層樓に灯のもるゝ

全

巖壑風廻萬籟號、三更對坐酌殘醪、起從戶隙看庭上、

月色一天霜氣高、

清

山樓似撼北風號、耐此淒涼有濁醪、霜氣峽間寒欲白、

松梢鶴唳月明高、

古

さらでだにすびつの灰なりがちなるに、水の如き布圍の短ければ、

木枕に男同士の寒さかな

清

足と肩包みかねたる蒲團哉

古

と各つぶやきながら、頭さし出し、易源氏などは力及ばねば歌仙など催  
さむとて、清志翁先づ

湯女の傘さしかけし霰かな

清

といへば、古風人即ち底ふみぬきし足袋乾してある、破壁をもるゝ月影  
静にて、といふ、竹と月は五句去なり、火に螢は七句去なり、などのゝしり  
合ひて、寐言交りに名残表までつけてやみぬ。

擊柝聲嚴警夜闌、高樓寂寞歌吹彈、殘醪傾盡聯吟興、

古

半壁燈痕人影寒、

六日とく覺む、空晴れ渡りて、公園と名くる小山を照らす朝日いど、う  
はし。

雪の村鶏ないてあけ白し

清

己の刻宿をいで、歸途をいそぐに、昨日にかわりて暖かく、左ながら小  
春日和の如くなり。

芝山に雪きえのこる小松かな

清

茶の花のうね白し桑畑

古



白石橋のほとりに、奥羽鎮撫世良氏の墓あり。ふたゝび橋を渡りて、白石町に入り、汽車にて仙臺にかへる。

枯芝や石碑黒き岡の上

清

嗚呼、此行よし藍關に馬前まさりし程の壯景はなかりしものからわくらはの果敢なき旅にも多少は天の冥寵を得て雪ちらくの三日路を反古ぶくる重くなりて、目出たく機嫌よく風邪もひかずに戻りけり。

酒暈墨痕衣上明、風流算到可憐生、雖然多少辛艱在、

三日聊舒丘壑情、

古

市人にいでこれ賣らむ雪の笠

翁

歌の王

蝶

二

一痕の残月空にかゝりて霧は江上にたちこめたり浪にしたがうて下らむか風にもかつて溯らむか一葦の行くところにまかして遙に蓬萊の夢をたどらむもをかしけれど流水の來るところをたづねて遠く桃源の春をさぐらむもたのしからずや棹を中流に立て、曉風に面をさらせば冷氣肌を侵して宿醉なごりなう醒めゆくこゝちのせらるゝにへさきのあたり躍りし魚の波にとめし碧りの環のひろがりゆくさまさへ折からのながめなり。

忍びたいぞよ

忍ばせたいぞ――

梅に戀ひする鶯の初音か時は今秋の半ばなり岩間にむせぶ水のさゝ



やきかど聞けば松の梢にかなづる琴の音のそれにも似たりひなぶりの歌の文句をさりどはやさしき聲のふしかな主や何處にと見やれど霧深うして咫尺を辨せず餘音嫋々として空しく耳もどに残れるのみ歌のぬしは思ふに堤の上を行く人なるべしさらば上流の方に行きしか下流の方に行きしか耳をすまして續く文句の聞こえ來る方をうかがへばしばしありて

裏のほそ道

小藪から

聲はたしかに上流のかたより來りぬ。今さら思へば心狂ひたらむ人のしわざに似たれどわれは如何にもして美しき歌の主を見さだめたき心のおこりて止めがたく棹とりなほして何處までもと聲を暮うて流れをのぼりぬ。横雲東の天にたなびきて残むの月影も明星の光もいとかすかになり

たれど霧はなほ晴れやらす道芝の露ふみわけて行く足の音かすかに聞こえながらぬしは何ものとも見えわかざりけり。湖ることや十町ばかりたゞむき漸く疲れてつく息さへ苦しくなりたればまばし舟をとめて耳かたむくるに人の足音はたえてきこえぬやうなり。さてはあまりに心はやりてぬしより前きに舟を進めしかあるはわが舟のぬしに遅れけるかわれはさばかり舟の進みの遅かりしとも覺えざるに。なれぬ手わざに此のさきなほ舟を進めむことの覺束なければまばらく舟を堤下に繋ぎわが舟のおくれたるかはた歌のぬしの後れたるかを見さだめむと思ひつ。霧は漸く薄らぎたり舟をすてい堤に上れば何ともしれず快き香氣の清風にもなはれてわれを襲ひぬ。



げにもあやしき朝なるかな。さきの歌聲といひ、今また此香氣といひ、美  
 しきもの、快きもの、あやしきまで、我身をどらかす心にくさよ。  
 對岸の寺に撞き出す鐘の水を渡つて傳はりくる響きに驚かされ、顧み  
 れば紅暎うらく、と東の空にのぼれり。  
 さしも深う立ちこめたりし霧も、あさ日の光りに射られて、やうく晴  
 れゆきぬ。

見わたせば一面にまきわたしたる花の錦と見まがふまで、秋草の花今  
 をさかりと我が前に咲き亂れたり。どらばけぬべき白露を重げに、小萩  
 が花のしだれがちなるを、穗に出て尾花の誰れ招くらむ。風にたはるゝ  
 女郎花の、あだなる色さへなつかしきに、きちかうの花大きなるもきは  
 だちたり、藤ばかりかま、撫子、花いろく、に匂ふも嬉しき眺めなるかな。  
 されど、其花よりもなほ美はしきは、花籠かた手に、花野の中にたちたる  
 乙女の姿なりけり。

浦づたひ

天 隨

(一)

三河川合の山中に石橋の奇を探りてのかへるさ夜、十一時汽車に乗り、  
 豊橋をあとにして、西向しぬ。いつもながら、動搖する車箱の中に短夜の  
 夢も結ばぬくるしさ。

次の朝、ふと目ざめしときは、車すでに草津にあり。湖上の朝げしき、常よ  
 りをかしく眺めす。七時といふに、京都につく。

電氣鐵道を賃し、油小路といふにいたり、相知れる瘦虬といふ男を訪ふ。  
 かれ所用あり、午後より神戸にゆかむといふに、坐談わづかに數時。やが  
 てその刻限となれば、三人車をつらねて、七條にむかひ、又汽車に乗る。紫



石は大阪に下るつもりなりしが、おぞくも瘦虬の口車に乗せられ、鐵道工場見物せむとて、これも神戸まで來りぬ。

そも瘦虬紫石の二人は工科大学の學生にして、今は實地演習の爲に、はる／＼と出かけ居るものなりけり。すべて機械や工場など、犬の目に星なる吾つゆ面白しとは覺えねど、浮世は義理のかたばかりなるつき合の見物をぞなせし。大小の車輪旋轉する響すさまじく、吾のみは洋服ならぬに、近づけば袂を引かけられむ、おぶなしと注意されし面目なき友なる二人先づ笑ひ工夫どもまた笑ふ。

紫石は別れて大阪にかへりつ。吾は先づ旅店をさだめおき、それより又瘦虬と打つれて、とある酒樓に上る。名物とかや、大塊の牛肉、成程まづなく、酒は伊丹の丹釀となれば、酔心地あしからず。つきせぬ法螺の吹きくらべいゝ、加減に切り上げ、瘦虬手を鳴して、勘定と叫ぶ。足にまかして漫歩し、おのづと湊川神社に入りしぞ面白き。

境内のさまは、いつ見ても、般盛かぎりなく、東京にていはゞ淺草雷門に相當する所柄なれど、夜の賑は、眞に過ぎたり。たちならぶ露店のランプより吹き出す油煙は、天上に黒雲を漲らし。嗟來食を賣る呼び聲は、霹靂の落ちしに異ならず。肩摩鼓撃、汗を揮へば雨となるともいひたげなり。これを嗚呼忠臣の餘烈と見むには、それまでなれど、吾はたい何となく淺間敷やうにもおぼへぬ。あはれこゝ神社の域内には、五歩に燈籠十歩に花と出かけて、廟後には松杉の森をこんもりと、夜店もせめて門前にかぎることゝしたらむには、今少し神々しく拜まれつらむに。

東の門を出で、猶ほもうろつく。一散に馳せ來る車の上なまめいたる姿の、年は盈々たる三五ばかりの女二人、喃喃として語り合ふ。之れを見送りて、茫然佇立せる瘦虬は、狂奴ならぬ、木強漢の故態を脱出せるものか、うとまし、妬し。

さきに立ちてしるべ顔なる友の後に尾してゆけば、やがて福原の花街



晚餐をおはりて後、甲板の上にならべし籐編の安樂椅子によりかゝりて眺む。舟はすでに九龜の近海にあり、爛々たる落日、海に沈みて、萬頃の瀾色、紫に見ゆるけしき、えもいはず去歲わが杖履を着けたりし象頭屋島五劔の山々、なべて心ありげに吾を迎へて揖する風情、いと懐かしく覺えしが、海氣白く烟となりて、滄溟を渡れば、やがて有無の裡に入りぬ。追々に集ひ來るものは、吳客越人の別なく、打とけて語り合ふに、吾も志ばしは興を得たりしものから、生くら紳士との對話は、豕を抱いて臭を忘るゝに近しなど、ふと心に感しければ、ひとりかへりて船室に入る。枕頭には赫灼たる電燈の光、まばゆくして、睡ふさぐまでは幾許の時を、や經たりけむ。夏なれば、どうでもよかるべきか、軟かにして穢きたからぬしどね、いと心地よく、船腹をたたく波の音は絶えて聞えず。ピストンの響も一種調諧の音をなして、耳にうるさからず、今宵は海上の夢いとも穩なりき。(十九日)

(二)

波路はるけき、普賢洋を超え、早朝の瀬戸の急潮を截り、やがて硯の海の文字が關につきしは、亭午すこし前のことなりき。待ちかまへたる旅店の若者ども、ひたすらに引き入れむとしつれども、その手に乗る吾ならず、上陸して直に停車場に馳せつけつ。發車時間表を檢して、二時間近く待つべきことゝ知りたれば、廣くもあらぬ町中をめぐり盡し、怪しげる家に酒食をすまし、序なれば郵便局にかけ入りて、なつかしき方へのはがき數葉を認めぬ。こゝに一人の兪夫、わがものかくさまを凝視してありしが、終りしと見るや、この端書かきて玉はずや、おのが名をだにえかゝぬを哀れとおほさばなどいふ。そは安きことなり、ことこのよし、語り聞かせよといへば、ここよりは遠からぬ廣島縣のものなるが、たつき求めむため、年は若から



ねど、妻子なき身の尻かろく、さすらへ來りしが、折よく、さるべき工事のありたれば、日傭取となりて、もぐりこみ、一日六十錢を給せられぬ。依てその事どもを知らせかた、暑中見舞の状のやうに認めて下されよといふ。即坐に筆とりていふがまゝに仕しやりしに、頭あまた、ひ地に下けて立ち去りぬ。つらく思ひ廻らせば、この地は名たゝる炭坑などもあり、全九州の貨財輻湊するところなれば、よろづの物價いやが上にも高くなりゆき、かくは多くの給料を得らるゝなるべし。かくては九州もなか、侮られず、前遊の折とはこと換はりて、廉かるべきいはれなし。と、旅を命の貧生、豪囊の重からぬに、早くも前途の氣づかひをなし、初めたるわびしさよ。

一時五十分發の涼車に乗る。例の行きぬけの車箱、客の少きはよけれど、何となくきたなくて、むしあつきには、聊か閉口の氣味あり。車窓の外のけしき、殊に見るべき程のものとはなく、やゝあきかゝりし打しも、

車行乍ち松林の裡に入り、嵐翠涼籟に和して窓に吹き込みつ。程なく、香椎、それよりは打つゝきたる海汀にして、みなわが曾遊の所なりけり。箱崎につきて、車を下る。海濱に瀟洒たる亭樓のありたらむやうに覺えて、今宵は泊らむとの望を囑せしが、全くの思ひちがひなりしぞ恨なる。

やがて千代の松原をゆきぬけて、福岡の町に入り、中島橋を渡る。おもひ起すは四年前の夢、この地に官遊せし家嚴を省し、凡そ一箇月の間、滯留せし折のとなり、居はこゝを去ると遠からさりしかば、日ごと黄昏の浴後、そのころは僅に三歳ばかりなりし小弟を脊に負ひて、つねにこの橋上に涼を納れたりき。あゝ、那珂川の清流や、若杉竈門の翠微や、すべてその舊を改めず、われ今などて去り難き、おもひのなかるらむ。遙に東北の空のきはみを望み、千里の魂は慈親たちの今ぞ在ますなる。杜陵の方へと飛ひぬ。これより少しゆきて、とある旅宿に草鞋を解きつ。わが入れられし次の室には、教師さまにやあらむ、一人の優男の、數名



の女學生を相手にして、東西の文學に關したる大法螺、天もひひけと吹  
き立て玉ふがあり、いとく、殊勝氣に見えたりしが、もとははかなき  
耳學問にや、たましくならぬ誤は、くるしや、夜遅くまで睡りつかさりし  
吾に、腹筋よらせたる、罪なる人こそ怨めしけれ。(二十日)

(四)

西行して姪濱を過ぎ、今宿にいたる。この間、漁船の便ありと聞きしが、乗  
らさりしなり。やがて生の松原にかゝる、海を離れて潮光を見ず、いは  
水なき舞子の濱なり。滿地の軟沙、寸埃を留めず、目の及ぶかぎり、生ひた  
る千株萬株の松樹は、狼藉聳立、志かもとり、に老いたる木ぶりをか  
しく、樹下に箒を執て立てる翁と、媼と、その笠の下が白髪ならむには、晝  
に見えたる高砂の尉姥ともいはず、折には風海より吹きて、徐に長  
梢の頂を度り、笙簧に似たるゆかしき音を聞かすれど、炎日地上にきら

めきては、金砂を舗きたるが如くにて、眩ゆきに堪へず。九州は南疆とい  
ふからに日に近きやうに覺えて、こゝにての夏の旅は、苦しきものゝ一  
つなるべしと、今更の如くに感したりき。

前原といふ町より左折して、芥屋に向ふ。筑紫富士とぞいふなる可也。山  
のふもとをめぐりて、新町岐志などいふ小村を過ぐれば、路は次第に覺  
束なくなりぬ。青田に草を取りつゝありし農夫に問ひしこと幾度ぞ、一  
時ごろに、其地に着くを得て、村の入口なる立札を見て、それと知りたり  
し。大門岬參詣の舟を出す唯一の旅店の若松屋といふに投す。

これより直に舟出してよと頼むに、今は他に乗合なければ待ち玉へと  
いふ。そは善けれど、今日の中に人來らぬときは如何に、いや、明日の  
朝としもならば、御身一人にても必ず舟出しなむなどの問答終り、明日  
は唐津に泊まる定めなれば、孰れにするも差支なしと合點して泊る。日  
の長きを晝寐のみも仕兼て、物の本にてもあらば貸してよといふに、



煩はしとにや、探しもせで無しといふ。五時ごろに客ふたり來りしが、最早時後れたりとて舟を出さず。(二十一日)

(五)

朝の五時、今や衾を蹴て起たむとする途端、亭主が今こそ舟を出さむに疾くくどわめきしに驚き、倉皇尾して出づ。村家のうしろなど通りぬけて、二三町ゆけば、舟どものおきてある磯邊なり。このあたりすべて俵のやうなる圓き石のみ累りて、自然の石垣を築きたり。潮のひきかゝりし故か、あらぬか、鯨よる玄界の海いとも静かにて、漣波たに起らず。朝日花やかに春振山の頂にのぼりかゝりて、水にうつれる雲の色うるはし。舟はさゝやかなる漁船にして、亭主自ら櫓を推し、岸と並行して南にむかひ、すゝむこと數町、伊軋の櫓聲乍ち止みしとき、我舟正に巨巖の斗絶せしところに達しぬ。こゝ問はでも知るき大門の岬なり。

斷岬峭立、高さ百尺、東は陸につゞき、他の三面はわだつみの波打ち寄す。この岬、その勢は渴龍の海は呑まむず如く、その形は大龜の首さし延ばしたるに似たり。岬端の西面は、全部所謂玄武岩より成り、頂のみ帽の如く、少しく土壤を着け、松を生したれども、下方は全たく岩骨つを露出せり。これを組み立つるは、例の六角の石柱にして、幾千萬條といふを知らず。みな方八九寸より二尺にいたり、長は丈餘に及ぶ。中には稀に四角八角なるもあり、すべて行儀正しく東ねられてつみ上げ、寸分の斜もなく、高さ四十餘間に亘り、遠く望めば城郭の石壁に似たり。むかし帝紫薇宮に在まし、八卦爐中に燒殘せる餘材を取て大地に投下し、自然に丘を爲す。爾後幾千年、玄界の怒濤日夜やまらず、奔馬の如く、轟雷の如く、襲ひ迫り、撞撃衝突、飛瀉噴散の時、雪花狼藉やうやくにして、巖丘の弱處を破り、之を窪となし、遂に一大靈窟を開くに至りぬ。大門の奇や實に岩にあらずして、この窟にあるなり。



やがて岬角をめぐりて、正に洞口にあり。こゝ海水頗る深く、湫潭百尺、藍色凝りて黒ばみたり。下には何物の棲むやらむ俯して見るだにおそろし。舟は歸らむ折の便を計りて、こゝに轉廻せられ、舳をさきにし、徐々として洞中に入りはじめぬ。洞のひろさ幅五間ばかりもあるなれば、たやすく入ることを得たりしものからず、むに從て漸く狭くなりもてゆき、殆んど五十間ばかりも入りたるとき、やゝ左にめぐりて舟をとめぬ。

仰き見れば、頭上四五間のところまで垂れかゝりし大角柱は、長短ひとしからず、墜ちむとしてわづかに墜ちさるものゝ如く、人をして畏懼の念を起さしむ。ふかき洞の奥にしあれば、陽光到らず、幽暗なるはいふまでもなく、陰森の氣風となりて、吹き起り、面を拂へば、いとも冷かに覺え、ふど發したるわが聲の反響して、さなから二聲のやうに音づれたるにも驚かされぬ。奇已に窮りて、凄更に堪へず、飽くまで眺めたりしものから拙きわが筆、その十の一をたに盡くし、難きをかこつもはかなしや。

(六)

これより先の方は、いよ／＼狭く、いよ／＼暗く、舟もすゝむに由なければ、尋常の遊觀はこゝを限とするなり。されど若し鹽に乗りてゆけば、しばらくして沙汀となり、なほ歩を拾ひつゝ、ゆけば、暗黒漆の如くして、咫尺を辨せず、無数の仙鼠飛翔して、臉を撲つこともありとぞ。その又さきのところは、むかし膽力ある好奇の一士人が、燭を點じて數十歩すゝみ入りしに、窟中俄然鳴動し、海波脚底に湧起しければ、心胸惶然として、倉皇退却し、からくも舟を得てかへりしことあるよしにて、神靈の宅するところ、凡俗の人の玄聖を窺ふを許るし玉はぬか故ならむとて、その後、入りし者絶えてなしとぞ。これ等はすべて口まめなる亭主か、案内者ぶりに語り聞かせしことゝもなり。



大門岬の北部は、天の御柱石よりつゝいて、風神の窟あり。但しこれは僅に窟状をなせるのみにて、もとより比ぶべくもあらず。それより渡戸となりて、陸につゞけり。又丘後には大祖神社といふがあり、大門の洞は實にこの社の奥の院として崇めらるゝなりけり。傳へいふ、この地は諸冊二神禊祓の靈蹟にして、天照太神及ひ祓戸の諸神出現の地なりとか。さればこそ大祖神社には、これ等の神々をいつき祀りたるなれ。その末社には、綿津戸神社、鹽屋神社、彦屋神社など、列星の如くに、あびたゞしくたせ玉ふ。又これより程遠からぬ立石の崎、引津の海は、いづれも古歌に見えたる名どころとかや。扶桑國志には、橋の小戸の地、筑前の玄界洋の海邊をいふとあり。或はいふ、橋は立石のあて字にして、小戸は大戸なるべしと。これ必ず然りや否やは、詳にせずと雖も、この地が橋の小戸たることは、他に考證のあるなれば、殆んど争ふべからずとぞ。これはかの宿屋にて遊覽の客に頒ちくれる神窟圖略記といへる一枚の摺物にする

したるものにして、頗る覺東なく、實際小戸の遺跡は日向の國にありといふなれども、この地が古昔より多少ゆかりのありしことのみは眞なるべし。あゝ奇洞の怪異は、すでに前に述べしが如く、たゞ僻陬にあるの故を以て、むかしよりの名所をも併せて、今は觀るもの少くなりゆき、勝名籍甚ならず。範山模水の筆をもて之を彰さむは、果して誰に囑すべき、われは今みづからその人に非ざるを愧つるのみ。おもふ、われかつて福岡に留滞せし折、家弟とこの地に遊はむとを約せしが、果さずやみつ。その後、弟ひとり探討の遊をなせしよしにて、その景を詳しくしるして、おくり來りし消息の末には、この奇勝は實にわか兄の仙筆を待ちて、初めて世に顯はさしむべし。おはれ、願はくは他年再び來り玉はむ日、舟を玄界怒濤の上にかべ、舷をたゝいて、天風に吟嘯するを得むかなど、かきつけたり。今や吾ひとり來遊して、弟と偕にするを得ず。こゝにむかしを、おもひ出て、低徊し、黯然して、情に堪へざるもの



ありき。

(七)

かくて舟こぎ戻すに、曉烟やうやく霽れわたり、名さへゆかしき姫島の青螺は、手のどくあたりに浮び、壹岐の島は、縹緲の際にほの見え初めぬ。南の方には、浮が岳の峻嶒、突兀として空を衝き、尖頂を旭光の中に閃めかしたるがあり。見わたすかぎり、目もはるかなる涼しき朝の海、面には刈菰をみだせし小舟の白帆の影をうつせるなど見えて、すべて、けしき、書手も及ばぬまでなり。

かへりて朝飯を畢り、かの二客よりさきに立ち出づ。事こまやかなる亭主の教に従ひ、岐志新町よりさきは、昨日の路にかゝらす。小山一つを越えて、渡場のありといふ寺山の村につく。

田間に立てたる高札をしるべに、渡守の家をいたりしが、錠はさゝねど、

戸をひきよせて、全く人氣なく、馬一疋うまやに藪をかみつゝありしのみ。去て町中をたつねめぐりしも、遂に見えず。來かゝりし少女に問へば、妾も知り侍らず、たゞ大聲出してわめき玉へといふ。教の如く、兩三度あてもなく叫びしものから、出て來らず。詮方なければ、孫傳が歩水の仙術を心得ざるまゝに、弓と弦との差あるまわり道とは知りつゝも、海汀をたどらむ外あるまじとて、將に踵を回らさむとせし折しも、村家の間よりぬつと出て來りし一人の男、肌には單衣のいとなれたるを着け、腰には布の細帯の垢むみたるをしめたるが、恭しく會釋して、渡船を求め玉ふは、御身にやといふ。弘誓の舟に棹して、彼岸に人を渡すべきもの、冥加の程を忘れて、旅人をまどわせし腹立しさに、少しく厭味をにほはすれば、ひたすらに恐れ入りて、早く乗り玉へ、舟をも急かむに、地にひれふすばかりに詫び入りし罪なき。折しも退潮なるか上に、風逆に吹きよせければ、帆を張けむよしなく、力をかざりに櫓を推せども、わづかに半



里ばかりの舟路、案外にひまどりぬ。されど三里の陸路を迂行するに、く  
らぶれば、その早きこといふまでもなく、立石崎を右にながめつゝ、島山  
のたゞすまひいともをかしく、面を拂ふ涼風にあつさ覚えぬは心地よ  
し。舟を乗てしは松本といふ所にして、半里歩すれば深江の市なり。  
福井吉井などいふを過ぎ、神功皇后か釣し玉ひきと傳ふる玉島川を渡  
れば、濱崎といふにいたる。その間の路はすべて海汀にして、浮が岳の麓  
をめぐるなり。汀邊には青松聳え、波上には白帆飛ぶ。崖上には、旅人の命  
なる岩清水の迸れるなどもあり。何處なりけむ、風吹きぬくる涼しき茶  
店に、午げしたゝめ、一ねむりして立ち去りぬ。

これより唐津にいたる二里の間は、虹の松原といふところなり。かく名  
つけし故よしをたつぬるに、このあたりの濱邊いさゞ殊に美しく、潮落  
つれば、沙地の干潟、白く見え、夕日さいれば、くれば、くればなるの色を  
さらし、並木の松は青々として、三色鮮かに映發するけしき、唐津あたり

より眺むれば、弧形の磯濱、全く虹のやうに見ゆることあれば、なりどか  
この松樹は、いまゝで見し、いづれの松原のよりも古く、數さへすぐれ  
てまされり。幾億株の中の唯一つ、いづれの木か知らぬぞ、むかし豊太閤  
の手づから撫して盤桓されし老松の、今になほ千歳の緑こまやかに、生  
き残れるがあるよし。公の勇威に怯れしにや、蟬その折に、はたと鳴きや  
み、それより後はこの松林に絶えて住まぬよし。こは後に聞きしことな  
るが、思ひめぐらせば、成ほど蟬聲を耳にせさりしやうなりき。

松林の間より南に近く見ゆる一座の山、その頂は平かにして、さながら  
讃岐屋島山の傍を残りし、心地ぞすなる、これなむ佐用姫があはれを止  
めし名たる、領巾塵の山なりける。かの想夫の情の凝りて、化成せし淡  
紅、堅緻なる一塊の大石は、今に山麓なる某寺に藏められてあるよし。日  
くれかゝりたれば、寺にも詣てず、山にも登らず、天半の翠色を凝望する  
こと良久うして立ち去りぬ。



満島を過ぎ、松浦川を渡れば、唐津なり。むかしの城下なれども、今はさびたり。こゝより長崎に航する舟の、明朝出つべきよし、あるところにて聞きければ、それと心を定めつ、さるべき旅店に宿かる。夜になれば、漁船宿の若者、わざ／＼切符賣りつけにとて來りぬ。(二十二日)

(八)

朝五時ころ、出帆の筈と聞こえし、漁船はいかゞせしにや、朝飯すでにをはり、九時すぎどなれども、なほ船宿のむかひの者さへ見えず。宿の主來りて慰むるに、さま／＼のこゝを物語りし序に、神崎七釜のこゝを問ふ。それはこゝより三里ばかり北の方にあり、七釜の名に負かずして、洞窟七つあれども、芥屋のに比すれば、物の數ならず。又わざ／＼漁舟をやとふ不便もありなど、こたふるに、漁船の出づるは、いつとも定めかねるに、若し乗り後れてはとおもへば、行きて見る氣も起らず。鄰室の客も、われ

と均しく長崎に赴くよし聞きければ、同行を約し、待つとしなれば、山鳥の尾の長々しく覺ゆる時の無聊を、互に慰め合ひつ。聞けば、わが五城にありしとき、全く知らぬにてもあらざりし人の弟なりけるに、いよ／＼打とけて語りぬ。

十時ころ船出でつべきよし、ふれ來りたれば、急き支度して出づ。十餘町も馳せ通し、舊城内をぬけて、埠頭にいたり、舢舨に乗りて、漁船に乗り込む。舊城は海に臨みて、石壘いかめしく、今に残り、讃州高松のと同じさまなり。やがて一時間ばかり経たりし後、舟は錨を抜き、波を截てすゝみぬ。嬉しやといふ間も、あらせず、海路わづかに二、三里來てけりとおもふ頃、名だに知られぬ荒磯邊に、とゞまりぬ。何故とたいせば、積荷卸ろさむ爲にとて。

烟草の火を貸したるを話のいとくちとして、一人の男、われこそは運漕業を職とするものなるが、此度はこの舟を借り切にして、興業鐵道會社



の鐵材を神戸よりつみ來り、こゝにて仰ろすなれば、少くとも四時間以上はかゝるべしといふに、われも人も先づうんざりしぬ。語はなほもすすみて、凡そこれ等の鐵材は、みな英國より來るなるが、長崎にさるべき大取引をなす内外の商人なければ、みな神戸にて爲し、貨物は一旦長崎を経て神戸に來り、かしこにてあらため受取り、その後、又われ等の手をかりて、こゝまで送りもどさるゝなり。外國貿易の不便なる、今に尙ほかくの如く、いらぬ費の多くかゝるは、心あるものゝひそかに憂慮するどころなりなどいふに、吾もさることよと深く感し、これ大切のことなりとて耳傾けてぞ聞きぬる。

荷もやうやく仰しをはり、こゝを發せしは、午後四時のころなり。領巾、山も今は見えなくなりぬ。遠目にも見てゆかむとちもひるたりし神崎の岩屋は、いづくとも知らず打ち過ぎつ。岬角いくつかめぐりて、船は呼子の灣中に入りぬ。こゝにて少しばかり乗客の出入あり。陸上なる群衆の

わめく聲雷のごとく聞ゆるを、いぶかしみ、何事ぞと人に問へば相撲にこそといふ。

(九)

ほどなくこゝを發し、加部島を右手に見て、狭き海峡にかゝり、さし初むる潮の急流を截り、船は名護屋の下を過ぎつ。入日名殘の影迷ふ頂平かなる丘の上に、松の木さびしげに立てる、そこはむかし太閤様が朝鮮征伐の折行營をしつらへ玉ひしところ、その最も海に近くして一つ離れたる丘こそ、徳川殿のいましゝところなれなど、自ら名護屋のものと稱するひとり翁は語りぬ。嗟乎雄風海をわたりて、遙かに鷄林までも吹き靡かせたる豊太閤の勇威は、神にこそあはれ、この公一たび逝いて後、十萬の兵をして海外の鬼とならしむる勿れどの遺言をその儘に、貌貌むなし、くかへり來り、すでに幾許の血を流して得たりけむ、異邦半壁の



江○山○は○一○擲○土○の○如○く○ま○た○顧○み○も○せ○ず○關○が○原○の○戦○は○て○し○時○や○流○れ○涸○れ○  
 じ○と○見○え○し○德○川○の○世○に○鎖○國○の○策○は○實○行○せ○ら○れ○桃○源○洞○裡○の○春○夢○と○こ○し○  
 へ○に○醒○め○ず○坤○輿○を○吞○ま○む○霸○氣○は○全○く○餒○え○盡○し○臺○灣○に○暹○羅○に○一○時○の○鵬○  
 圖○を○な○し○た○る○人○々○の○奇○蹟○も○人○間○一○部○の○海○外○異○傳○に○名○は○か○り○を○止○め○て○  
 い○つ○し○か○昔○し○く○の○物○語○と○し○も○な○り○は○て○つ○今○に○繼○く○も○の○あ○る○を○聞○か○  
 ず○九○原○若○し○起○す○べ○く○ん○ば○不○死○の○英○靈○果○し○て○何○の○感○を○か○爲○す○わ○れ○の○公○  
 を○欽○慕○す○る○や○久○し○仍○て○悵○然○鐵○欄○を○た○い○て○吟○嘯○す○る○こ○と○多○時○  
 渡○戸○崎○を○め○く○れ○ば○玄○界○洋○な○り○潮○勢○遠○く○三○韓○を○汨○し○て○高○浪○舟○を○盪○し○掀○  
 簸○下○上○頗○る○甚○し○心○地○た○ち○ま○ち○悪○し○く○な○り○か○り○し○に○同○行○の○人○の○な○さ○  
 け○に○て○甲○板○の○上○の○今○あ○る○處○に○け○つ○と○敷○き○延○べ○荷○物○の○包○を○假○の○枕○に○し○  
 て○横○臥○し○つ○殊○に○船○暈○を○覺○ゆ○る○に○い○た○ら○で○安○す○々○と○眠○に○落○ち○し○は○う○れ○  
 し○か○り○き○  
 この日は實にわか地に落ちし後第二十三回の生日にして、おもひ起す

は、去年紀伊の南端申本といふにて、この日に遭ひしことなりけり。なつ  
 かしき慈親が膝下に開かるべき祝の宴、この六七年ば、そのたのしさを  
 知らず志大にして才疎に書劔むなしく飄零に任すしかも萍水流轉の  
 甚しきこの孤身を以て天地の一沙鷗に比するに至るわれながら哀れ  
 なり。  
 夜將に半ならむとする頃、船は平戸の海峡にあり、兩岸の燈火燦然とし  
 て水に落ち、天上の星光と相きそふやうなるこれも一つの眺なり。乗合  
 多き漁船なれば、夏は甲板の上に潮氣を受けて、一夜をすむこと、悪し  
 からず。されど常に苦しとおもふは、用ありけに馳せまわるぼうい等に  
 まで、邪魔ものとし見られ、彼れ吾脚をふみても、謔言だにせぬことなり  
 けり。(二十三回)



け°や°た°撞°  
む°み°に°く° 夕  
り°に°よ°や° の  
は°な°り°ゆ° 鐘  
低°り°谷°ふ°  
う°ゆ°に°べ°  
ま°く°つ°の°  
よ°鳥°た°鐘°  
ひ°邊°は°の°  
け°野°り°こ°  
り°の°て°え°

鐘にうらみは数くござる……  
それ遠寺の鐘の聲には、しやそうむ  
なしく暮れ、また明けなむさしては、別  
れをもよほす、まぐらの鐘……

疎鐘吟

蝶

二

(十)

朝六時船は佐世保に入りぬ。われ海軍の通ならねば、その名を知らねど、  
山の如くなれる軍艦二艘、碇泊し居たり。陸の上には、やがて又瀛車の馳  
するがあり。敢て珍らしどもおもはねど、人なみに、さも初心らしく、鐵欄  
につかまりて、これをしも眺めぬ。九時ごろ、船は再び發し、岸に沿ふて南  
航す。右手に送迎する島嶼絶えずあり、その島陰を離れしときは、波つね  
に少しくあらし、やがて五島も波路の末にあらはれ來り、船は正午を以  
て着かむとあらまし、長崎の港にぞ入りぬる。(二十四日)

廻國の笈にさし行く團扇かな

大 祇



ね	う	う	の	む
ぐ	た	き	ぞ	ね
ら	ふ	よ	み	に
に	を	の	た	か
い	も	な	え	よ
そ	ろ	ひ	た	の
ぐ	ど	か	る	ぞ
	り	か	る	み
	の	せ	る	な
		む	る	り
			る	の

父

ひ	こ	な	か	い
か	の	ぶ	ね	ざ
り	よ	り	が	か
は	を	の	つ	へ
な	や	ち	よ	い
に	み	に	る	り
ぞ	の	き	の	あ
	ま	え	こ	ひ
	く	て	ゑ	の

母

父



ひ	つ	ま	な	か
つ	ち	づ	に	ざ
ぎ	そ	か	た	し
の	こ	か	の	の
く	は	に	わ	は
ち	か	ね	が	な
る	か	む	や	の
ど	の	れ	ど	の
も	か	を	そ	あ
	げ	さ	の	せ
		な	あ	て
		ご	せ	
		よ		

父

す	ゆ	よ	か	
に	ふ	る	た	
は	ぐ	の	む	
ま	れ	や	き	
ひ	い	あ	た	ゆ
な	そ	る	れ	ふ
ど	ぐ	も	ど	ぶ
り		の		ぶ
の		を		を

母



あ		な	く	な	を	
ゝ		み	ち	さ	と	父
あ	母	だ	に	け	こ	
め		に	は	に	ご	
に		わ	も	な	い	
つ		が	ろ	か	ふ	
け		み	き	は	な	
		な		り	か	
		り	ど	の	れ	
				を		

き	か	ひ	さ	え
づ	へ	と	み	い
よ	れ	り	し	ご
き	と	の	き	ふ
を	う	わ	と	な
と	な	が	こ	れ
ろ	が	や	に	が
か	す	ど	を	ゆ
な	か	に		め



わ	な	う	う	
か	つ	す	ぐ	
ば	は	こ	ひ	
し	ゆ	う	す	
み	あ	ほ	あ	く
ど	い	ほ	い	ち
り	る	の	の	び
が	は	い	の	る
み	れ	ろ	い	や
	て		ゝ	

母

さ	は	す	お	こ
く	る	が	ほ	ゝ
ら	は	た	し	ろ
ば	か	を	た	を
な	ま	も	な	つ
さ	ゆ	の	で	く
く	こ	に	し	し
	め	ふ	こ	つ
	て	れ	の	く
		ば		し
				け

父



む	う	ゆ	ふ	け
ね	ら	き	ゆ	が
に	み	よ	ふ	れ
た	く	り	む	も
か	い	は	の	し
げ	き	し	ね	ら
も	ど	ろ	の	ぬ
な	ほ	き	の	た
し	り	さ	の	ま
		ほ	ら	
		ら	け	

母

こ	さ	あ	ひ	そ
ゝ	は	き	か	ら
ろ	る	は	り	に
は	も	よ	す	か
す	つ	な	め	ゝ
み	き	か	も	あ
づ	の	の	し	か
に	な	き	き	ぼ
わ	き	ち	ど	し
た	か	り	か	の
り	げ	て	な	

父







か	あ	あ		や	ふ
け	ゝ	ゝ	父	さ	る
し	ほ	は		し	ゆ
た	し	な		き	き
あ	ゆ	と		は	ふ
だ	き	み		な	ゆ
し	と	つ		の	の
の	み	み		あ	ひ
ゝ	つ	つ		り	も

た	ふ		ゑ	し	
の	く	母	く	ゝ	
し	か		ぼ	ゆ	
き	ぜ		の	た	
ひ	あ		う	か	に
か	つ		づ	な	ほ
り	の		の	る	ひ
あ	ひ		と	う	あ
り	も		き	み	り



な		さ	う	志	
れ	あ	く	す	の	父
が	つ	ら	こ	て	
す	れ	の	う	に	
い	ば	は	ば	ふ	
し	い	な	い	れ	
き	づ	の	の	し	
	れ	の	じ	く	
	る		も	ろ	
	も				
	ち				

に	う	は	ひ	つ
は	で	か	と	ゆ
し	の	な	よ	よ
の	た	く	の	り
い	た	そ	わ	い
か	ぐ	の	き	の
に	ひ	ゝ	あ	ち
せ	な	は	れ	か
む	き	な	て	な



さ	む		き	た	
む	ね	母	え	ま	
る	に		ゆ	し	
に	た		き	ひ	
し	あ		し	つ	あ
ゝ	ら		み	ち	ら
の	ざ		を	の	ず
い	れ			も	ど
ろ	ば		い	と	も
			か		
			に		
			せ		
			む		

つ	つ		か	な	ひ
ゆ	き	父	は	れ	か
の	よ		き	が	り
け	り		は	み	を
が	き		て	ど	ま
れ	よ		た	り	な
は	き		る	の	ざ
	よ			か	し
	き		あ	み	の
			め	も	か
			し		げ
			づ		
			く		



け	い	ひ	た	あ
ふ	と	ご	と	れ
も	し	と	さ	て
ひ	わ	ふ	み	は
く	は	み	し	も
ら	か	ち	さ	と
す	の	を	に	の
か	べ	わ	ね	は
な	に	け	て	ら

母

そ	に	ひ	こ	ち
の	ほ	か	ほ	し
い	ひ	り	る	ほ
は	に	に	も	の
つ	み	み	ゆ	め
は	ち	ち	きの	ぐ
な	し	し	のは	り
ち	ど	も	だ	し
り	も	も		ど
				き

父



志	な		そ	み	か		
き	が	父	ら	ず	す		
み	き		に	や	か		
を	ゝ		と	む	に		
わ	あ		ひ	ぬ	ひ	は	
た	し		と	け	と	か	
る	あ		だ	い	お	の	
	と		ま	で	と	か	
	は		を	ゝ	を	げ	

き		よ	わ	ゆ	か	
ゝ	母	る	れ	ふ	ね	父
た		に	も	ぐ	に	
ま		な	い	れ	う	
は		る	へ	つ	な	ら
ず		こ	ち	ぐ	け	み
や		そ	を	る	れ	は
		そ	べ	き	ど	
		け	き	ば	も	
		れ				



け	ど	か	あ	こ
が	ろ	な	ふ	ゝ
れ	に	じ	れ	ろ
も	う	む	て	の
ね	に	わ	い	い
む	ご	が	づ	づ
り	り	つ	る	み
た	え	ま	が	よ
る	の	よ	は	り

父

う	げ	そ	な	
れ	に	ら	が	
ひ	く	を	め	
の	る	な	に	
と	わ	ほ	ひ	か
ぎ	が	し	と	ぜ
ゝ	こ	の	だ	の
れ	ゝ	か	ま	お
て	ろ	げ	は	と

母







星　　ひ  
 に　　と　　男  
 も　　夜  
 わ　似　た　逢  
 が　た　な　瀬  
 こ　る　ば　の  
 ひ　　た  
 よ　　の

怨　戀　僧　あ  
 み　に　よ　け　曉  
 の　く　あ　の　の　鐘  
 た　る　は　か  
 ね　へ　れ　ね  
 と　る　や　撞  
 な　ひ　世　く  
 り　と　の　や  
 に　　な　ま  
 け　　か　寺  
 り　の　の　の

け　な　け　人  
 む　み　む　や  
 り　だ　り　き  
 は　か　は　は  
 絶　は　闇　て  
 え　か　に　し  
 ず　ぬ　き　と  
 續　に　え　り  
 き　ひ　ゆ　べ  
 け　墓　け　野  
 り　の　ど　の

た　お　ゆ  
 れ　に　く  
 に　の　て  
 た　す　は  
 み　の　き　み　よ　と　ち  
 ち　ま　く　か　み　ほ　か  
 し　む　も　と　の　し　け  
 る　の　く　れ  
 べ　を　に　ど



い	な	そ	ち	か
ま	れ	の	ゝ	た
は	に	か	に	し
た	あ	ひ	く	く
な	う	た	だ	く
り	れ	あ	き	ち
に	し	り	し	は
け	さ	て	ゝ	て
り	は	か	ろ	ぬ

男

音 <sup>な</sup>	こ	君	人	へ
を	ゝ	こ	目	だ
の	ろ	ひ	の	て
み	か	わ	と	の
泣	り	れ	せ	川
き	が	は	き	け
て	が	は	に	れ
す	ね	た	れ	ど
が	の	ゝ	て	も
ら				

女



え	か		あ	立	ま
だ	の	女	も	ち	た
は	あ		ひ	わ	の
い	ほ		を	か	あ
く	見		く	れ	た
つ	よ		ら	ゆ	の
に	や		ぶ	く	み
	き		べ	の	な
	み		き	の	く

ま		こ	四	あ	夜
し	男	ひ	つ	け	ご
て		す	の	の	と
ひ		る	た	わ	夜
と		も	も	か	ご
夜		の	ど	な	と
を		ゝ	の	し	に
		か	は	く	見
		や		て	て
				も	も



我	へ	ふ	よ	
れ	だ	た	し	男
は	て	り	や	
な	の	が	わ	
こ	な	か	つ	な
の	か	よ	ら	ご
わ	じ	ひ	く	り
か	せ	路 <small>ぢ</small>	と	か
れ	ば	に	も	な

お	お	ひ	な	
も	も	と	が	
へ	へ	つ	れ	
ば	ば	の	の	
惜	つ	入	す	わ
し	ら	る	ゑ	か
き	き	も	は	れ
	か	の	に	て
	れ	を	ま	も
	か		た	
	な			



逢 ふ を わ か れ の  
あ は れ は か な き  
女  
こ ひ の み ち に は  
置 き に け む  
せ き て ふ も の を  
い つ の 世 に  
み ち の ゆ く て に  
あ り と 聞 く  
た び と の

や ま か は た ど る  
男  
わ れ は 惜 し ま じ  
こ の な ぶ り  
へ だ て の せ き の  
無 か り せ ば  
ふ た り が な か の  
か よ ひ 路 に  
よ し や な ぶ り は  
女  
つ き ず と も



かね 撞く 僧の  
 つれよさよ  
 まだあかなくにつきの  
 言ふべきことども  
 女  
 まだきもかねを  
 撞きにけり  
 こゝろなきかな  
 山僧は

せめてこよひは  
 男  
 わが身のうへとけむ  
 誰が言ひ初めて  
 はじめとは  
 かみにほとけにれど  
 ねがひしを  
 なるにけむ  
 此處に



ひとのなげきも  
知らずして

撞<sup>○</sup>僧<sup>○</sup>音<sup>○</sup>う<sup>○</sup>  
木<sup>○</sup>は<sup>○</sup>す<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>  
持<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>ざ<sup>○</sup>み<sup>○</sup>  
つ<sup>○</sup>も<sup>○</sup>ま<sup>○</sup>を<sup>○</sup>  
手<sup>○</sup>は<sup>○</sup>し<sup>○</sup>ま<sup>○</sup>  
を<sup>○</sup>ず<sup>○</sup>き<sup>○</sup>  
ゆ<sup>○</sup>身<sup>○</sup>木<sup>○</sup>て<sup>○</sup>  
る<sup>○</sup>を<sup>○</sup>が<sup>○</sup>吹<sup>○</sup>  
め<sup>○</sup>ち<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>き<sup>○</sup>  
け<sup>○</sup>い<sup>○</sup>し<sup>○</sup>上<sup>○</sup>  
り<sup>○</sup>め<sup>○</sup>に<sup>○</sup>る<sup>○</sup>

長安城中月如練。家家此夜持針線。  
仙裙玉佩空自知。天上人間不相見。  
長信深陰夜轉幽。瑤階金闕數螢流。  
班姬此夕愁無限。河漢三更看斗牛。

千松島

天隨

雪いたくふれる又の日四方のけしきのえならずをかしければいでや  
松島に遊ばむとてきもあへる友どち五人六人して日高きほどにいづ  
師なる道人は鹽釜にてまち合せむと流車にてゆき給ふ此日空いとよ  
く晴れて日影のどかなりとく原の町をすぎ左に折れて行く程に遠山  
の雪を戴きて空高く白うみえたるいとをかしくをちこちの木々そこ  
はかどなく霞み渡りてあさ緑に匂へるいと心地よし繞石匂あり

松原に虚無僧ひとりかすみけり  
むらくと小松みえけり春の山

かへり見れば宮城野はなべて白妙なり時に綾孫のよめる  
白金の海とみるまでふりしける



雪にはてなき宮城野の原

道すがら、託寄口を開きて、檜の梢に雪のかゝれるは遠目にこそいみじ  
うめでたけれといへば、孤舟なべての木皆しかり、雪の朝など庭の木々  
よりは山の端の松杉などこそ、をかしからめといふ。ある人之を聞きて、  
ひとり木のみやは、かねて音にきゝたる人の、いかばかり、いみじからむ  
とおもはるゝを、共にかたらへば、やがて心おどりのせらるゝなど世に  
はいと多かり。何事につけ遠からむは、近からむより、ゆかしき物ぞかし  
さあらずやといへば、みなく、いしくもいはれたりといふゆきく、て  
岩切につきぬ、こゝにてひるげをすまし、まばし、勞をやすめて、又ありく、  
とある家の前にて、繞石口ずさむ、

ほろくくと枇杷の花、落つる二月哉、

氷わつて鍋ずみあらふ女かな

綾孫しばく、後れたるから、そここゝに待ち合して行くほどに、道はか

どらで、やうく、三時もすぎつらむとおぼしきころ、鹽釜に入りぬ  
師はさぞなまちわび玉ひけめと、急きて定めあきし宿にいたれば、主出  
て来て、亭午ともならぬに、茲につき玉ひしが、御身らの來ると、あまりに  
遅かりければ、まぢあぐみて、獨り先だたちて舟出し玉ひぬといふ、いと  
本意なけれど、詮なし、やがて舟にのるべき所にわたる、時に天隨

佳期幽會太關情、誰負松洲詩酒盟、無限春潮鹽浦水、

扁舟只要借帆行、

と口ずさむ、舟もとのへり、みなく、打のりて千賀の浦をこぎ、いづ、繞  
石吟あり、

春風や此浦船に帆を揚げて、

綾孫の三十一文字出來たりといふを聞くに

鹽釜の浦に心のとまらぬは

千松島ねのみえはなるらむ、



ひたすらに舟はいそげともしほやく

浦のけふりもすてかてにする、

風すこし吹きたれど波いと静かなり日の光かすみてほのかなるに松  
生ひたる島影一つ二つ浮びいでたるすいろかなる人もあはれとおも  
ひつべし折しも汀の蘆間より水鳥三つ四つにはかに立ちて松島の方  
へ飛びゆく二度三度こなたをかへりみつゝしるべ顔なるもいと心地  
よしかの鳥は何なりや鷗にやあらむと一人がいへばいな鷗には小さ  
し鴨なるべしといふうち天随たれたる頭をもたげつゝいとも聲高に

潮光濃碧漲痕新

鏡裏細波風縝鱗

天女島邊廻棹去

白蘋吹滿一灣春

碧波萬頃水連天

麗日和風遙渚煙

空際金華看意態

黛光鬢影獨輝娟

浦雲島影水滌洄

一幅煙波圖書開

澹宕心情同調者

白鷗爲侶莫相猜

と吟ずしはしにして名にあふ島々はや目の前にあり心をかけにし雪  
は大方きえて島根まだらに残れるはや本意なきものから心ことな  
る松の根ざしめづらしき枝ふり緑のいろさへ世の常ならずをかしき  
に海の面は鏡のやうなれば水底の影みだれずいと清らにみえたる何  
心地かはせむ島は船のまにゝあるは露はれあるは隠くる時に綾孫  
のよめる

われも又雄島の磯のあまとなりて

千年の松のかけにすまはや

おもふとち舟こきいて、松島や

霞をわけてみるめ摘みけり

天随紙をのべて、

詩囊吟筆此時携

獨苦神思試品題

老松殘雪彎環水



好景徧教望眼迷

一舸風流樂正融

壓倒人間澹墨工

俗情拋去與何窮

看來絕大天然畫

どかきつく

折からかなたの波間にて、かしましき聲すおどろきてながめやれば、鴨にやあらむいくつともしらずつらなして浮びる行きつもどりつ、打なくにぞありける。あながまかゝる所には一つ二つなどさびしげに鳴き居たるこそつきくしけれ。かくては興さむるわざにこそと一人がいへば、又一人先の鴨もかしこにまじりをらむをなどてかくつれなくはいふぞといへば、さりとてもかしましといふもあり鳥もさすがにのどけきにやあらむ、さなどがめ玉ひそなど、おもひくにあげつらひたるこそなか／＼にかしましけれ。天隨からうたを口ずさむ。

潭蘸長松龍氣腥

沙禽聲隔水烟聽

遙看艇子洲陰轉

斜受翠嵐帆影青

暝色煙浮海色蒼

憂憂相呼波上翔

鷗沙灣外已斜陽

無端鴨陣驟崩盡

日暮れかゝりて、沖ほのぐらき頃松島につきぬ。とみれば汀にたゝすむ人あり、天隨すなはち。

天風歌嘯韻如秋

高唱怕他驚鷗

似有埠頭人待我

行教舟子短橈留

師なる道人なりけり。みなくいたく打喜びて、いそがはしく舟より上りて定め宿にいたり、装を解きくつろぎて座す。道人いと笑ましげに事よしを問はれ、五絶を示さる。

相約無人到

懶餘詩不成

水天唯一碧

孤舟之和す

愧余作違約

舟裡興難成

吟發春潮上

無君奈此行



やがて端近ういでしなかむ夕かすみ立こめて遠き島は更なり近きも  
おぼつかなりもてゆく繞石まづ詠ず

一つ、島くれてゆく春の海

雪空や蟹舟かゝる千松島

折しも入相の鐘ひゞきわたりければ孤舟

天地をひとつにこめて松島や

かすみを渡る入相の鐘

海枯すなはち

島山をおほふかすみのひまもりて

夕へさひしき入あひのかね

天随もともに

夕陽紅閃晚霞濃 暝靄深籠落雁峰 暮色蒼茫唯一氣

翠迷島島萬株松

帆影松光暮氣冥 鐘聲緩響隔林聽 洲汀取次模糊滅  
一抹澹煙紗樣青

となむ

夜にもなりぬ酒くみかはしつゝおのがじし好める道もてたのしぶ託  
寄孤舟は文をたゝかはし道人と天随とは詩を弄ぶ繞石は芭蕉を氣取  
り海枯人まろ然と綾孫赤人然たりそのさま紅葉散り櫻みだれ梅うつ  
ろふが如しある人聲はりあけて

詩酒平生不諱狂 今宵此會又飛觴 雲箋十丈墨龍躍  
七子才葩真擅場

と歌ふいまだ終らぬに座の一方より唐めいたる男傲然吟じて曰く

萬古奇愁欲問天 歌聲忽起一尊前 君看太白醉中趣

畢竟詩仙即酒仙

夜更けて宴やむみなくふしどに入りぬ繞石句あり



梅さいて誰か柴の戸ぞ灯のもるゝ、  
或人ねざめして、

ねさむれと枕にひしく音もなし

八十島かけて波やねふれる

どなむ、

つぎの日朝とく起いづ空くもりて風さへふきぬればおぼつかなしと  
みるほどに春さめ絲の如くふりいでぬ海の面はなべて霧の立ちたる  
やうなるもをかし今少し止まれとのわざならむとおもへどかひなし  
雨のあししめりゆく天随先づ詩あり

雨氣煙迷海色寒 曉來低嘯檻前看 四垂天白波痕暗

島影似龍雲裡蟠 薄雲成態忽寬舒 汀邊一雁飛迷處

響後西施情有餘 八〇青螺浮動初

ある人吟あり、

春雨や風呂場の軒に煙這ふ、

又ある人、

曉來何寺送鐘聲 雲壓松洲滅又明 海路波高歸不得

無情風雨太多情

洗面春潮一陣風 小欄干外曉葱々 鐘聲帶雨漁歌暗

八〇松洲烟霧中

空やうく晴れゆきてみえずなりつる島々やうやくあらはれはて  
は目の及ばぬ隈もなく今は只島のたいずまひ波の色繪にいと好くも  
似たるかな

雨歇洲汀無限清 松梢翠滴暝煙晴 一奩明水春潮穩

潭底蛟龍眠不驚

一段風光雨後奇 殘雲微罩古松枝 山青水碧嬌干畫



倚盡欄干阿筆遲  
詩筆當期千古傳  
變幻江山供眼前

地靈絕勝景成妍

彼蒼能解吾人意

いつまで眺めるたりとてはてしなからむと、その日ひる近き頃に、再び  
身ごしらへしぬ、さすがに名残のをしまれば、みなく、かへりみがちに  
立いで、かへり來ぬる、

つれもなく學びの道にいそがれて

なこりをしめどせんすべぞなき

波間よりみえしけしきぞかほりぬる

雪ふりにたり松か浦島

(千載集)

紅 雨 點 々

蝶

二

(一) 筑 波 風

富貴は浮べる雲の如く、榮華はうたかたの泡に似たり、清水寺の鐘の聲、  
地主權現の花の色、何れか常住をしめさむ、粒々辛苦の玉の汗、香郁々た  
る花の露には較ぶべくもあらず、日月鸞鳳の金の冠も、影皎々たる月の  
光には及ばじな、されば茲に、黃鳥白雪のあした、飛花落葉の夕、一杯の澁  
茶をすゝりて、古池の寂を味ふ我等が、樂みこそ久しけれ、運座句を吐く  
きは、連吟二萬三千句、住吉の社頭に、咳唾珠を飛ばし、翁もものかは、難  
波江のあまの藻鹽ならねど、心の泉酌めば、いよ／＼湧き、筑波の山の松  
のつま木ならねど、詞の林きれば、ますます／＼繁し、燭を秉つて、日をつけど



もなほ足らず、燈をかゝげつくしても、興は遂につきさりけり。さて、這般の真味を知らむと欲する者、三更月を踏で我等が門を敲くまでもなし。春の山邊の梢に囀る鳥の聲、秋の野の草葉に啣く虫の音まで、きけば心の友ならずや。

籬を隔て、水仙の香を聞く夜かな

(二) 手負猪 (玉藻紀行の一節)

峠にかゝりし頃は、光りうすき冬の日影、全く沈みて、闇は足もとよりひろがりぬ。さりとも思ひしことも、今はそらだのめ、一夜のやどり乞はばやど、心あてに樂みて來りし、一つ家は、たい四本丸木の堀立て、柱に萱葺きの軒傾き、壁もあらず、戸もあらず、古き一枚の筵を土間に敷きたるのみ。もとより常住の宿とは見え、おもふに、樵夫獵師などの雪を避けむが爲めに、設け置きたる小舎なるべし。露ふきこぼす風袂にすいしく、

草ひき結ぶ枕の上に、有明の月影落ちて、時鳥の一聲きくも、嬉しき頃の假寝の夢ならば、結はれもすべけれど、雪を吹きまく山風、峯よりおろしきて、寒さ身にしむ。今宵一夜を、とても斯かる破屋にて、明かざるべきにあらず。二里とは聞けど、降り坂なり。所詮麓に下るより、外にすべなしと心さだめつ、雪あかりをたよりに、からくも道をたどりぬ。腹は漸く空しきことを覺えて、寒さいよ、骨に透りぬ。なほ此上に雪ふりいでなば、われは凍え死に、死にやせむと、一人旅の淋しさを俄に覺えて、心ぼそきこと限りなし。折柄何處とも知れず、人の聲す。浮木に逢ひたる盲龜もかくや、あてなければ、さすがに頼もしく、猶進むまゝに聲は愈よ近う聞こゆ。さては行手の方にやあらむ、人か、と呼ぶに似たり。こは予にむかひて尋ぬる言葉なるか。あるは他の人にむかひて呼ぶ言葉なるか、それは確かならねど、かゝる折のならひ、人ありと知りては聲かけて見たく、われは思はず人なり、人なりと答へぬ。ほどふれども、かな



たは再び呼ばずなれり。さては思ひしにたがはで、われにむかひて呼びたるにや。  
 さるにても、人か、く、と、遠くの方より、聲かけしは如何なる故にかあらむ。心得がたきことなりけりと、さまざまに思ひまどひつゝ、半町ばかりも進みし頃、ふと前の方をすかし見るに、黒きものゝうごめくやうなり。さきの人聲を耳にせぬ前ならば、狼熊などの餌をもとめむとて我れを待つにかと、恐ろしき心も起るべきなれど、今はさる思ひなしと、かたく信じたれば、ためらひもせで近づき見れば、銃を肩にしたる一人の獵人のたちたるなりき。

かと呼ばれしは御身なりしか。いかにもわれなり。さは何故に呼ばれしや。さればなり、われ等は、この山の麓に住む獵人なるが、今宵一頭の野猪に手を負はし、まゝ、その姿を見失ひたれば、跡を慕うて今狩り出ださんとせるところなり。先ほど御身の足音をき、つけしより、さだめてわれらが見失ひし彼の猪なるべしと、既に發射たむとは思ひたりしが、少しく怪しう思はるゝまゝ、旅人などにてはあらぬかと、聲かけ見たるに、果して御身なりきまこと、に危かりしことよと、聞くに、われも思はず身の毛だちぬ。

獵人は猶も言葉をつぎて、このさきにも、二丁三丁が程を隔て、われ等が仲間のそこ此處に立ちて在れば、また誤まれたまひなば、御身の命危うし。されば、これよりは、わざと聲たて、歌などうたうて行き玉へと教へくるゝに、こはかたむけなしと、禮を述べて別れしが、それよりは、何となう氣味わるき心地のせられて、足すゝまず、唐うた吟する聲もうち



ふるひぬげに彼の狩人が言葉にたがはず、そのさき一里がほどは、十餘人の獵人間をへだて、立ち居たりぬ。われも、初めのうちこそおびえたり、後にはなかく、心に心強く覺え、旅の道づれ得たる思ひして、そを過ぐるごとに、一言ふたこと言葉かけなどしつやうく、麓に近くなりし頃、こだまに響く銃聲一發夜の寂寞を破つて、我が耳をつむぎきぬ。獵人等は手負の猪をまどめけるにやあらむ。

(三) 手飼の犬

桑田變じて滄海となる世は、飛鳥川のたとへにもれず、家に百萬の富を重ねて、使ひし奴僕も數知れざりしほどの分限長者の、あはれ一朝の失敗より、きのふの榮華を春の夜の夢と見て、世を秋草の露しげき野末の小家に、いとわびしく暮せるが、ありき萩の上風さびしく音づれて、訪ひ來る人のけはひもなく、今はたゞ昔より愛で養ひし一疋の犬の、いつま

でも側はなれず、かじづくのみ。雨窓玉したる晨、花間月清き夕、常にむかしのことのみまのばれて、浮世の人のつれなさに心もくづをれ、此をどこ、いつしか病の床のうち臥せしが、誰れみどりするものもなければ、日にまし重りゆくさまにて、やがてなき人の數に入りぬ。里の役所よりのは、からひにかたばかりの葬式行ひたれど、野べ送りの人は絶えてなぐ、たいかの犬の悲しげに、うちしほたれて、隨ひゆくのみ。つひには主人の墳墓の前にて、なき死に、死に失せしとかや、あはれ人のなさけの畜類にも劣りけるか。

(四) 辻占賣

淡路しま通ふ千鳥を、あはれなる音にたて、ちまたくを辻占賣り、ありく十歳ばかりのを、とめありけり。風こほる冬の夜なかも、雨そぼふる夏の夕も、をとめの聲のきこえざること、はなかりきある時は、意地わる



き童等に、乞巧の娘よと逐ひかけられ、またある時は、門もる犬に、恐ろし  
 き聲たて、吠えたてられ、いかにくやしきことのおほからむ。いかに悲  
 しきことのはなかりき。  
 月○き○よ○き○あ○る○夜○の○こ○と○な○り○け○り○。わ○れ○は○端○ち○か○く○出○で○、空○の○け○し○き○な  
 ど○眺○め○て○あ○り○け○る○が○は○や○つ○ね○の○時○刻○ど○な○り○に○た○れ○ど○、を○ど○め○の○聲○は○絶  
 え○て○き○こ○え○ず○。夜○も○や○う○く○更○け○ゆ○く○に○、さ○ら○に○來○る○べ○き○け○は○ひ○だ○に○な  
 し○。今○ま○で○は○一○た○び○も○休○み○し○こ○と○な○き○少○女○の○今○宵○に○限○り○て○來○ら○ざ○る○は、  
 い○か○な○る○故○に○か○あ○ら○む○若○し○い○た○づ○き○に○も○や○ど○思○ふ○ま○ま○に○、月○の○け○し○き  
 も○涙○に○く○も○る○心○地○し○て○お○も○し○ろ○か○ら○ず○。夜○の○ふ○す○ま○に○入○り○て○も○眠○ら○れ  
 ず○。長○き○夜○を○わ○づ○ら○い○あ○か○し○ぬ○あ○け○の○朝○つ○ど○め○て○學○び○の○舍○に○通○ふ○途○中  
 い○ど○む○さ○く○ろ○し○き○家○の○中○に○、恐○ろ○し○う○の○い○じ○る○女○の○聲○に○ま○じ○り○て○女○の  
 わ○ら○は○の○む○せ○ひ○泣○く○音○さ○へ○聞○こ○え○ぬ○。門○口○に○立○ち○け○る○人○に○む○か○ひ○て○こ

どのよしを尋ぬるに、夜ごと巻を辻占賣りありく此家のをとめのよべ  
 道にて意地わろき童らに追ひたてられ、賣り溜めし金さへ何處とも知  
 らず失ひて、泣くく歸りきにけるを、そが母の無慙にも、縛もて縛りあ  
 げて、からき目見するところなりよべ一夜は、少女の泣き聲たえざりき  
 とこたえぬあはれ世にはわが子の愛を金にかふる親もありけり。

(五) 斷腸

昔桓公と申す君ありけり。蜀といふ國に入りたまひける途、三峽の中に  
 て、其志もべのひとりが一匹の小猿を捕へたりぬ。母猿これを見るよ  
 り、岸の上に手を合して哀を乞ひ、かなしむこと限りなし。かくて百里あ  
 まりになりぬれども、母猿なほその船のあとを追うて、去るべきけはひ  
 も見えず。燒野のきいす夜の鶴子を思ふ道には、何れ迷はぬはなきもの  
 を、あはれを知らぬ下衆をのこら、かくまで慕ひきにける母猿の心をは



放ちやるべうも見えざりければ母猿も今はいかに嘆くともかひなし  
 どや思ひたりけむ遂に身を躍らして桓公の船に飛び乗り其まゝ息絶  
 えにけり無慙にもその腹をさきて見たるに腸すだくちぎれ居た  
 りぬ断腸といふ文字はこれより出でたるなりとぞ。

Flower in the cranied wall,

I pluck you out of the cranies,—

Hold you here, root and all, in my hand,

Little flower; but if I could understand

What you are, root and all, and all in all

I should know what God and man is!

断霞一片

天

随

むかし五城の地に在りしとき四方太纒石の二子と交を結ぶを得つ。渠  
 等は俳句を以て己に名を成し吾は詩を以て聊か同人の間に知られた  
 るなりきこゝにある偶然の事よりしておのゝ所長を交換し出来べ  
 くむば兼修して見むといふ議の起りしことあり實はほんの面白づく  
 よりして吾は俳を渠に學び渠は詩を吾に問ふことゝなりぬかくて數  
 月を経たる後兩者ともに成るべきけはひだに見えずまことや人に能  
 あり不能あり唯だ性の然るところは今更に曲くべきにあらず神代の  
 むかし海の幸と山の幸とを易へて尊が兄の釣針を失ひ玉ひきといふ  
 は古き文どもに見えつ扱ては西の國の聖の作れる物語の中に鶴は深  
 き壺の底までもつゝき得べきが狐は唯だ淺き皿に飲むべかりきとい



へるをさへおもひ出て、一笑して止めぬ。その折に日課のやうにして作りし俳句の数はいくばくかありけむ。今に存するは百に過ぎず、それとても黙にならぬものゝみぞ多かりけるを搔いやり棄てもえせず、半日の閑を偷みてかきあつめたる。物狂しきやうなれど、わがものなればいとも惜しくてなむ。

野の末にかすむ筑波の高さ寸餘

春雨や晴明この日齋戒す

花ちるや堂守ねむる椽の上

馬つなぐ公子の門のやなぎ哉

散る花を女の下駄の重き哉

梅二三本水竹藪をながれけり

忍 戀

物おもふ吾鶯にうとかりき

鶯去り茨に月の細く出し

鷓鴣啼いて雨の日暮るゝ焼野かな

夕暮を焼野の鳥啞々と呼ぶ

春風や貴人能樂堂に入る

寺に憩ひ社に休み春の旅日に七里

菜の花の鐘に暮れたり東山

梅白く柴門流水依然たり

虚空花ふり頻伽鳥舞ふ寺の庭

山里や梅の林のはや釣瓶

永き日や佛師の家の鑿の音

茶烟や野店の前に菜の花午

春風や象檻外に鼻をのばす



詩に狂し酒に狂し今花に狂す  
 瀑の上や岩黒くして躑躅咲く  
 白躑躅曉浄く赤躑躅夕艶なり  
 植木屋の躑躅の紫なると黄なると  
 蛸壺に蛸なく蝦を得つ汐干かな  
 姉貝をあさり妹石を拾ふ汐干かな  
 藪畑を一人打つなり小百姓  
 人招ねく昭君村のやなぎかな  
 村はづれ観音堂のさくらかな  
 鶏を聞かず驚うとき闇の中  
 蘭燈に歌妓の名をかく宵の春  
 會津東山にて  
 樓と樓の中をながるゝ春の水

春の夜を一壺の酒に歌ひけり  
 永き日や旅人上る榮螺堂  
 磴百級鐘樓ありてさくらかな  
 花の上にて電燈月よりも白し  
 花間徑あり意中の人に遇ふ  
 山くれて草むらに鳴くきゝす哉  
 桃の宿若き女のひとり居る  
 町中に梅一本のやしろかな  
 山吹や藪くらくして小雨ふる  
 古道や黄色のつゝ遅く咲く  
 時鳥月長松に落つる山  
 ほとゝぎす夜は松原に明けにけり



一步おくれ夏野に友と相失す  
 涼しさや夕潮みちて月出づる  
 そぼふるや飛ふ鷺さむき蓮の花  
 ちらほらと撫子咲きぬ小石原  
 浦風や須磨の古屋の青すだれ  
 鶴川ふけて二十日あまりの月出でぬ  
 葉柳や入江の岸の船普請  
 子々の蚊となり鯉の鵬となる  
 焼跡の假屋ならんで雲の峰  
 雲の峰地獄谷よりゆるぎ出ぬ  
 くもの峰晝の號砲市を震ふ  
 凌雲閣の上に雲の峰のくづれたる  
 鳴る神は雲の峰の崩る音なるべし

信濃路や桑の若葉に雨のふる  
 傾城の世帯しみてや鮮を壓す  
 去來鮮を壓し其角酒をかもす  
 石の上に僧晝寐して目醒めざる  
 見せ物の銅鑼かしましや夏の月  
 薩南客中京華の故人に寄す  
 戀もなし吾旅にして夏瘦す

秋風の三日旅してもどりけり  
 旅千里財布も空になりて秋  
 病む馬を河原に炙す秋の風  
 頂に秋の日残る函根かな  
 道一すぢ秋の蝶飛ぶ入日かな



蕎麥の花咲いて門田の夜明かな  
 朝ぎりの汽笛に晴れし港かな  
 蔀とちて獨りぬる夜の寒さかな  
 招く者狐かすゝき宵月夜  
 秋風や畦にはむけし豆の茨  
 かけ稻の裏道狭し暮の雨  
 辻堂のともしび揺らく砧かな  
 誰か墓に卒塔婆朽ちたるすゝき哉  
 鞍馬まれに夕は門の柳ちる

木枯や山の後の海の鳴る  
 木枯や五劍山より海を吹く  
 初霜に朝日つめたき豊かな

残る日や寺の後の茶の木原  
 しくるゝや志度の濱邊の黒木御所  
 銀鞍に狩衣ぬるゝしぐれかな  
 櫓の火やあるじの顔の刀創  
 日は西に我影長きかれ野哉  
 我あとに弦音ひゝくかれ野哉  
 ふみこめば落葉の下のながれかな  
 瘦せ村をめぐりて廣し冬木立  
 殘菊や紙すく家の窓の下  
 善き人に心おかるゝ火燧かな  
 冬の月火見櫓を離れけり  
 我眉の白きを伸ひし冬籠  
 冬籠在家の僧と名のりけり



落葉して古井戸一つ窪みけり  
 實盛の白髪をそむる小春かな  
 神無月銀杏の陰のほこらかな  
 髯黄なる宗祇が老の紙衣かな  
 錆刀荒砥を減らす音寒し  
 待たるゝを路の氷れる夜ぞ遅き  
 谿間に三十仞の瀑凍る  
 修行者の總髪白き師走かな



澁團扇

蝶

二

春の歌のうち

繩手道つゞく柳の下かげを

豆より小さう人霞みゆく

わらは等が笹舟ながす里川の

堤にけふる青柳の糸

小謠こたがひのふしは亂れておぼろ夜の

松原遠くこゑかすみゆく

落ちかゝる日影まばゆき足もとに

つゝむ花さく谷の崖みち

弟は兄が流しゝ笹ぶねを



すゝめくくと手をうちてゆく

水雲につゞけるあたりノへの

帆かけのどかに海暮れむとす

今たちし雲雀の姿空にきえて

筑波の山に霞たなびく

### 冬の歌のうち

かたゐらが葉のむしろをしきたへの

枕にかゝる小夜しぐれかな

ともすれば行く手の里のともし火を

見失ふまで雪ふりしきる

淡路しま通ふ千鳥を音にたてゝ

辻占賣る見こゑかれむとす

ばち音も糸もこほれる門附の

やれ三味線にあられたばしる

### 戀百首のうち

月影は槐に落つる君がかどに

立ちつくしたる夜半もありしを

君がその心の緒琴かなでいでゝ

戀に度せたるわれに聞かせよ

けがれなき君が心は山百合の

白きにやどる露の玉かな

乾きたるわが唇をゆるせかし

薔薇の色の君が頬じゝに

吾妹子が涙の雨のつゆをおびて



うしろ髪ひく門の青柳  
わが筆にたゞ戀のふみ戀の歌  
書けよとひとほは教へざりけむ

曉院鹿盧鳴露井。玉人夢斷梨雲冷。  
起開妝閣笑窺奩。月裏分明見娥影。  
自對猶憐況主家。春風一面斷腸花。  
何由鑄入青銅內。不遣秋霜換峨眉翠。

木の間の寺

天　　　　　隨

„Ritter, treue Schwesterliebe  
Widmet Euch dies Herz;  
Fordert keine andre Liebe,  
Denn es macht mir Schmerz.  
Ruhig mag ich Euch erscheinen,  
Ruhig gehen sehen.  
Eurer Augen stilles Weinen  
Kann ich nicht verstehen.

(Ritter Togenburg—Schiller)



仇の契はなかくに

はかなきものと知りぬれば

だゝはらからのおもひもて

まことを君にさゝげなむ

いさむ門出を送らむと

心しづかに來しものを

いかなれば君ものいふの

よろひの袖の露しけき

いらへもなさで打しほれ

おとめのことは聞き居しが

せまるおもひのあまりにや

力をこめてひきよせぬ

今はと駒にのりうつり

あまたのやから諸共に

さし行く方はどづくにの

千里雪げのそらさむし

醜とのゑみしを切り靡け

たてしいさははたぐひなく

その名はひくいにかづちや

おそれぬものぞなかりける

さはれ越方こひしくて

残しゝ妹をおもひ出で

涙にくもる月の下

夜をあかしゝもいくたびか



ひとゝせあまり忍ひしが

今は堪へずなりにけむ

いくさの友とひきはなれ

歩む旅路のながければ

八重の潮路の海原や

追手の風に送られて

妹がすむなる故郷に

うれしくはやも着きにけり

ありし垣根はくちはてい

かほり床しき花もなし

門ほどくどおとなへは

おもひ設けぬいらへきく

「君のたつぬる人はしも

夢の世うしと悟りけむ

緑の髪を削りおろし

たどりて入りぬ法の道

高き位もなにかせむ

あふるゝ富も路の塵

家のほまれの弓矢をも

なれし駒をもふりすてい

館やかたあれどもかへり見ず

いつくどもなくあくがれて

この世の望絶えぬれば



かしこの窓に妹の来て  
 戸を推しひらき寄りそひつ  
 月にも似たるそのすがた  
 むかしのまゝに照り出てい  
 わが居る方の谷底を  
 ながめ見おろす折こそよ  
 その折々のうれしさは  
 みづちの珠を得るにまし  
 いとやすくと夢に入り  
 さめし明日まで消へぬらし  
 浮世のげかれ身にそまらず  
 露のいのちをながらへて

木精とともに住みくちむ  
 松風きよく水ながる  
 谷間にむすぶ柴のいほ  
 仰く尾上の木の間より  
 かの尼寺ぞ見ゆるなる  
 まだしのゝめの朝より  
 夕のからすかへるまで  
 淋しさ忘れ唯だひとり  
 雲ゆく空に目をどいめ  
 心のどかに待ちくらす  
 神にねがひのやさしさよ



一〇日〇二〇日〇のか〇さ〇な〇れ〇ば〇  
年〇月〇あ〇また〇た〇す〇ぎ〇に〇け〇り〇

月にも似たるそのすがた  
むかしのまゝに照り出て、  
わが居る方の谷底を

ながめ見おろす折こそよ  
かく待ちつゝもあるあした  
尾上の寺をあふぎ見つ  
血の色なきか笑みを帯び  
この世の息は絶えてけり

筑波の落葉

蝶 二

引

酒池に遊び肉林に交りて、鄭聲燕舞に耳目を覆さむよりは、庭前の松の梢に不斷の樂を聴き、天上の桂の枝に常住の花をながめ、靜坐若を煎て自然の寂を味はむには。

春三十句

若餅に愛らしの妹が口もとや  
口鬚のこゝろもとなき雜煮かな  
三條の糸屋の娘手まりつく  
紅梅に襷袢ほしたる蕙家哉  
鶯の梅に戀する小庭かな



さりどては賤しの妹が手鞠唄  
里川に笹舟ながす日永かな  
水ぬるむ楊柳橋邊の霞みかな  
五家庄や平家の子孫畑打つ  
零落の身を花に來て泣く夜哉  
海棠の雨に灯ともす小窓かな  
花曇り今戸の煙雨となる  
雨にとぞす蘇小が門の柳かな  
蝶の羽に紅點じたる女かな  
夕餉たく煙の末や春の月  
雪解けや富山を出づる藥賣  
花嫁や畑打つ手のいたいけな  
満潮や雨になりゆく蜷船

春の雲五彩の雨を降らしけり  
夕月や白魚こぼるゝ井戸のはた  
猫の戀雨にふられてあはれなり  
春雨や王妃涙にくれたまふ  
靈廟の注連新たなり春の風  
海棠の宿や太守が嬖妾ひひめ  
春風や酒僧居眠る圓覺寺  
花の頃市に詩を賣る酒仙かな  
行春の財布はたいてしまひけり

待　戀

紅筆の文とゞきけり春の宵

悼　芦　水

梅は咲きぬ鶯は來ぬさりながら



花の都の賑ひはさぞ今朝の春

一とせ田舎に春を迎へけるととき都の友に送りける賀  
状のはしに

夏十句

曉の山 駕籠さむし 蟬の聲  
しぶき 飛ぶ 裏見の 瀧の 若葉かな  
蟬 鳴くや 松より 暮るゝ 志賀の海  
夏の月 仰いで 妹と 別れけり  
帆影 ちらく 若葉の上を 舟の行く  
短夜の 枕に 残る 浮名かな  
全盛の 晝寝の 部屋や 伽羅枕  
わつばらの 簀むしりたる 毛虫かな

蝙蝠のしどろもどろに日は暮れぬ

知恩院にて

鐘古りてたゞ鶯の老を啼く

秋十句

秋雨や人を集むる角の聲  
落人の矢疵になやむ秋の雨  
虫賣の 嵯峨野を 出づる 夜明かな  
漸寒う 徹夜の 油つきむとす  
夕月や 妹が 肌のいと 白き  
秋の山 同行 一人 失いぬ  
秋風や 荒野のはてに 矢一筋  
屋嶋浦にて



秋風や浪にもまるゝ平家蟹

宮島にて

鹿鳴くや百八廻廊月白き

天草富岡にて

吳も見えずまた越も見えずけふの雨

冬二十句

山賊の貌眞赤なる櫓火かな  
牛の脊に日のあたゝかき小春かな  
時めきし太守が庭の落葉かな  
夕日赤き東照宮の落葉かな  
寒月や八百八町屋根の霜  
初冬や灰によごれし猫の貌

寒垢離や聖天の森に月黒き  
黒塚や鬮體に冴ゆる冬の月  
傾城の寝顔老たり冬の蠅  
猫の貌に足袋かぶせたる童かな  
文机に香など焚いて冬籠  
氷る夜を去られてもどる女かな  
星冴えて長江靜に流れけり  
晝を抜けて吹雪にむかふ奔馬かな  
落人や伏見の里の夜の雪  
眉刷毛のおしろい凍るあしたかな  
狐めに貌なでられし枯野かな  
行年の三十六峯眠りけり  
行年を頬杖ついて眺めけり



悼 猩々  
なれ 逝いて 上野の 森は 冬枯れし

縁しも 夏の 手には 觸れつゝ、

いかに 言葉の 盡そら 事なる。

一夜あふぎの名にあやからば、

解けて 心の うちには 語らむ。

(……………也有)

波山躋攀録

天 隨

游 筑 波 記

關左之地、沃野瀰茫、無丘阜礙眼者、而劃立其東端者、實爲筑波山、余在東都、  
濯水之曉、瀑谿之暮、望之白櫻錦楓外、雙尖擎天、翠鬢似梳、嫺有意態、神情屢  
馳而未得一游、以爲憾焉、今茲丁酉一月、得小暇、遂決意與友人中目覺俱發、  
卅日昧爽出寓、取水戶街道、亭午至小金、爲古昔將軍蒐狩之地、此日天陰欲  
雪、北風如剪、苦寒不堪、所過皆隴畝、冬景蕭然、筑波翠黛、隱見于樹梢間耳、至  
我孫子、南望手賀沼、波光混漾、夕陽映發、乃成佳趣、至藤代、距京凡十二里、時已  
黃昏、駕漁車、電走六里、初更達土浦、投宿、卅一日、朗霽晨發、出驛、霞浦半面、皎  
然在目、然平衍無遠矚、聞西施崗實爲其地、登臨恣矚、移時而去、二里至藤澤



郊外有藤藤房埋髻冢，往拜焉。又有小田城址，即准后親房據守之地云。又三里，至北條，其間波山常在右方，追隨不離。至神郡南麓一小村也，仰見山腹，屋舍櫛比，碧甍白壁，相映宛一幅山市。晴嵐圖也，半里抵筑波市，投旗亭呼飯，憩息移時，輕裝而出。筑波祠規模宏壯，頗為可觀。祠後有二路，便道取近，自其左者，先至陽峰，滿山皆老杉，概數百年物，嵐氣撲人，而石徑磽確，迤邐紆曲，凭杖登呼，呼吸喘逆，漸覺苦艱。每十町有葭屋，可憩，但冬時無人，待客者，路傍有一泉，滴瀝洩於巖罅，即古歌所謂美那濃川發源處，清冽可掬，味欺神瀆。登四百餘弓，至絕頂，稍坦夷，有央嶽祠，仰之兩峰益峻，巨巖大石，重疊累積，殊極崿巖。踞崿之趣，祠傍有五亭，皆煮茗鬻餅，以俟養者。過之直登陽峰，躡巖角，攀樹枝，遂窮最高頂，有男體祠，俯見雲鳥，矚望少時，既降，又攀陰峰，途履殘雪，其峻可知。頂安女體祠，蓋男體女體，謂諾冊二神也。祠後峰皆突出，臨壑削立，身在萬仞，上面平如席，可坐憩焉。眺觀軒曠，足羽椎尾，加波諸山皆筑波之支裔，似兒孫戲膝下，自北而西，那須高原，日光秩父等起伏聯亘，各闢高低，西南遙望足柄

函根，其缺處富嶽雲帳下垂，半腹以上方在隱約間，脚下漲碧萬頃，是為東京灣。鹿野鋸山之脚，延入其中，為岬崎，為洲汀，彎環屈曲，白帆如鷺，東則霞浦之水，鹿島之洋，波色一白，直與天接，其間通邑大都，亭驛道路，川流丘阜，曠野平林，煙火攢簇，青綠白繞，縹緲無際，關左八大州之地，歷歷可觀。余於是慨然，顧謂同游曰：美哉江山，古稱八州，能敵天下，今觀其地勢，山河環帶，四塞天府之地也。源平氏以後，豪雄爭鹿者，多於此土，豐太閤不世出之雄也，亦知其然，勸德川氏定居於江戶，明治中興，首遷龍駕者，良有以也。嗟乎，昔日虎擊龍鬪者，其骨皆已朽矣，而荒僻之野，變為錦繡之區，九原若可起，則古人果為何感，言畢，舉頭疾風拂面，暗雲紛飛，無一所見，乃降山時，雪片飄空，亂絮撲衣，乍想見武田正生等據守奮戰之時也。自是歸筑波，凡二里，即右方賽路也。危險更甚，途多奇石怪巖，就中大神巖高數丈，兀然怪偉，如人箕踞，次者為太黑巖，渾身肥大，左肩負囊，右手揮槌，形貌酷肖，次者為船巖，作巨鱷出港，舉之勢，石間路絕，自然有竇穴，可往來者三處，初者曰北斗石，甚小，不足記，次曰胎內竇，長十



數間高數尺，匍匐而過。後者曰石門，俗稱辨慶返。蓋取勇者危懼却走之義也。峭巖屹立，其間通人頭。上有大石三，邊懸空，以扼門勢，真造化一奇戲也。石門之上，有稻村祠，石壁如削，躡梯上下，而蘇石滑趾處，往往有鐵鎖，攀援昇降焉。但以全山不石，比之庚申妙義，大有逕庭也。要之斯山，雖不甚高，淑靈深邃之趣，眺觀壯宏之狀，冠于關左。聞秋天澄爽之日，可能望陸奧之磐梯、湯殿、金華諸山。然則眼界所及，殆將數十州。賽者之不絕職，此之由耳。須臾雪歇，歸抵筑波，宿前之旗亭，翌雨，道路泥滑，終日急行，僅八里宿境。其翌雨歇，午買舟，下刀根川，過鴻臺下，日乃暝，舟行十數里，達二州橋下，乘舟初更歸寓。此行僅四日，能償素志，因想自今而後，觀櫻江、東賞楓郭北之時，必有故人自天末揖者，更加一層風趣，遂爲之記。詩凡廿首，別錄。

常州道中

滿眼風塵首幾搔，山川寧厭客行勞。  
出都便覺吟懷豁。

馬耳雙尖天半高。  
雲蔽荒原鷓鴣盤。  
八萬貔貅馳騁看。  
吟續文山正氣歌。  
流水滔滔奈恨何。  
紅曦射水水無涯。  
西施岡上立多時。  
略同山甫輔宣王。  
隴頭春冷野梅香。  
孤城落日陣雲愁。  
椽如史筆學春秋。

斜陽影暗馬嘶寒。  
小金原  
中興偉業首功多。  
渡刀水  
湖鏡半匿烟霧披。  
士浦  
三諫不容吁可傷。  
埋髻塔  
衰老猶存社稷憂。  
小田城址  
賊子亂臣肝膽破。

往時蒐狩閱兵處。  
斯人已逝隨流水。  
領景雨奇晴好外。  
埋髻塔殘蹤跡古。

筑波雜詩



莽蒼杳無際，寸碧摩遙空。秀靈起斯嶽，作鎮函關東。憶哉溼上曉，花外朝瞰紅。  
 烟消澹翠出，玄想凝神融。夙牽躋攀志，幾歲塵途窮。我今行循麓，翹首攀崆峒。  
 天半青鬱茂，金碧輝仙宮。粹然萬古翠，佳氣晴葱蔥。宿志正堪償，逸興心飛冲。  
 魂也既縈頂，俯瞰關河雄。  
 幽徑從祠背，杖屐廻羊腸。山深踏落葉，瀑枯巖峽荒。樵歌晝蕭寂，丹井蹤杳茫。  
 朗吟震林木，返響何琅琅。靈山絕魔跡，老松遮日光。石氣凝欲雨，片雲雙袖涼。  
 薛蘿可以縮，瘡痛無以傷。神漢醫我渴，天風翻我裳。絕巖跳可到，壯氣衝空蒼。  
 雙峰極罕寡，身疑鸞鶴翔。  
 雲鳥翔脚下，蔑視元龍樓。杳杳八州野，尺寸千里收。山勢若奔馬，走到東奧陬。  
 西南地脈斷，萬古江海流。昔日荒曠土，千載風露秋。英雄幾逐鹿，霸略都浮漚。  
 神京定寶鼎，中興宏德周。蠻夷悉潛伏，邦基似金甌。傳哀北闕檄，太任仙界遊。  
 泣向蒼茫際，雲物天地愁。  
 鐵鎖斗垂處，鞋底青巉巖。披髮身倒落，斜陽深壑銜。風聲破靈洞，雲氣生幽巖。

古祠倚崖腹，誰啓仙人函。石門屹當路，怪異疑神剗。設之隔塵俗，造化何所監。  
 采藥者誰子，相伴持長鑱。迎見談太古，語語真超凡。仙禽日暮寂，鐘韻穿林杉。  
 目送去何處，碧霧千峰緘。  
 山樓伸倦脚，半日登躋勞。凭欄撫幽景，吟邊傾斗醪。下方斷鐘杳，暝色浮烟阜。  
 中谷幽霧吐，老臯時一號。虬鼓百靈下，祠殿燒金膏。神鏡皎然照，應有魑魅逃。  
 夜深轉森肅，後壑清猿噪。幽人被衣起，何處聽啾嘈。天風和泉響，松柏鳴寒濤。  
 仙客乘鶴去，瑤天月輪高。

筑波四時詞

彷彿巫山神女臺，朝雲暮雨日相催。香風吹滿華陽洞，  
 勾引仙郎不使回。  
 玉管遏雲餘韻長，瑤臺月下醉瓊漿。夜深把手躡虛去，  
 人界洩聞天語涼。



吹罷鳳笙風露寒  
樓閣琉璃界裡看  
銀臺瑤闕雪中參  
巧將玉指擘黃柑  
秦家弄玉倚珠欄  
碧雲明月秋天迴  
翠帳護寒仙醴甘  
解事靈童能待宴

舟中雜詩

江天卓午麗晴暉  
一碧波平白鷺飛  
沙樹隔看空際翠  
筑波山色送吾歸  
汀上枯蘆戰晚風  
江水生寒漁艇去  
天邊暝色送孤鴻  
殘雨痕迷杳靄間  
岸上歸鴉飛數點  
吟愁都付笛聲中  
江邊樹色帶雲斑  
鐘聲送出夕陽山  
月明崖樹俯清流  
洞簫聲裡天如水  
也似當年赤壁舟

應有魚龍夜出游  
扁舟一葉趁江潮  
百里歸程吟興饒  
兩岸樓臺燈火閃  
篙人指點二州橋





藻 かり 舟 終

明治三十三年七月十九日印刷  
明治三十三年七月廿三日發行

全價金參拾錢



著者	著者	發行者	印刷者	發行所	發行所	印刷所
文學士 久保 得二	文學士 中内 義一	東京市日本橋區本銀町三丁目二番地 福岡 元治郎	東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 戸上 義章	大阪市南區心齋橋北詰八十九番屋敷 鐘美堂 本店 特電話(東百三十二番)	東京市日本橋區本銀町三丁目二番地 鐘美堂 支店 特電話(本局百〇三番)	東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 秀英舎 第一工場



大賣捌所

東京市神田區表神保町三番地

東京堂

特電話(本局二百四十八番)

大賣捌所

東京市神田區維子町三十二番地

岡崎屋書店

特電話(本局百四十八番)

大賣捌所

東京市日本橋區本銀町三丁目

太洋堂書店

諸大家先生肖像入

(近刊)

# 先覺詞藻

全壹冊洋裝  
頗美本

先覺は國の燈火にして、國民は暗夜に迎る旅人也。故に若し先覺の指導に従はず其の聲を聞くに踟躕するの國民あらばそは暗愚なる國民にして又迷へる國民也。シエークスピアを以て人類歴史の花なりとして誇り、カーライルを以て國民の教師なりとして敬慕措かざる英人と、而して野に叫ぶ聲に聞く能はざりし猶太人の末路とは直に以て吾人の鑑となすべし。本書は提雲氏が故山の青年に頒たんとして**犬養、徳富、陸、竹越、福本、三宅、横井、浮田、島田、松村、尾崎**等の諸先生より其の文章を乞ひ得て一蒐せるもの、而して弊店が更に之を乞ふて江湖讀書の士に頒たんとするもの也。



末松謙澄 幸田露伴 貝原華山 高田早苗 後藤宙外  
内藤湖南 朝比奈知泉 島村抱月 其他諸大家

綠 陰 涼 風

近刊 菊判半裁袖珍片  
洋裝頗美  
全壹冊

羽陰氏が當代の諸大家に乞ふて得たる所、十數氏の名什雅編集めて  
此中にあり、積翠滴るの下涼風渡る所此書を繙かば、座がらにして當  
代の諸大家と談笑するを得べし青年諸氏奮つて愛讀の榮を給ふを  
得ば唯に羽陰氏の宿望達せらるゝのみならず弊堂が微力を以て斯  
る名編を社會に捧ぐるを得る、光榮に孤負せざるもの也



